

報告書

「松戸市における保育の表現指導の実践的研究」

H 2 5, 2 6 年度研究代表者：北沢昌代（聖徳大学短期大学部 保育科講師）

H 2 5 年度共同研究者：大成哲雄（聖徳大学 児童学部准教授）

H 2 6 年度共同研究者：永井妙子（聖徳大学短期大学部 保育科教授）

梶瑞希子（聖徳大学大学院 教職研究科教授）

大成哲雄（聖徳大学 児童学部准教授）

関口明子（聖徳大学 児童学部准教授）

野上遊夏（聖徳大学 児童学部准教授）

1. はじめに

P 1

2. 第 1 回子どものアート研究会「粘土を使った活動を考える」（平成 25 年度）

P 4

3. 第 2 回子どものアート研究会テーマ「芸術士と語ろう

～子どもたちの創造性を育む文化芸術の役割について～」（平成 26 年度）

P 16

(1)「色を感じる」

高松市芸術士による松戸市の保育士、学生のための公開ワークショップ

P 17

(2)シンポジウム「芸術士が見たレッジョ・エミリア

～松戸で芸術士派遣事業を考える～」

P 23

(3)「動物づくり」地域保育所におけるワークショップ

P 66

4. 第 3 回子どものアート研究会「つくりたいものつくろう！」（平成 26 年度）

P 74

5. 学生ボランティアの記録

P 95

6. まとめ

P 99

第1回子どものアート研究会「粘土を使った活動を考える」(平成25年度)



「粘土を使った活動を考える」活動風景

3. 第2回子どものアート研究会テーマ「芸術士と語ろう」(平成26年度)

～子どもたちの創造性を育む文化芸術の役割について～

芸術士と語ろう

～子どもたちの創造性を育む文化芸術の役割について～

■芸術士とは…
…子どもたちの芸術表現をサポートするアートの専門職です。
香川県高松市では、地域のアーティストを、「芸術士」として定期的に市内の保育所等に派遣し、子どもたちの興味や芸術表現をサポート、記録し、アートを取り入れた活動を行っています。活動は、保育や教育の枠にとどまらず、地域を巻き込んだまちづくりにも貢献する取り組みに発展しています。
高松市では、このような「芸術士派遣事業」をイタリアの「レッジ・エミリア・アプローチ」という幼児教育の考え方を参考に2009年にスタートさせました。全国的にも初めての取り組みであり、保育や美術教育関係者からも注目されています。
今回は松戸市に高松市から「芸術士」を招き、子どもたちの創造性を育む文化芸術の役割について考えてみたいと思います。
「芸術士のいる保育所」 <http://geijyutsushi.archipelago.or.jp/>

平成26年 9月23日 (祝)

am 「子どものアート研究会」
「色を感じる」 高松市芸術士による松戸の保育士、学生のための公開ワークショップ
10時～11時30分
会場 聖徳大学7号館 7232教室
JR松戸駅東口 徒歩5分
■コーディネーター
北沢昌代(聖徳大学短期大学部 専任講師)
■講師
太田絵美子(高松市芸術士・NPO法人アーキペラゴ)
阿部麻海(元高松市芸術士)
伊藤修子(元高松市芸術士)
観覧希望 先着15名 無料
※要予約 聖徳大学美術研究室迄
主催/ 聖徳大学短期大学部 COC事業
<http://www.seitoku.ac.jp/chizai/coc/>
■問い合わせ 聖徳大学美術研究室 047-365-1111(大代)
(担当・北沢、大成)
松戸市 文化観光課 047-366-7327

pm シンポジウム
「芸術士が見たレッジ・エミリア
～松戸で芸術士派遣事業を考える～」
13時30分～16時30分(13時開場)
会場 聖徳大学1号館 香順メディアホール
参加費 無料 定員100名(申し込み不要)
■コーディネーター
大成哲雄(聖徳大学 准教授)
■パネリスト
太田絵美子(高松市芸術士・NPO法人アーキペラゴ)
阿部麻海・伊藤修子(元高松市芸術士)
■コメンテーター
三澤一実(武蔵野美術大学 教授
「旅するムサビプロジェクト」主宰)
楠瑞希子(聖徳大学大学院 教職研究科 教授・保育学)
庄子涉(松戸まちづくり会議 「暮らしの芸術都市」)
白井薫(松戸市 文化観光課)
■16時40分～17時40分 意見交換会
主催/ 聖徳大学短期大学部 COC事業
共催/ 全国大学造形美術教育教員養成協議会
松戸まちづくり会議 (PARADISE AIR)
協力/ 聖徳大学生涯学習研究所

「芸術士と語ろう」チラシ



公開ワークショップ「色を感じる」活動風景
シンポジウム「芸術士が見たレッジョ・エミリア～松戸で
芸術士派遣事業を考える～」の発表風景





ワークショップ「動物つくり」活動風景

第3回 子どものアート研究会
公開研究保育
つくりたいものつくろう！

日時 平成27年 1月31日(土)
10時~12時15分(受付 9時30分~)

会場 聖徳大学7号館 7232教室(図工室)

観覧希望 先着30名 参加費無料

要予約 聖徳大学美術研究室迄 047-365-1111(大代)

※定員になり次第締め切らせて頂きます。(上履き持参)

主催 聖徳大学短期大学部COC事業/協力 松戸市
<http://www.seitoku.ac.jp/chizai/coc/>

「子どものアート研究会」は、明日を担う子どもたちの「生きる力」を育むような造形活動を主体とした保育の在り方を市内の保育士、学生、市民らと共に考えてきました。

今回は、「つくりたいものつくろう！」をテーマに保育士と「きぼうのたから」、「KEYAKIDS」園児が参加し、聖徳大学で公開研究保育を行います。活動の過程が学びとなる保育とドキュメントの重要性を提案し、保育士、学生、市民、観覧者と共に、これからの子どもの造形活動について討議します。

公開保育実施者

石川康代(松戸市 保育園きぼうのたから園長)

平成9年聖徳大学短期大学部保育科卒業。私立幼稚園に4年間勤務。一斉指導の造形活動に疑問を抱き、退職後、平成13年、松戸で「工作教室けやき」創設。工作教室は少人数制で主に廃材を使った自由工作を行う。平成16年造形活動を中心に据えた認可外保育施設(現在のKEYAKIDS)に移行。平成18年みらいキッズ有限会社を設立し、認可外保育施設の運営を担う。平成24年認可保育園「きぼうのたから」園長に就任。平成25年小規模保育事業「KEYAKIDS ベビールーム」開園。現在に至る。

ドキュメント担当 生沼有香(保育園きぼうのたから保育士 聖徳大学短期大学部卒業)

高木優里(KEYAKIDS 園長 聖徳大学児童学科卒業)

大和田友紀美(KEYAKIDS 保育士 聖徳大学児童学科卒業)

指導助言 北沢昌代(聖徳大学短期大学部専任講師) 大成哲雄(聖徳大学児童学部准教授)



公開研究保育「つくりたいものつくろう！」チラシ



公開研究保育「つくりたいものつくろう」活動風景

1. はじめに

聖徳大学短期大学部では、平成 25 年度より文部科学省COC事業（*1）「信頼と共感でつなぐ“ふるさと松戸”づくりー多主体間協働でー」（*2）をテーマとした取組を行っている。

筆者は、本事業の地域志向研究として平成 25、26 年度「松戸市における保育の表現指導の実践的研究」に取り組んだ。（25年度は「松戸市における保育の造形表現指導の実践的研究」）



(1) 取組の概要

本研究は、松戸市の保育者と学生が協働して行う地域の特色を生かした造形表現指導の実践的研究である。目的は、大学と幼稚園、保育所等のネットワークの構築、学生の知識や実践力、仕事力（コンピテンシー）の向上にある。これらの活動のために、松戸市の保育者と学生による「こどものアート研究会」を創設して活動する。

【担当者】

H25年度

研究代表者：北沢 昌代

共同研究者：大成哲雄(児童学部)

H26年度

研究代表者：北沢 昌代

共同研究者：永井妙子(保育科) 梶瑞希子(教職大学院) 大成 哲雄 関口明子 野上遊夏(児童学部)

*平成 25 年度の課題として、幅広い視点の研究の必要性から、他領域の専門教員が共同研究者として参加した。

【目的】

- ・松戸市の保育者と学生が協働して、地域の特色を生かした造形表現指導の開発を行う。
- ・大学と地域の幼稚園、保育所等のネットワークを構築し、信頼と共感のある保育環境を整備する。
- ・学生ボランティアの派遣で地域貢献することにより、知識や実践力、仕事力（コンピテンシー）を向上させる。

【造形表現教育の課題 取り組みの必要性】

保育科の教員である筆者は、学生の実践力や松戸市の保育の質の向上等を目的として今まで様々な取り組みを行なって来た。「アートパーク」(*3)への参加や、学生が地域の保育所でワークショップを行うなどのボランティア活動もその1つである。これらの活動により、学生は授業で学んだことを基礎に、実践的な体験を得て、実習等に生かすことができた。今後は、より多くの学生を受け入れ、巻き込んでいくような活動を考える必要がある。

また、松戸市の幼稚園、保育所等に目を向けると、大学と相互のネットワークを構築し、信頼と共感のある保育環境を整備することや、地域の特色を生かした優れた造形表現指導の実践例を紹介し、地域

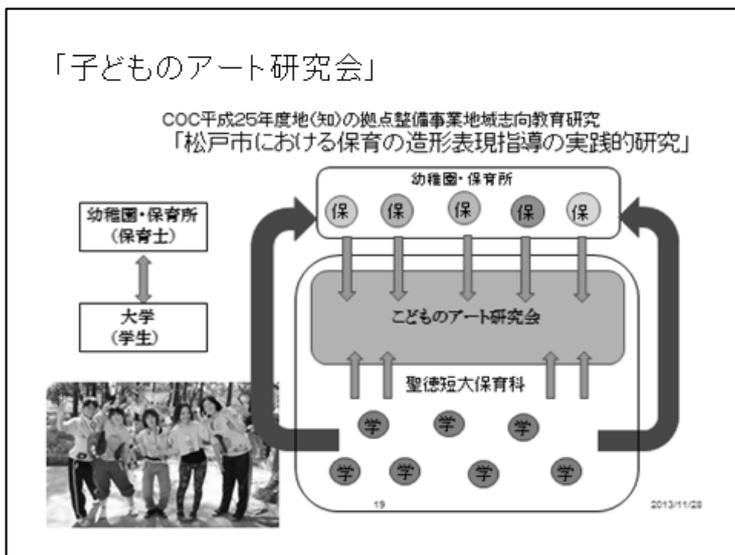
の子育て力の向上に貢献する必要性を感じている。

以上の課題を鑑み、松戸市の保育者と学生で「子どものアート研究会」を創設し、課題に取り組むことにした。保育者と学生が協働し、地域の特徴を生かした造形表現指導の新たな実践事例を開発する。

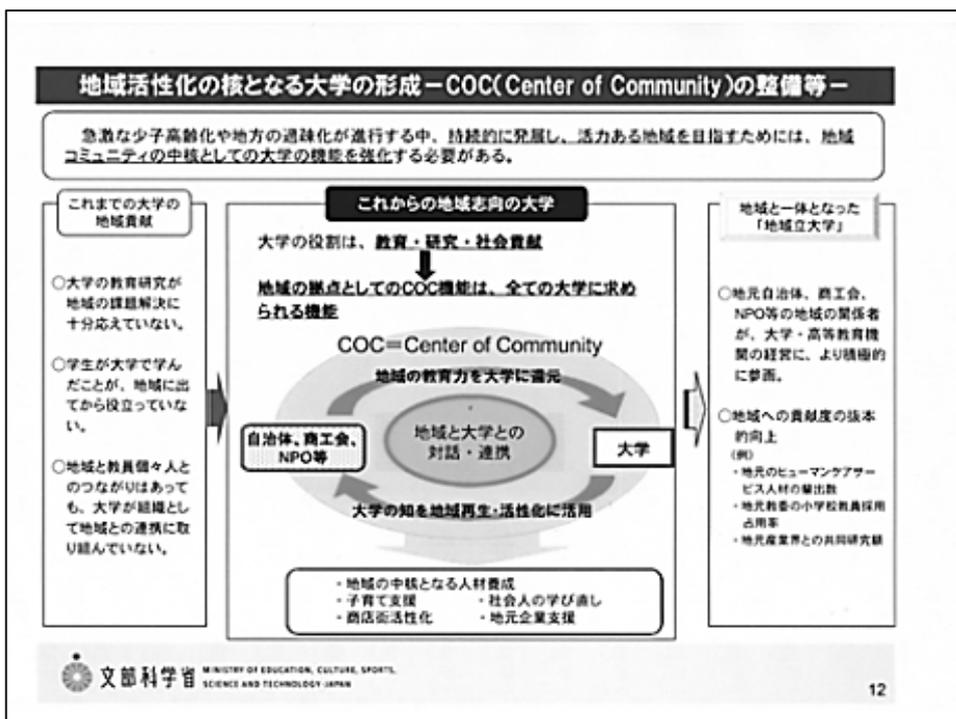
研究会は学内で実施し、学生も参加できる時間帯、参加は自由とすることで、課題の1つであるより多くの学生が参加できるような活動にする。協働することにより松戸市の保育者の質の向上とともに、知識や社会性、実践力、仕事力（コンピテンシー）のある学生を育成することができる。

この研究会の名称を、「子どものアート研究会」としたのは、アートとは本来、芸術や美術の内容で使用され、芸術は表現者と鑑賞者が互いに作用し合うことで精神的・感覚的な変動を得ようとする活動のことであり、文芸、美術、音楽、演劇などを指すものである。このような視点においては子どもの表現も芸術表現であり、内容に相応しいアートという言葉を使用することにした。地域の特徴を生かすとは、

松戸市の特色ある人材（地元アーティストや保育者）を活用したり、自然と都市機能を併せ持つような松戸市の環境を生かすことである。松戸市は「暮らしの芸術都市」を掲げ、日常的な生活の営みと芸術をつなぐ取り組みを展開している。アートを主体とした保育をテーマにすることは松戸市の政策とも関連し、地域の特徴を生かすことにもつながる。



【「子どものアート研究会」組織図】



【参考】

* 1 地(知)の拠点整備事業(COC)について

(COC構造図)
文部科学省の整備事業であるCOCとは「Center of Community」の略で、これからの大学の役割は、地域に根ざした教育・研究・社会貢献を担うことが役割であるとしている。COC事業の採択を受けている大学は、25年度では、全国で56校、私立の短期大学にあっては、全国で2校（本校と和歌山信愛女子短期大学）のみの取り組みである。

信頼と共感でつなぐ“ふるさと松戸”づくり — 多主体間協働で —

事業概要

大学の知的資源と学生の活力を地域貢献の核として、行政及び市内の商工業団体、教育機関、NPOが多主体間連携をし、信頼と共感でつなぐ「ふるさと松戸」を作る試



* 2 「信頼と共感でつなぐ“ふるさと松戸”づくり—多主体間協働で—」 (事業概要)

短期大学部では、地域の歴史を紹介する、かるた製作や、地場産業の活性化、地域の子育て力の向上等を目指して「社会貢献の理論と実践」「地域貢献の実践」の授業を創設し、学生全員が松戸市の保育施設に行き、フィールドワークを通して学ぶ授業を実施している。



* 3 「アートパーク」

「子どものアート研究会」は、H26年で7回目となるアートパークの実践が基となっている。アートパークは、公園の活性化や子どもたちの豊かな遊びの体験、また、学生の実践力の向上をねらいとして、大学前の松戸中央公園で行っている。

保育科では、毎年有志参加を行っているが、3年前からは地域の保育所と学生が協働してワークショップを実施している。その延長に、「子どものアート研究会」が構想された。

2. 第1回子どものアート研究会「粘土を使った活動を考える」

平成25年度 地(知)の拠点整備事業 地域志向教育研究
「松戸市における保育の造形表現指導の実践的研究」

日時 平成26年2月2日(日) 13:00~15:30

場所 7232 教室

目的 幼児が、粘土を教材として活動したり表現する意義や育つ力
について、地域の保育者、学生が実技を通して共に研究する。

参加者 保育者7名

学生5名

外部講師 小串 里子 (幼児教育研究家 *4)

アシスタント 小笠原 真子 (陶芸家 幼児教育)

記録・撮影 常富 梨絵 (中学校美術科非常勤講師)

大学教員 北沢 昌代 (保育科)

大成 哲雄 (児童学部)

四海 成美 (美術研究室副手)

*他、子ども3名

*見学者：美術科主任小泉卓教授、保育科榊瑞希子教授

準備 粘土(普土)200kg、密閉ケース(粘土用)、ビニールシート、ベニヤ板(8枚)、
ガムテープ、霧吹き、ヘラ、スキッパー、粘土切り、バケツ、タオル、CD、CDラジカセ、
参加者服装、準備 汚れても良い服装(ズボン)、タオル、



【参考】

*4 小串里子講師プロフィール

1929年生まれ。知的障がい児のための公立学校の美術教師としての草分け的存在。

自身も現代美術の創作活動を行ってきた。現代日本美術展(1968)、シェル美術賞展(1967)、ジャパンアートフェスティバル・マルセイユ・ミュンヘン(1967)、第1回現代国際彫刻展(箱根彫刻の森美術館、1969)などに出品。万人のための美術展(こどもの城、1997)野原でワークショップ(横須賀美術館予定地、2001)、ワクのない表現展およびワークショップ(愛知県児童総合センター、2001)みんなのアートワークショップ展(大宮つぼみ・もとの木保育園の造形展)(さいたま市・氷川の杜文化館、2009)を企画。2006年には越後妻有アートトリエンナーレで守屋行彬氏(インスタレーション担当)と出品。各地の子どもたちや一般来場者が参加するワークショップを行う。著書に、『ワクのない表現教室(自己創出力の美術教育)』(フィルムアート社、2000)がある。元武蔵野美術大学非常勤講師(美術教育法)

(1)挨拶・講師紹介

(2)大学と地域の連携の意義について（概要）

近年、異校種間、地域との連携による学びが盛んに行われるようになった。要因は、社会的背景や連携協力を支える法的な整備があげられる。また、学習指導要領の改善の基本方針(平成20年1月中央審議会答申)には「創造性をはぐくむ造形体験の充実を図りながら、形や色などによるコミュニケーションを通して、生活や社会と豊かにかかわる態度をはぐくみ、生活を美しく豊かにする造形や美術の働きを実感させるような指導を重視する」とあり、教員養成の観点からは、生活や美術の働きについて実感させるような体験的学習や連携協力による学習を企画できるような能力を身につける教員養成が必要となると考えられる。

このような点から、保育科の教員養成においても、アートパーク(*3)への参加を中心として積極的に幼稚園、保育所等、地域とのかかわりを持ち、学生の資質能力の向上に努めてきた。

現在までの取り組みを振り返り、連携の在り方は、アートパークを中心として、その前後の活動へと展開し、日常的で継続性のある取組へと移行してきていることが分かる。また、このような取り組みが活発なものになるには、大学と幼稚園、保育所等、地域が多主体の関係で連携し合う意義を、互いに了解することの重要性をこれまでの取り組みから感じた。

ここで、保育者、子ども、学生、大学、地域の視点から、それぞれの立場でどのような学びやメリットがあるのかを整理した。このまとめは、筆者が小学校、中学校、高等学校との取り組みで行った実践も含め、大学と異校種間や地域との取組からまとめたものである。

○大学の視点（求められる教員養成）

- ・積極性、意欲、自律的な学生の育成。
- ・社会性、実践力を身に着けた教員の養成。
- ・地域と学校を結びつける力（ファシリテーション能力）のある教員の養成。

○学生の視点から見た学び

- ・大学の授業で学んだ専門を活かした題材の開発。
- ・実際に子どもたちに授業（活動）をして学んだことを実践力に結びつける。
- ・子どもたちと交流して子どもを知る。（子ども理解）
- ・教師（保育者）の仕事を知る。
- ・教師（保育者）の指導技術を学ぶ。

○現場教員（保育者）の視点からみた学び

- ・現場に新しい風を送り込むことができる。
- ・教師自身の題材研究のきっかけとなる。
- ・学生の専門性を活かした題材から教師（保育者）自身も吸収できる。
- ・学生指導によって教師（保育者）自身の授業を振り返る機会となる。
- ・学生とのコミュニケーションが生まれる。教えることを楽しむ。

○子どもの視点から見た学び

- ・年齢の近いお兄さんお姉さんが来てくれて楽しい。

- ・学生の存在が刺激になる。
- ・新しい発想のヒントになる。
- ・子どもの意欲が高まる。

○地域の視点から見たメリット

- ・地域の活性化。学生から刺激を受ける。
- ・学生が地域に関心を持つ。
- ・学生ボランティアの活用。
- ・大学との連携で、経済的な協力も可能になる。



このように、互いが学び合ったり、メリットのある活動であることが、日常的、継続的な活動につながる要素であることが分かった。また、連携には、互いの立場や考え方の違い、具体的な日程の調整など、克服しなければならない課題が多くあるが、連携でしか得られない意義を了解し合い、1つ1つを話し合いによって解決していくことが大切である。

(3) ワークショップ「粘土を使った活動を考える」

小串里子講師のファシリテーションによるワークショップを行った。今回は、保育者、学生を対象としたワークショップであるが、幼児の造形の理解を深めるために、子どもも参加して行うことにした。幼児は、皆さんのお手本として見てほしい。



(a) 土を切り分ける。

粘土切り（タコ糸で自作したもの）を使って、粘土の切り方を知る。子どもでも容易に切れた。



手作りの粘土切り

(b) 切り分けた粘土を、大きな輪にして置き、周りに立つ。



(c) 全員で音楽に合わせて粘土を踏む。ここでは、音楽（「野菜のポルカ」）を使用して、粘土を踏みながらリズムに合わせて歩いた。（行進がしやすく、軽快なリズムの曲が良い）



粘土の適度な硬さと、滑らかな感覚が足の裏から直に伝わって来て気持ちが良い。参加者が、一気に素材の魅力に引き込まれていく楽しい活動である。

緊張で表情が硬かった子どもたちも、この活動でリラックス。

学生や保育者も音楽に合わせて楽しんでいた。

* 体温で粘土が乾燥していくため、適度に霧吹きで水分を与える。



(d) 足踏みの活動により、土練りが仕上がったところで、次の活動に移る。ベニヤ板についた粘土をはがし、中央に集める。子どもたちも大きな粘土をはがし、積極的に活動していた。



(e) 粘土を高く積み上げ、飛び降りる。飛び降りる場所に粘土を置き目安にする。着地点の目標ができ、一気にリラックスして、大きく飛べるようになった。



見事なジャンプ！



徐々に大胆に飛べるようになる



(f)活動が定着してきたところで、変化をつける。



ポーズをとってから飛ぶ。1人1人どのようなポーズをとるか考え工夫する。

(g)粘土を使って全身でかかわったところで、次の活動が提案された。

- ・子どもたちは、粘土で好きなものを作る。
- ・大人は、3グループに分かれ、共同制作をする。大人にはファシリテーターからテーマ「空間がありできるだけ高くなるような造形物を作る」が提案された。子どもには、そのまま素材を与えた。

子どもたちの活動

互いに、年齢も園も違う子どもたちであったため、初めは、それぞれが1人で思い思いに作っていた。しかし、活動に集中するにつれ、自分の活動を手伝ってほしい時には、声を掛けたり、自然に協力し始め、次第に制作したものが1つの空間になって行った。

また、活動に夢中になると、徐々に子どもの使う粘土の量が多くなっていくことが分かった。



活動がある程度進んだところで、木端で作られた手作りのおもちゃとブルーシートが出された。「シートは海。陸を作って好きな世界を作ってね」という指示で、活動が変化した。



木端で作った手作りおもちゃ

Y君(右)は、顔のあるロボット？彼は作品について良くおしゃべりをして伝えてくれた。
 R君(中央)は、海に浮かぶクレーン車。
 S君(左)は、山を作りその上におうちを作っていた。

大人の活動

保育者、学生でじゃんけんをして、無作為に3グループを作った。
 各グループは簡単な話し合いの後、制作が始まった。

【Aグループ】



このグループは、4本の柱のようなものを作り始め・・・ 4本の柱は上部でつながった。



爪を上手に使ってキリンの毛を表現！



リアルな表情・・・



「首の短いキリン」

なかなか息の合ったグループ活動になった。

デフォルメされた形と写実的な表情が対照的な作品になった。



【B グループ】

皆で、紐を作り丸くして積み上げていた。装飾的で、建物の様にも見える。



次第に活動が変化し、中心に柱を立てることになった



柱から紐が釣り下げられ・・・



裏にも顔がある。

テーマは「あまから」甘さと辛さを表現。上に乗っている顔の表情がユーモラスで不気味でユニークな作品！

Cグループ

こちらは、煉瓦のような積み上げ方で高くしていくようだ。どんどんと積み上げられていく。



粘土の重みで崩れそうになるが、何とか修正して完成！テーマは、「愛の塔」



(h)最後に全体の鑑賞を行った。

ファシリテーターから活動のテーマ設定理由の説明があった。大人は、子どもの活動と違い、手がかりが無いところからの造形は難しい。今回は、参加者の様子を見て、テーマを設定することにした。テーマ「空間があり、できるだけ高くなるような造形物を作る」は、今日、考えた。参加者の様子を見て決めたが、それぞれのグループで活発な活動になり良かった。テーマによる活動が難しいような場合は、他素材であるおもちゃなどを足して、箱庭のような風景を作るようにすると、造形のきっかけが出来、大人でも作って行きやすい。今回は、それぞれのグループで自由な表現ができ、良かった。

粘土による造形は、立体の表現であるが、同時に空間を作っている。これは、平面の絵画であっても同様に、空間の造形が基本である。空間を意識して表現をすることが大切である。



(i)全員で片付けを行った。

粘土は、手で持てる程度の立方体にし、ケースの中に入れる。

霧吹きを多めにかけ蓋をする。

準備をしっかり行えば、意外と汚れず、片づけも簡単なことが分かった。



(4)振り返り

(a)活動の感想

生沼：粘土の活動がこんなに疲れるものとは思わなかった。

全身の活動であることが分かった。

足の裏から伝わる感触が気持ちよかった。

大和田：粘土は、力の入れ具合によって色々な表情に変わることが分かった。

手の感触から伝わってくる感覚が気持ちよかった。
全身で楽しめた。

國分：楽しかった。

机の上で、手で作るのかと思っていたが違っていた。
みんなで踏んでこねるのは楽しかった。

石川：粘土を踏んだだけで、子どもが喜んだ。
ものを通して、参加者と自然と共同できた。
作り上げる喜びを味わうことができた。

菊池：粘土は久しぶりだった。
粘土の素材の面白さが実感できた。

高木：いつもの保育を振り返ると、同じような素材を使っていたことに気付いた。
素材から考えて造形指導を行う必要があることを感じた。

日暮：みんなで作れる楽しさを味わった。

榊：粘土は踏めるんだ、ということが分かった。

四海：参加できてよかった。
今回のワークショップの流れが良いと思った。
それぞれの良さを生かすことができるのが共同制作だと思った。
粘土の触感がよかった。

齊藤：楽しかった。今回の研究会の準備のために、どろどろの粘土を踏んだが、今日の粘土は、それとはまた違った感触だった。どちらも楽しい。

小串：大人は子どもの気持ちになれるか？悩ましいところである。今回、子どもに来てもらったのは、皆さんのお手本としてのねらいがあった。しかし、今回、大人も、楽しめたので良かった。

大成：このワークショップは、保育者、学生、子どもが一緒になって楽しめた。今年度のアートパークのテーマは「みんな子ども宣言」であったが、今回のワークショップは、まさに「みんな子ども宣言」と呼ぶにふさわしい活動になった。

北沢：「大人は子どもの気持ちになれるか？」という小串先生の言葉があったが、大人自身も楽しめる、造形の楽しさを大人も実感できるような活動であったと思う。子どもを指導する保育者自身に造形の楽しさを実感してもらいたくて、このワークショップを企画した。充分感じられたことと思う。今後は、各保育所で幼児への実践を研究してほしい。

(b) これからの研究会のテーマについて

石川：クラスで造形指導を行うと、みんな一緒になってしまう。どうしたら良いのか？

↓

小串先生：子どもの描画の発達を考えて指導すれば、自ずと1人1人の表現が違ってくる。子どもは閉じられた円が描けるようになれば、何でも描ける。その表現を指導者が認めなければいけない。



(5)活動の考察

(a)活動の振り返り

通常使うような量ではなく、大量の粘土を使用することに本活動のねらいがある。

大量の粘土を扱うことで、参加者は全身で素材と関わり、五感を刺激する活動になった。手足や全身の運動を通して触覚や運動感覚が刺激されたり、粘土の臭いを感じたり、音楽なども使用し、視覚、触覚、臭覚、聴覚等、諸感覚をフルに使った活動になっていた。また、この様な活動を通して、互いに協力し合い、コミュニケーションの力も養うことができる素材でもある。

参加者の声にもあったように、土粘土は肌触りも臭いも良い。また、土粘土は、水分調節を行い、適切に管理することで、大量に使用したにもかかわらず、それほど汚れたり、こびりついたりしなかった。

また、土粘土は、様々な活動の意図に応じて、水分の量で「べたべた」や「さらさら」「すべすべ」など様々な触覚を体験でき、焼成すれば作品にすることもでき、活動そのものをねらいとしたり、その結果として作品が生まれたり、焼成したりできる様々な可能性のある魅力的な素材である。

私見ではあるが、粘土と同じような遊具の砂場と比較しても、粘土は天候や環境問題などに関係なく、全身で関われ、安心して安全な造形的遊びとしても評価される教材であると考え。土粘土による活動は、幼児の造形力やコミュニケーション力等を豊かにするだけでなく、全身で重みを感じたり空間を認知する力や、直接肌に触れる感覚などの諸感覚を育てる教材として、もっと多くの保育の現場で活用できるよう準備し、年齢に応じた遊び方などの研究を進めると良いと考える。

(b)本研究会の形態について

本研究会は、大学教員、現場の保育者、学生が一緒になって研究を行うことを目的としている。他の研究会に比べ、知識、経験、年齢等関係なく互いが平等な立場でコミュニケーションをとれるのが造形による共同制作の魅力である。今回のワークショップにおいても、実技を通して互いが自然に意見を出し合い、協力することができた。造形を通じた共同制作の良さを生かすことができる研究会の組織であると考え。今後も、この三者（今回は子どもも参加）が互いに自由に学びあえるような研究会を行いたい。

(c)今後の課題

今後の課題や活動内容について参加者から意見を聞いた。その際、一斉指導による子どもの表現が画一的になってしまうことについての悩みが問題提起された。このような現場の具体的な疑問や悩みについて、率直に話し合ったり、実践的な研究の場を設ける必要性も感じた。と、同時に今回の様に、大学が研究的な題材を提案する重要性も感じた。今回の活動は、学生にとっては、通常の授業では体験することができない学びでもあった。今後も、保育者と話し合いながら、現場で実践可能で具体的な提案をしてきたい。

今後の課題として、本研究会で取り上げると良いテーマについても話し合った。対話型鑑賞や描画指導などが挙げられたが、外部講師や本学教員など研究題材にふさわしい講師を招待し、新たな視点から研究会が行えると良い。また、本研究会は幼児の造形指導から保育を考える研究であるが、今後は領域を超えた保育研究となって行くよう、他の専門領域の教員にも協力を得る必要性を感じた。

3. 第2回子どものアート研究会

テーマ「芸術士と語ろう～子どもたちの創造性を育む文化芸術の役割について～」 「公開ワークショップ」「シンポジウム」「幼児対象ワークショップ」

平成26年度地（知）の拠点整備事業地域志向教育研究
「松戸市における保育の表現指導の実践的研究」

第2回子どものアート研究会は、H25年度に実施した第1回子どものアート研究会の成果を踏まえ、更に発展したものである。

内容は、高松市の芸術士（*5）を講師として招き、ワークショップとシンポジウムを実施する。アーティストを芸術士として保育所や幼稚園等に派遣する高松市の取り組みを中心に、松戸市の地域活動や教育が文化芸術に果たす役割を「ワークショップ」と「シンポジウム」で考える。

ワークショップは、保育者、学生対象の「公開ワークショップ」と「幼児対象ワークショップ」（地域保育所で見学者限定）の2回に分けて実施する。公開ワークショップ「色を感じる」では、学生、保育者自身が活動を体験して考え、地域保育所に於けるワークショップ（見学者限定）「動物づくり」では、保育の視点で活動を観察する。このような2段階のワークショップを実施し、学生、保育者自身が体感することと、保育の視点で芸術士の活動について考えられるようにした。

シンポジウムでは、高松市芸術士の活動紹介と、芸術士が見学したレッジョ・エミリアの話聞き、松戸市における芸術士派遣事業を考える。幅広いパネリストを招待し、研究的側面からコメントを得ることにより、本研究の成果を、学生や保育者、地域住民に直接、還元するものでもある。

【日程】

9月23日（火）

「色を感じる」高松市芸術士による松戸の保育士、学生のための公開ワークショップ

「芸術士の見たレッジョ・エミリア～松戸で芸術士派遣事業を考える～」シンポジウム

9月24日（水）

「動物づくり」幼児対象ワークショップ（地域保育所 見学者限定）

【参考】*5 芸術士とは、高松市が独自に作った子どもたちの芸術表現をサポートする役割を持つ専門職の事である。地域のアーティストを、高松市が芸術士として定期的に保育所や幼稚園、子ども園に派遣し、生活をともにしながら、子どもたちの興味や芸術表現をサポート、記録し、アートを取り入れた活動を行う。また、活動は、保育や教育の枠にとどまらず、子どもたちとの活動を手掛かりに、地域を巻き込んだまちづくりにも貢献する取り組みを行っている。市では、このような芸術士派遣事業をイタリアの「レッジョ・エミリア・アプローチ」という幼児教育の考え方を参考にスタートさせた。全国的にも初めての取り組みであり、保育や美術教育関係者からも注目されものである。

(1)「色を感じる」

高松市芸術士による松戸の保育者、学生のための公開ワークショップ

芸術士のこれまでの実践で、屋内外問わず色々な素材を持ち込み、アトリエ的なスペースを設けこどもたちが自由に表現するスタイルはよく実践してきた題材である。色水をビニール袋につくり、ロープに洗濯バサミでぶら下げてインスタレーションのようなものを作成し、その流れから、紙に筆や枝、スポンジ（これも自由な素材）で感じた色でお絵描きしてみるという提案を行う。

日時 平成26年9月23日（祝・火）10時～11時30分

コーディネーター 北沢昌代（聖徳大学短期大学部専任講師）

講師 太田絵美子（高松市芸術士・NPO法人アーキペラゴ）

阿部麻海 伊藤修子（元高松市芸術士）

会場 松戸中央公園

主催 聖徳大学短期大学部COC事業

参加者 25名 保育者 14名 学生 11名（保育科 7名 学部 4名）

観覧者名簿 32名

(a)ワークショップ活動報告



公開ワークショップ「色を感じる」を聖徳大学前の松戸中央公園で実施した。

保育者 14名（きぼうのたから保育所、KEYAKIDS 保育所、松飛台保育所、野菊野保育所、梨香台保育所）、学生 11名（学部生 4名、短期大学部生 7名）計 25名の参加者と、30名以上の観覧者が全国各地より集まり大盛況だった。





【会場準備】 活動に必要な道具や素材を全員で運ぶことから始まった。公園中央部の広場を活動場所と決め、その場の環境を生かして、樹木にロープを張り、紙をつるした。シートを敷き、絵具などの道具類を並べた。



【活動】 高松市芸術士マネージャーの太田さん、伊藤芸術士、阿部芸術士の紹介の後、「それでは、始めましょう」で、活動が始まった。

「何を」「どのように」などの導入はなく、参加者は、始め何をしてよいのか戸惑っていたものの、その場にある魅力的な素材を前に、自分がやってみたいことを考え、それぞれが好きな場所を見つけ活動を始めた。



絵具を投げつけて、思い切りドリッピングをしたり、、、



そのうち、シャボン玉版画をやりたいと考え、洗剤を混ぜて、ブクブク、、、

大きな画面に思い切り絵具を使い活動することは、通常の保育では難しく、保育者や学生も、子どもと同じように、絵具を使って自己発散をする体験ができているように感じた。



伊藤芸術士は、「今の子どもたちは、大人から用意されたもので行動することが多いので、自分のやりたいことを見つけて、思い切り自己発散することが大切」という考えで、そのために芸術士が率先して衣装を身に付けたり、顔に絵具を塗るなどして、参加者が自分の殻を破って思い切り自己を解放できるような誘い掛けを行っていた。



活動が進むと、次第にノリの良いの学生は伊藤芸術士と一緒に音楽に合わせて踊ったり、走り回って楽しんでいた。

別の場所では、静かに活動を楽しむ空気が流れていて、対照的な活動になっていた。



阿部芸術士とともに活動していたグループは、ハンガーをつなげて、立体的な空間を作っていた。



保育者たちも、芸術士の導入のないやり方に戸惑いつつも、それぞれがやってみたい活動を見つけ楽しむ様子が見られた。

少し離れた場所では、このような空間も作られていた。テーマは「森の結婚式」



一方、別の場所では、思い切り大きな空間を作る活動を行っていた。



対照的に、細い筆を使い、絵具の混ざり合うグラデーションを黙々と楽しんでいる学生もいた。





活動の感想を述べ合う。



参加した学生たち

(b)まとめ

参加者自身が、自分たちのやりたい活動を見つけ、五感を使って色を感じ、ダイナミックに味わうことができる活動になったと考える。

それぞれのやりたいことは、素材や芸術士、参加者同士が互いに影響を受け、活動が展開していったと考える。公園という環境や、様々な素材が準備され、それらの素材から刺激され、自分がやってみたいことを考え、大きな空間で思い切り活動ができるように準備するのは指導者のねらいであるが、そこからどのように展開するかは、1人1人に任されている。しかし、自分だけの考えではなく、サポート或は誘い掛けを行うことにより、参加者の活動も変化する。伊藤芸術士の誘い掛けにより、衣装を制作し、音楽に合わせて全身で踊り活動を楽しむ学生。その学生に影響を受け、一緒に踊って楽しむ学生。踊りはしないが、自分なりの衣装作りへと展開する学生など、参加者同士も影響を与え合っている。また、他の参加者の活動を見ていて、人とは違ったことを考えようとする参加者もいた。場所においても、他とは違った自分たちのお気に入りの場所を見つけ、その空間を好きなように造形する保育者もいた。これも互いに影響を与え合っているといえるであろう。芸術士の個性により、自然と参加者が集まる様子も興味深いものだった。阿部芸術士の周りには、静かに活動を楽しみたい参加者が集まっている。また、太田芸術士は、様々な活動場所に行き、全体の参加者を細やかにサポートしていた。

しかし、始めのスタートにこれといった導入が無く、芸術士に何かを教えてもらう、或はねらいを提示するような活動ではなかったため、戸惑いを感じていた参加者がいたのは興味深かった。活動には、必ずねらいがあるという固定概念があり、活動を楽しみつつも迷いを感じていたようである。

これについては、子どもへの活動を、大人がそのまま体験するには、子どもと大人の表現の違いについて、一定の説明が必要だったのではという考え方もある。第1回子どものアート研究会においては、子どもの活動で、小串講師はシートやおもちゃなどの活動を変化させる小道具を与える以外、何の指示も与えず子どもたちは生き生きと活動していた。しかし、大人には別にテーマを提示して活動を行うように分けていた。この事と比較して考えると、大人には何らかの説明が必要だったというのは自然の事のようにも思えるが、体験して考えることが趣旨の今回のワークショップでは、この疑問が出てきたこと、そのものが収穫であったと考える。この疑問点について、シンポジウム、子どもへのワークショップを通して、考えていくことができた。

(2)シンポジウム

「芸術士が見たレッジョ・エミリア～松戸で芸術士派遣事業を考える～」

日時 平成26年9月23日（祝・火）13時30分～16時30分

コーディネーター 大成哲雄（聖徳大学准教授）

パネリスト 太田絵美子（高松市芸術士・NPO法人アーキペラゴ）

阿部麻海 伊藤修子（元高松市芸術士）

コメンテーター 三澤一実（武蔵野美術大学教授・旅するムサ美プロジェクト主宰）

榊瑞希子（聖徳大学大学院教職研究科教授・保育学）

庄子渉（松戸まちづくり会議 暮らしの芸術都市）

臼井薫（松戸市 文化観光課）

会場 聖徳大学1号館 香順メディアホール

(a)シンポジウム

*ここでは、シンポジウムで話された記録をすべて掲載する。

第一部

1. はじめに、シンポジウムの趣旨、パネリスト・コメンテーターの紹介等



大成：定刻になりましたので、シンポジウムを始めさせていただきたいと思います。今日は芸術士と語ろうということで、1時半から4時半まで休憩を挟んでシンポジウムを行いたいと思います。シンポジウムのタイトルは『芸術士が見たレッジョ・エミリア』で、松戸の芸術士派遣事業を考えるというタイトルです。今回の趣旨は、高松市から芸術士の方をお招きして、一緒にこれからの保育や造形教育、アート、まちづくりなど文化芸術の果たす役割についてみんなで考えたいということです。

では、パネリストを紹介したいと思います。私の左手から、高松市芸術士で、今はマネジャーをされている太田絵美子さんです。そちらから、元高松市の芸術士であった阿部麻海さんです。続きまして元高松市芸術士で、今も芸術士として都内で活動をされている伊藤修子さんです。そしてコメンテーターは、武蔵野美術大学教授、「旅するムサビプロジェクト」主宰、全国大学造形美術教育教員養成協議会会長の三澤一実先生です。そのお隣が、聖徳大学大学院教職研究科教授の梶瑞希子先生です。そのお隣が、松戸まちづくり会議事務局の庄子渉さんです。最後は、松戸市文化観光課の臼井薫さんです。そして私がコーディネーターで、聖徳大学児童学科の大成と言います。宜しくお願いします。

今日のシンポジウムは一部と二部に分けまして、一部 1 時半から 3 時まで、レッジョ・エミリアが何なのかを 3 分から 5 分で簡単にお話します。そのあと太田さんに芸術士派遣事業はどんなものなのか、どういうことをやっている事業なのかについて 40 分位お話頂きます。そのあと、芸術士さんが今回レッジョ・エミリアに行かれ、芸術士さんが見たレッジョ・エミリアはどうだったのかをお話ししていただきたいと思います。その後、それを受けて、コメンテーターから自身の活動を含めながらコメント頂きたいと思います。そして休憩を 10 分挟んで、二部は 15 時 10 分から 16 時 30 分を予定しております、更に芸術士活動というのはどういうものなのか、それから午前中のワークショップはどういう意図で考えたのかを振り返りをして、芸術士が保育の中でどうして必要なのかとか、ドキュメントの方法についてなど、更に一部で話していただいたことを深く掘り下げてみたいと思います。その中で、コメンテーターやパネリストの話を聞いていきたいと思います。最後に質疑応答で 30 分ぐらい、会場の皆さんから色々と意見を聞いたりしながら一緒に考えていきたいと思います。そして最後に、16 時 40 分から一時間ぐらいシンポジウムでは聞けなかったことを意見交換会として、芸術士の皆さんやコメンテーターと直にお話を聞けるような時間を設けたいと思います。

今回は聖徳大学短期大学部 COC 事業として行うのですが、同時に全国大学造形美術教育教員養成協議会、これは私立の大学で美術の教員養成を持っている大学が機関加盟する団体の共催もあり、全国からいらしていただいております。それから松戸まちづくり会議（PARADISE AIR）でレジデンスの企画を行っているのですが、そことも協力をして、芸術士さんたちがレジデンスでも今回かかわっていただいております。また聖徳大学生涯学習研究所の協力など、いろんな人の力を借りながら実現していることをまず最初にお伝えしておきます。

2. レッジョ・エミリアについて

大成：それでは、レッジョ・エミリアとは何なのか。

専門家の方もいらっしゃるのですが、レッジョ・エミリアについて初めて聞く人のために簡単に紹介します。

『レッジョ・エミリアの教育とは…?』北イタリアの小都市で、レッジョ・エミリア市で行われているアートを中核とした幼児教育のことです。それはレッジョ・エミリア・アプローチと呼んでおります。1991 年にニューズウィーク誌に「最も革新的な幼児教育」として紹介され、世界的にも知られるようになりました。レッジョ・エミ



リアの成り立ちですが、戦後間もない時期に地域の共同保育運動として始まり、市民らが幼児学校を作ったのがきっかけになっています。教育研究家ローリス・マラグッツィ（1920～1994年）の指導と、レッジョ・エミリア市のバックアップによってその基礎が築かれました。レッジョ・エミリアアプローチの特徴は、アートの創造的な経験によって子どもの潜在的な可能性を最大限に引き出す教育実践で、一定の教具や、カリキュラムといった決まったとおりのことを教えるのではなく、子どもと保育者がじっくりコミュニケーションをとりながら共同で作りだしていくというような特徴があります。市内全ての乳児保育所（0～2歳）13か所と、幼児学校（3～6歳）21か所で行われていて、各園にアトリエスタというアートの専門家と、ペタゴジスタという教育学専門家を配置し、教育者は各教室20人を、二人一組のティームティーチングという形で保育を行っています。各園には「ピアッツア」と呼ばれる共通広場と、大小2つのアトリエがあり、教育アプローチの一部として空間を非常に重視しています。あと、自然物と人工物の豊富な素材を活用した活動というのも特徴としてあげられます。そしてプロジェクト学習を取り入れていて、数日から数か月にわたって子どもたちが小グループでプロジェクトを行っているという。アトリエスタの大事な仕事として、活動を「ドキュメンテーション」によって記録し、最終的な作品だけではなく過程も見せていく。保育士、保護者らも交えた「学びの共同体」がそこに作られています。あと、地域と共に学ぶという考えが強いと思います。地域（まち）と関わる活動というのはレッジョ・エミリアの活動の中で参考にできるのではないかと思います。ざっとですが、レッジョ・エミリアアプローチということになります。

3. 芸術士派遣事業について

大成：それでは実際に太田さんの方から実際に芸術士派遣事業というものはどういうものなのかというのをお話していただきたいと思います。

太田：みなさんこんにちは。今日はお集まりいただきありがとうございます。高松市で2009年から、芸術士派遣事業というものが始められています。今日私は高松から参りまして、午前中は芸術士の公開のワークショップで、高松からマネジャーである私と、東京在住の元芸術士の伊藤と阿部と三人でワークショップを実施



しました。今日は私たち芸術士の取り組みをまずご紹介させていただきます。どうぞよろしくお願ひします。

高松市で行われている全国で初めての事業である、アートの専門家を毎週、今は週に1回継続して四月から年度末の三月まで同じ一人の芸術士が、保育所や幼稚園に派遣される事業を始めています。子どもたちの表現をサポートするアートを取り入れた保育が始まって今年で5年目を迎えるわけですが、子どもたちを認めてほめる、暖かい保育の環境の整備ということで、芸術士の活動を展開しています。ではまず初めに、普段の芸術士の様子をご紹介したいと思います。これは合成写真じゃないんですけれども、普段子どもたちがやっている良く折る折り紙を大きな紙でやってみたらどういう風に見えるかな、というのをやった取り組みですね。大きさを変えるだけで、世界の見方が変わるわけです。そしてこちらは、伊藤さんが左に映っているんですけれ

ども、遊具にペイントして遊んでいます。園庭でも見慣れない、普段お家の中とか保育園ではできないような活動を展開することもあります。こっちも、普段は絶対やっちゃだめと言われるトイレットペーパーをいっぱい引き出して、それにくるまってみたりとか、ホースを使って遊んでみたりとか。こちらは、夏のプールの中にいろんなものを浮かべてみたらちょっと景色が変わって、この光景をみんなで鑑賞して遊んでみようという取り組みもやっています。

こちらに見えるのが、今参加している芸術士のメンバーです。一部入れ替わりもありますが、主に地元出身のアート活動を行っている人材が集まって、今年は35か所の市内の保育所、幼稚園やこども園に17名のメンバーで保育所を回っています。彼らの専門は本当に様々でして、ファインアート系、絵画とか彫刻とかイラストとかそういう表現をしている者もいれば、パフォーマー、一番左のオレンジの服



を着た男性はダンスをしたりいろんな楽器を演奏したり、その隣の彼女は人形劇のアーティストをやっていたり、NHKの「みいつけた！」のコッシーの操作をしていた人でもあります。それから漫画家さんがいたり、ファッションデザインをやっている人もいれば、中には染織作家とか、香川県は讃岐漆芸が有名なので、こちらに漆の勉強をしに来ている若い作家さんたちが、芸術士として参加してくれる例もあります。

この芸術士活動の始まりになったのは、先ほど大成先生から紹介がありましたレッジョ・エミリア・アプローチを参考にスタートいたしました。共和国家であるイタリアが、第二次世界大戦後のレジスタンス運動により生まれた教育法なんですけども、戦車のくず鉄を売って子どものための幼稚園を建てようということ、子どもをまず中心にまちを作っていこうということから始まったと聞いています。後でまた詳しく報告しますが、今年の5月にレッジョの研究者である石井希代子先生のツアーに高松の芸術士5人で参加しました。そのレポートも後で報告しますが、まちとの関わり、まちぐるみで市民参加型の教育、それから素材の循環とか教育について市民が参加して考えるというまちを体感しました。そのレッジョ・エミリア・アプローチを参考に始めた高松市ではありますが、高松の様子は始まって5年目で、まだ手探り状態の部分が多いです。

高松市の芸術士の派遣事業、ただアーティストがやってきて滞在するという関わりではありません。これまでも地域や小学校にアーティストが滞在するという取り組みは全国各地でいくつも事例があるとは思いますが、私たちが行っている芸術士の取り組みは、4月から1年間同じ芸術士が毎週じっくり子どもたちや保育所の先生と築いていくのが高松市の事業の特徴であると思っています。その中で、高松の芸術士らしい活動をいくつかピックアップしましたのでご紹介します。

ある芸術士が初めて幼稚園に行った時のエピソードから生まれた活動をご紹介します。最初芸術士派遣は、国の緊急雇用の補助金を活用して始まった事業です。最初メンバーが行政に提案していた企画が、芸術士のいる幼稚園ということで企画書を作っていました。でも、当時市の副市長である岡内さんという女性が福祉畑で活躍されている方で、彼女の目に留まった企画書、これちょっと幼稚園では難しいんだけど、保育所だったら実現可能かもしれない、というきっかけから始まった経緯もあります。最初の二年半は補助金が活用できたので保育所だけの派遣だったんで

すけども、二年半が終わって、さあこれからどうするかといった時に、保護者の声ですとかそれから現場の先生たちにこの事業をぜひ続けるべきだという評価、お声を頂きまして、市が一般財源化して継続が決まり、5年目を迎えて、今後も続けていくように、高松市も意向を見せている所です。

3年目に、保育所にしか行ったことがなかった芸術士が幼稚園に行ってみると、やっぱり保育所と幼稚園とはアプローチの仕方が違う。春になると壁にたけのことか玉ねぎとかの写生がぼっと並ぶんですけども、その幼稚園のクラスの子たちが描いた絵が全部同じ形で同じ色なことに結構ショックを受けて愕然として帰ってきたんです。それを凄く心配そうな顔でメンバーに話すんです。「これってどういうことだと思っ？」という風にメンバーに提案したところ、何かモチーフをスケッチするという同じテーマで、モチーフを何か面白いびっくりするようなものに変えたら、子どもの反応は変わるかもしれないね、という答えをメンバーが出しました。たとえば何か臭いものとか、気持ちが悪いものとか、見てびっくりするもの、子どもたちが見たことがないものを準備してみようという提案を受けて、真ん中のおかっぱの芸術士が選んだのは、生の大きいモンゴウイカを幼稚園に三匹ほど持ち込んでいます。まずは対象を観察してみようということで、実際に触れて観察をします。触っている間に墨が出てきて、最後は子どもたちがごろごろ転がして遊んでいるんですけども、左下にあるのが、子どもたちがしっかりと楽しんで感じて観察したイカが色んな形で、中にはイカの家族を描いたりですとか、中には真っ白くて色を塗っていない子どももいるのですが、一番最初に朝イカが来たときは墨が出ていなくて真っ白だったから、その時のイカを描いたよ、とか、この絵の中に子どもそれぞれのストーリーが生まれています。こんな風に、保育所とか幼稚園の先生と違う視点を子どもたちに持ち込むという役割が、この活動からうかがえると思います。



もう一つ、これもとっても面白い活動なんですけど、「あいすぞう」という名前がついていますが、これは子どもが頭の中で空想で考えた動物の落書きを、芸術士が一つ一つ大事に集めて、それから「ねえねえこれ何書いたん？」という風に子どもたちにインタビューして、この「あいすぞう」の好物、まあアイスですね。「このあいすぞう、どんな性格しとん？」て聞くと、子どもたちがすらすら答えてくれるんですね。この子どもたちの落書きを、拾い集めると年長さんのクラスで、一冊の「へんないきものずかん」が出来上がりました。芸術士が、変な動物を考えるワークショップをしますよ、という導入ではなくて、子どもたちのつぶやきを拾って、対話をして、それを一つの形にした結果がこの「へんないきものずかん」に表れていると思います。

芸術士はこんな風に子どもたちの身の回りにあるものを、それからその場所そのもの、保育所とか幼稚園をアートな空間にするという活動を展開していますが、子どもたちにとって芸術士は、毎週いつも何か知らないものを持ってきて、自分と一緒に楽しいことをしてくれる人だ。お家の人や保育所の先生とは違う角度で自分のことを認めてくれる人だ。芸術士さんが毎週来る曜日が決まっていますが、「また火曜日こんかなあ」とか「水曜日になったらまた会えるんやね」という

風に、子どもたちは毎週の活動を楽しみにしています。

先ほどの紹介は、市内の保育所や幼稚園の活動でしたが、是非この素晴らしい活動をまちの人たちにも知ってもらいたいという思いから、まちの中に活動を展開していくことも行っています。下の写真は地元の私鉄の協力を得て、ホームに作品を掲載して13駅で展開しました。各駅に子どもがデザインしたオリジナルのスタンプ台を設置して、夏のスタンプラリー企画を展開したり、香川県は瀬戸芸（瀬戸内国際芸術祭）が3年に1回行われていますが、こちらが椿昇さんの時の企画の作品で、『キッズ・アクア・ガーデン』という、子どもたちが考えた海の動物を芸術士が形にしてそれを作品にして街なかに点在させていきました。

こちらは先ほどのスタンプラリーの風景で、結構大きい作品もありました。

それから、レッジョの取組であるまちの協力と共に素材を循環させることが市民と教育とで一緒に考えられていることを参考に、私たちも似たような取り組みを試しに実施してみました。これは期間限定での取り組みでしたが、市の環境課と企画をして、地元を中心に色々な端材の提供を呼び掛けて集まった素材で、子どもたちが芸術士と遊ぶことができるというオープンアトリエのような企画を、夏休みの期間を利用して実施しました。

2009年にスタートしたこの芸術士活動は、今年で5年目を迎えます。少しずつ活動が広がった今では高松市のみならず、近隣の三豊市、坂出市、善通寺市など、少しずつ派遣先が広がっています。当初25か所だった派遣先は、正式には41か所になっています。1.5倍くらいの規模に膨らんでいます。それから、派遣施設の増加に伴って参加してくれている芸術士も増えつつあります。こちらは16名とあるのですが、今はもう一人増えて17名が参加して、共に活動を行っています。昨年、高松の魅力を世界に発信しようと掲げられた「創造都市推進ビジョン」というものがあります。

産業、ものづくりなどのテーマと並んで、こどもというテーマがこの中に含まれています。この、私たちが取り組んでいる芸術士活動が、いつかは高松のブランドとして世界に発信していけたら素晴らしいことだなあと思いながら、それから芸術士のお手本となったレッジョ・エミリアのように、高松市が芸術士の町として知られて、すべての子どもたちが芸術士と出会う日を目指して活動を続けています。

一部活動の動画がありますのでこちらをご紹介します。

これは先ほどメンバーの紹介の時一番左に立っていた男性芸術士の村井さんという人なんですけど、彼もすごく個性的でユニークな方で、専門はパフォーマンスですけども、造形活動にとらわれないで空間を使ったりですとか、身体表現をしたりとか面白い発想の持ち主です。これはたまたま準備体操を村井先生お願いしますということで、村井さんが在日ファンクの曲で踊っています。

4. レッジョ・エミリア見学のレポート

太田：それでは、5月に見てきたレッジョの町の中の様子を少しご紹介したいと思います。芸術士も「レ

「レヅジョ、レヅジョ」と言いながらも、参加している本人たちはレヅジョの研究者でもなければ、どうやらレヅジョっていうアプローチから始まったらしいよ、というくらいにしか知識がありませんでしたし、そろそろ、歴史のある実践の姿を一目見てみたいね、ということでメンバーと参加してきました。今回は町を上げて、リサイクルのお祭りが年に一回行われているんですけども、そのレミダ・ディというイベントに合わせて視察に行ってきました。アートとリサイクルのイベントが街のいろいろな所で行われています。今年は写真展が町の中のギャラリーで展開されました。駅に着くと、こじんまりした駅ですが、その下を通る地下道に市民が考えた、廃材を組み合わせて自転車の形を作ったパネルのようなものが並べられていて、高松も地面が平坦で自転車がとても多い町で有名ですが、こんなのが高松にあっても面白いよね、という様に行って来たメンバーと、見てきました。レミダ・ディは、リサイクルのお祭りということで、市民が参加している広い駐車場にフリマが展開されています。子どもたちが出しているお店もありました。レミダっていうリサイクルセンターは、学校とか幼稚園の子どもとか、それから市民も利用出来ると思いますが、リサイクル業者と提携をして、工場とレミダをネットワークで結ぶシステムが生まれています。この奥にいるおばあちゃんがレミダの職員ですが、必ず目利き役がいて、この素材はクラフトとか何かに使えるわという風に直接工場に行って、これをどの位の量をどの位の頻度で集めるということをコントロールしている人間が必ずいるそうです。右には美しくパッキングされていて、しっかりと商売もしている、とても上手に見せています。

こちらが街の、レヅジョ・チルドレンの拠点であるローリス・マラグッチセンターというところですよ。これも4年前くらいに、古いチーズ工場を再生させて作られた施設であります。年に一回のお祭りには毎年テーマがあって、今年のテーマは紙ということで、いろんな古新聞を活用した椅子とか、古本が並べられていたりとか、いろんな紙の廃材でみんなで船を折って旅に出ましようというような意図が込められているようです。中に入ると折り紙ができるコーナーが設けられていました。それから、中にはテーマである紙の素材の展示も行われています。さすが、見せ方がすごくシンプルでありながらセンスがとても高いです。いろんな工場から出てくる抜型の紙とか、プリントされたものとか。中はこんな風にレヅジョ・チルドレンのアトリエ化されていて、それから先ほどのような展示をするスペース、それから市民や子どもたちが訪れることができるアトリエという様な空間の構成になっていました。

こちらは幼稚園での実践だそうですが、「変化する植物の素材」で、植物が腐って干からびて茶色くなっていく過程を見せているというアプローチの紹介です。この様に市内の保育所にはアトリエがあって、そこには専属のアトリエリストがいるようですが、際立って面白い展示は、いろんな場所で市民の目に触れるように展示がされるようです。それから、各活動のドキュメントも、このセンターにすべて保管されているそうです。本当に先生たちが手作りで作ったようなものもあれば、出版物として綺麗にデザインされているものも色々ありましたが、ここに来るとこれまでの活動すべての実践が蓄積されているそうです。

私たちが行ったのが、レミダ・ディに合わせて行きましたが、この時に北欧系の人たちをよく見かけました。聞くと、スウェーデンからの300人の研修団が十日間くらいのプログラムを受けに来ていました。これだけ人を集める力のある歴史を作ってきた町なのだと、ここで体感しました。

これは先ほどとは別に、市民とか子どもたちが来れるような文化センターのような施設も設けられていました。こんな風にデジタルツールを使って遊ぶところもありました。

次に実際子どもたちが、どういう活動をどういう環境で保育を受けているのか、というのを見てきました。私たちが行ったのはレッジョ市内ではなく隣の町のカルビという町の幼稚園に行ってきました。ここも新しい、先進的な取り組みをしている施設で、子どもたちが考えた建物の形だったり、部屋がどういう空間だったらいいというのを子どもたちのアイデアから、建築家と一緒に8年がかりで作った施設だそうです。こんな風に年長さんが集まって、みんなで保育を受けている部分もあれば、それから一部は4,5人のグループになって、少人数で活動をしているという姿も見られました。こんな風に吹き抜けになっていて、家具もデザインされていてとてもかわいかったです。子どもたちが給食の準備をしています。これは日本でも同じことですね。絵本を読むコーナーがあったりとか、それから先ほどのレミダのような素材が設けられている部屋もありました。さっきのレミダというのはイタリア各地に、それからヨーロッパ周辺にもいくつもあるようですが、私たちはポーニャのレミダに行ってきました。それも後で簡単にレポートします。中でもちょっと面白いと思うのは、年長さんのクラスが人類の進化についてずっと1年間研究をしているんだと聞きまして、右下には猿から人間になっているとか、それから海から魚が上がったところを絵に描いていたりですとか、日本で暮らしている私たちからしたら、子どもたちがこういうテーマを一年間追求していくことに文化の違いを感じたりしました。

この様に自然の素材が並べられているコーナーもあって、保育所の中のデザインもセンスが良くて、これは特別アートの教育を受けてない先生たちだそうです。保育所とか幼稚園の先生のスキル、それからアート感覚もそうですが、ドキュメントをパソコンで作ったりするのも簡単にちゃちゃっとやって、綺麗に展示物を作ったりとか、そういう風に保育士さんや幼稚園の先生のスキルがとても高いんだなというのを感じました。

5. コメンテーターの発言

①三澤先生

大成：ではこの辺でコメンテーターの方々にお話をいただきながら、ご自身の活動も含めて芸術士派遣事業にどの様な感想を持たれたかなど、10分ずつくらいでお話頂きたいと思います。

三澤先生からは美術教育の観点でお話を頂きたいと思います。

三澤：武蔵野美術大学の三澤です。今お話を聞いていて、非常に豊かな幼児教育が行われているなと思いました。私は主に小学校、中学校、高校の方に主に関わっていますが、今の幼児教育の、レッジョの取り組みを見て、日本にあのよう教育が広がれば、もっと違った世の中ができるだろうなと実感しております。というのは、どうしても小学校中学校になっていくと大義的な学びが多くなって、物事を凄く固く考えるようになります。柔軟に考えられない、柔軟な思考ができなくなってきます。その時に、これからの世の中を考えたときに、私たちは固い思考だとなかなかやっていけないだろうと。何が起きるかわからない世の中になってきました。たとえば3.11もそうです。これから本当に解決していかなければいけないようなことが山のように起きてくる。そのような時に、もっと私たちが人間の創造性を発揮して、柔軟に思考できるような教育というのはあ

りえないだろうか。そのようなものを考えております。私は「旅するムサビ」というのを行っておりまして、それでいろんな小中学校に行ったり美術館に行ったりしながらワークショップとか、対話による鑑賞を行っています。これは長崎で行った取り組みです。空飛ぶクジラというものを作りまして、このもともとの発想は何か大きなものを作りたいね、凄く単純なところでした。「大きなものを作りたい!」「大きい?」「大きい…クジラか!」そういう単純なところですよ。「クジラ…ク



ジラ作って、じゃあ空に飛ばそうか」と、そんなところですよ。クジラを作るのに粘土でクジラの型を作って、型紙を作ってそれを何十倍かに拡大して、ごみ袋を繋いでこういうものが出来上がったわけですね。これを子どもが見たときにどう思うでしょうか。我々大人も凄く感動しました。「浮いた!」「飛んだ!」先ほど言った柔軟な思考というのにどこまで繋がるか分かりませんが、何かに挑戦してみて新しいものが生まれていく、そのプロセスの面白さですね。それに非常に感動しています。大人もそう感じています。

色んな幼児に対してのワークショップもやっています。これは今年の夏に行ったワークショップですが、学生が、赤の国、青の国というのを作ってペイントして行こうと。こうなるだろうなあと思いましたが、こうなりました。すごいですね、これを許してくれるお母さんもなかなかだなあと思っております。「目が痛い」と言いながら、自分で塗るんですよ。でも、大人になったら絶対やりませんよね。何故子どもは自分で塗るんでしょう。すごく面白いですね、子どもは。このように子どもを観察しながら、我々大人もそうですが、「生きる」ということをアートと、私は解釈しているんです、どのように生きていくか、つまりどのような考え方を持ってどのように表現して私たちは生きていくのか。そういう点で子どもというのは、直感的に自分の表現というものを身体で表現していきながら生きていますよね。そういうところに私たちは学べるのではないかと思っています。

旅するムサビプロジェクトは2008年より開始して、課外の活動です。大学で行っていますが、課外活動です。要するに単位が出ないということですね。学生は、移動の費用も全部自腹です。自分でお金を払って学校に行こうという活動です。これも重要ですが、学校と学生と対等な立場で関わる『協働』が必要であるということ。私も中学校の教員をやっていた経験があるのですが、教員って凄く頭が固くなってしまふんです。私もそうでしたけれど、これやっちゃいけない、あれやっちゃいけない。子どもたちが失敗するのを先に見越して、これをやると失敗するからと、失敗を事前に排除してしまう。これだと何も学べませんよね。そのような中で、学生は非常に柔軟であると。だからある意味学生という異質なものを学校に取り入れることによって、学生の柔らかさが学校の柔らかさを作っていく、そのような取り組みです。あと、同時に私たち自身も、武蔵野美術大学、美術の専門大学ですが、ある意味偏ってますよね。美術の専門であるということで。ですから、その偏りも訂正していきたいということで、他大学とも一緒にコラボレーショ

ンをやっています。こちらの聖徳大学とも、毎年一緒に。すると学生が同じ年齢で、同じような学生ですが、考え方とか発言が違うという。その違うというところに非常に魅力を感じます。

主にやっているのが、対話による鑑賞、ワークショップ形式の授業、学校での公開制作、教員との共同作業、school Art Project「ムサビる!」。こんな感じです。日本の中学校の風景。同じ制服を着て。そこに学生の作品を持っていきます。ここで見るのは有名な絵でもなくて、知っている絵でもなくて、どう見ていいかわからない学生の絵なんです。実はどう見ていいかわからないというのが非常に重要だと思うんです。つまり、生きていることは、常に新しいものに対して問題解決していかなければならない、そういう宿命があります。それを保証してくれるのがアートかなあとと思います。例えば現代美術もそうですけれども、訳の分からない作品がいっぱいあるわけです。それを訳が分からないからというので避けるのではなくて、自分なりにこれはこういう意味があるのではないかと解釈をして、意味づけをしていく。その中で、自分の生き方を自身で切り開いていく、そのような意味があるのかなと。そう点では、学生の作品を見て、ファシリテーターが「どう思う?」「これ何が描いてあるんだろう?」ということ聞きながら、子どもたちの見方を深めていく。そして最後に作者が出るんです。作者は実は私はこんな考え方で描いたんだよ、でも子どもたちはそれを正解とは取りません。事前に自分の考え方をしっかり深めているから、ああ作者も私と同じような一人の人間で、そのような考え方もあるんだな。つまり、対等に関われるわけです。美術というものを通して対等に関わる、これがとても重要なことだと思います。午前中のワークショップを見ましたが、芸術士さんと参加者が対等に関わっている。肌と肌で関わってくる。先ほどの村井さんのダンスではないですけど、村井さんも真剣に踊っていて、それにつられて子どもも真剣に踊っている。一対一の関係ですよ。平等の関係を作り上げていく。これが芸術の面白いところかなあと思っています。

子どもたちも真剣です。これは聖徳と一緒にやったものですね。身を乗り出して見えています。確かに、幼児教育は子どもの発達、年齢によって取り組み方を変えていかなければいけないと思いますが、小学生なんかは身体を使って鑑賞するというのはとても重要ですよ。作品の上に乗れることなんてほとんどないです。美術館では絶対ありえないことです。でも、こういうところで自分の身を置いてみるという、その感覚はとても重要だと考えています。真剣に、学生と45分間一本勝負ということで話をしてみると。作品について話をする。これは5、6年生です。このようなおどろおどろしい絵ですが、このような絵はとても人気があります。特に中学生には人気のある絵ですが、学校ではどちらかというと排除されがちな対象、それを学校に持ち込んでくる。ある意味、言い方が悪いですが、毒を学校に持ち込むようなものですよ。無菌状態のところちょっと菌を入れてあげようかと。それによって、自分の考え方を活性化させる。免疫が活性化するような機能があるんじゃないのかなと。アートにはそういうものがあると思っています。図書室も展示の会場になります。これはトイレットペーパーです。これは上海に行ったときですね。上海でも同じようなことをやりました。言葉が通じないけれども、作品を真ん中に置くことで意外と理解しあえました。不思議ですね。これは凄く衝撃的でした。自然に筆談が始まったんです。高校生のワークショップです。高校生が寝ています。寝ているというか、作品になっているわけです。自分の身体を直接見ることはできませんが、このように青焼きに焼き付けることによって身体を自覚できる。これは高校生なりの考え方ですけれども、もちろん幼児でも出来ます。同じ

ような行為をしても、発達に応じて理解する内容、意味が違ってきます。ですから、たとえば今日の午前中にやった、子どもがやる行為と大人がやる行為、似ているように見えても絶対違うんですね。やっぱりそこで理解できるものも学ぶものも違う。でも行為としては同じである。方法としては同じである。

絵具づくりです。これはフライパンを黒板にしてそこに絵を描いています。

中学校でこんなこともやりました。これは米袋のファッションショーです。

これは先ほどのクジラの中です。これ、なかなか気持ち良いです。クジラの中に入って行く。子どもたち、クジラの中で遊んでいます。凄くファンタジックな世界ですよ。こういう夢のあるような活動を体験すると、子どもたちはどのような大人になっていくのでしょうか。美術とか芸術は、体験でしか伝わらないと私は思っています。本を読んで美術や芸術が、その意味が伝われば、楽なことなんですけれども、なかなかそうはいかない。ですから私たちは、生きて死ぬまで芸術体験を繰り返し、死んだらゼロになっていくんです。ですからそのような体験を積み重ねていく。子どもの中に積み重ねていくことが重要なと思っています。

学校にも空き教室を借りて、我々毒が入ってきます。

あとこんな悪戯もします。日曜に忍び込んで…忍び込むわけではないですけど、黒板に落書きではなくちゃんと作品を作って、そしてこれが朝の学活と共に消されていくという。「えー！消すの？」「消します」そのように、日常にちょっとした違うアクセントを入れることによって、実は私たちの日常は非常に生き生きとしてくるんですね。

このような活動をたくさんしておりますけれども、今本当に危機だなあと思っていることが一つあります。今大学に入ってくる学生が非常に固いです。発想が固い。自分から主体的に動こうとしない、と言ったらおかしいですね、「やってもいいんですか？」そのような学生が多い。じゃああなたは生きていいんですか？って言っていることと一緒にですか？そういうことですよ。表現というのは生きること、アートというのは生きること。それをやっぱり幼児のころからしっかり続けさせてあげること。それが常に新しい文化とか、新しい社会を作っていく上でとても重要なと考えています。

以上です。

② 榊先生

大成：続いて教育学の視点で、榊先生からご意見をいただきたいと思えます。

榊：聖徳大学の榊です。私、美術、本当に絵が描けない人間でございます。このプロジェクトにどういう観点からお話をしたら良いか大分迷ったのですが、教育学の観点からという課題を頂いておりましたので、少しレヅジョ・エミリアにつきまして私が経験したことをお話ししていこうと思えました。

私の専門は幼児教育史、それから比較幼児教育のようなことをやっております。これまで様々な国際的な場面で色々な方にお会いしたのですが、幼児教育でレヅジョ・エミリアは大変人気がございます。それに関しまして経験したこと、そしてまたレヅジョ・エミリアの保育の実践から日本の保育界の方々が一緒に学んでいったらいいかなと思うことについてお話しいたします。

まず私が最初にレヅジョ・エミリアに遭遇したのは、ドイツ人の友人のところでした。「ねえねえ、

レッジョ・エミリア行った？」これが 1990 年代の終わりですが、そのように聞かれました。「名前は知っているけれど」とあいまいな返事を致したわけですが、その彼女によりますと、どこへ行ってもレッジョ・エミリアが話題であるということでした。私が、初めてレッジョ・エミリアの子どもたち 100 の言葉という展示を見たのが日本ではございませんで、イタリアでもございませんで、イギリスでした。巡回展がいくつか世界を回っておりました。その巡回展の一つがイギリスのグラスゴーに来ておまして、そこでたまたま国際会議がありました折に見ました。国際会議ですから色々な国々から同じ展示を見るものが集まっていたという、そういう状況の中で、それぞれの国の方々が目を向けるところ、感心するところが随分違っているんだなということに気が付きました。以来みなさんとお会いする度に何を受け取っているのか、何に関心があるのか、その都度聞いてまいりました。それから日本の研究者が日本にレッジョ・エミリアを紹介してきたそのことを突合せて、おおよそそれぞれの観点はこんな風に整理できるかなという形で用意しましたのが今見ていただいているスライドです。私のように幼児教育史をやっておりますと、保育運動として大変興味深い一つの実践です。これは教師、保護者がローリス・マラグッチという優れた指導者の下で協働しながら、すべての子どもたちに質の高い保育を保証しているという、こういうことを実現させたということに興味が集まってきます。そしてまた思想史的な理論的な研究はどうなっているのかということにも興味に向くわけです。それからデザインという点からまとめましたけれども、これもレッジョ・エミリアが人々との関係をどう構築するか構成するかという点でも大変興味深いものがありますし、空間、時間、指導ということで、整理をしましたが、特に人々の関係。これは市全体が保育をすべての家族の子どもたちに提供できるようにするために、どのように仕組みを作っていたか。大変大がかりでまた徹底したところがあります。その観点からしますと、先ほど冒頭発表にあったリサイクルのセンターとの関わりなども、そういった中で生まれてきたのだらうと思います。空間、これにつきましてはそれぞれのレッジョ・エミリアの保育施設が、明るい空間、暗い空間、そしてピアツツアと呼ばれる広場を持って、そうした共通の空間を作りつつ保育環境をデザインしている。そしてまた、保育環境というのは第三の教師である。教師、そして親、それから環境という形での位置づけをなされているというような事が見えてまいります。時間に関しましては、日本の保育士は、保育は一日を単位として捉えていくと。その積み上げとして一方で見ている側面があります。それに対しまして、この数週間あるいは、数か月、長いものでは数年かけてのプロジェクトが延々と続いている。活動単位として、そのプロジェクトというものがあるわけですが、時間をそのようにデザインをしているんだなと。それから指導の方針ですが、これなどは秋田喜代美さんという東大の研究者が分析をしているところで多く学びましたが、私は、実際レッジョ・エミリアの指導を見たわけではありません。ですが、ビデオの記録などを見ますと、独特の指導の方向付けがある。秋田さんは、それを子どもたちにまず全体を感じさせてから次第に要素に導いていくと。要素、あるいは細部に子どもたちの目を向けさせることによって、そこから新たな組み立てが生まれるのだと。そういうところに子どもたちの創造的要因が生まれてくるという分析をされている。そういう目でレッジョ・エミリアのビデオを見ますと、ああ、そういうところが確かに見えるというようなことで上げてみました。それから記録です。ドキュメンテーションという独特の記録法がありますが、それは学びの軌跡と方向付けを記しているものがありまして、素晴らしいパネルにして展示をし

が可能になったというように聞きました。これは、まったく風景が変わりますが、実は私レッジョ・エミリアの映像を見ていて興味を持ったのは、そのアトリエスタの中に美術造形ではなく、恐らく技術の分野の専門だろうと思う方のアトリエがありました。レッジョ・エミリアでは、そのような子どもたちが暮らして行く、身近な自然とどう関わっていくか、いわゆるサイエンスの分野にも力を入れているように感じていました。また、幼児教育の歴史の中で、私が関心を持っているのは、幼児が知的に世界と交わっていく、そのあたりを先人たちはどのように切り開いていった、どのように実践を積み上げていったのか、というようなことです。ローリス・マラグッチという人が、レッジョ・エミリアを育てていくときに、やはり先人から学んでいまして、よく名前が挙がってくるのがヴィゴツキー、デューイ、ピアジェ、フレネといったような、教育の歴史の中の先人たちなんです。おおよそ 1910 年代から 30 年代というこの期間に、すべての方が活躍をされているんですね。もちろんピアジェなどは 1970 年代まで本当に脈々とした活動をして世界的に影響を及ぼした方ですが、そうした方たちの原初的な考え方が良く表れているのがやはり 20 年代 30 年代かなと思います。そういう頃に私は専門としている分野で、こういう実験的な教育を行った人がいて、本当に大学の化学の実験室のような、あるいは技術室のような、そういうところに子どもたちを実際に招き入れています。だから学校そのものにそういう施設を作ってしまったのですが、そういうような実践があります。そのようなものとの流れはどうなるのかという事で関心を持っていたので入れました。

最後ですが、日本における保育とアートという事で、日本の学校教育の中には、すでに保育のアートの意義というのは大変認識されている科目としてある。国によっては科目としてそういうものが入っていない。したがって、保育士、教員養成の中に、そういった教科目が入っていないというようなところがあります。それに比べると日本の場合は、このような保育課程、教育課程、養成課程の中にしっかりと入っています。ですが、それをどのように生かしていくのかという点につきましては、レッジョ・エミリアをはじめとして、先ほどのムサビの先生の御実践などから、まだまだ沢山学んでいく必要がある。その際には一般教員としてそれにあたるのか、あるいは専科教員としてあたるのかという問題がありまして、特に保育の場合ですと、ほとんどが一般教員が芸術、アートについて自分の持っている技量を発揮しながらという形になります。そこでは及ばない新しい観点だとか、技量だとか、そういったところを芸術士たちが持ち込んで下さると、より豊かになるかなあと。また、幼少期こそ、そういう方々と出会うことで、色々な可能性が開かれていくのではないかと思います。

という事で、終わりにしたいと思います。

③松戸まちづくり会議 庄子、松戸市役所 白井、(大成先生)

大成：一部の最後になりますが、松戸まちづくり会議の庄子さんと、市役所の白井さん。芸術士派遣事業が地域と関わっていく活動でもありまして、松戸市でもひょっとしたら高松市のような芸術士派遣事業ができるのかもしれないし、松戸市でやる場合はまた全然違うものになるかもしれませんが、いずれにしても今松戸市ではこういうアート活動というものが市内で行われていますということで、紹介したいと思います。

庄子：こんにちは。松戸まちづくり会議という団体の事務局をしています、庄子と言います。宜しくお願いします。大成先生からお話がありましたが、高松市の方では瀬戸内国際芸術祭、大きなアートプロジェクトがあると思うんですけども、松戸でも2010年からアートプロジェクトが始まってまして、松戸市の文化的な背景と伺いますか、プロジェクトの取り組みを簡単に紹介できればと思います。今日お話しする内容はこちらです。まず、松戸でのアートプロジェクトということで、松戸市、駅前はこのところですが、どうして始まったか伺いますと、JRの常磐線が、JR東日本の中でイメージが最悪というのが一つありまして、お酒を飲んで乗っている人がいたりとか、痴漢が多いとか、イメージが悪かったそうです。2006年に「JOBANアートライン協議会」というものが設立されました。これは、JR東日本東京支社と、それから常磐線沿線に、上野、北千住、取手に三つのキャンパスを持っている東京藝術大学、それからその常磐線沿線の自治体が集まって、それぞれ藝大があるという事ですとか、文化的な施設があるという事を生かしてアートでイメージアップをしようという目的で設立しました。2010年に、松戸市の事業として「松戸市アートラインプロジェクト」が始まりました。これが恐らく松戸市で初のアートプロジェクトではないかと思いますが、30組のアーティストを公募して作品を町の中で展示をしまして、右側の写真が実は聖徳大学の大成先生も参加して、元々お米屋さんだった会場を使って、お米プロジェクトというのをやった様子です。その次の年、2011年も同じような形で「松戸アートラインプロジェクト2011」をやりました。こちらは5組の招聘アーティストと、15組の公募アーティストという形で20組のアーティストが作品を展示しました。この時から「暮らしの芸術」をテーマにして、こういうアートプロジェクトを町の方々に伝えるのが難しいという事で、これは実行委員会形式でやっていたところを大きく体制を変えていくことにしました。そこでできたのが、「松戸まちづくり会議」という団体です。実行委員会形式のアートプロジェクトをやるのではなくて、地元の町会、自治会の会長さんに集まっていただいて、住民自身でどうしてアートが必要なのかというところから考えたりですとか、どういうアーティストにどういう活動をしてもらったらいいのかとか、まちづくりと一緒にアートプロジェクトを考えていくということで、「暮らしの芸術都市」というようにアートプロジェクトの名前を変えて、継続的に活動を実施しています。最近の取り組みですと、8月30日、ついこの間ですけれども、松戸中央公園で「松戸ラストサマー盆踊り」を開催しました。11の町会、自治会が集まって開催ということで、元々各自治会、町会で盆踊りをやっていたのですが、若い人がいなくて続けていくのが難しいという話ですとか、いろいろな事情がある中で、せっかく11の町会が集まっているのでアーティストの工夫も生かしつつ、1つの盆踊りをやりましょうという事で実施しました。こういう形で、いろいろな町会から提灯をお借りしたりですとか、皆さんの知恵をお借りしてやぐらを作って、音楽演奏をやったり、地元の町会、自治会の方々の飲食店の出店も集めながらやりました。子どもたちにも楽しめるようにと、うちわぬり絵コーナーというものを設置し、このうちわに、将来この公園がどのようになっただらいいと思うか、というのを自由に描いてもらうコーナーを作りました。それから聖徳大学ですとか、千葉大学に協力いただい



て実施したのですが、元々松戸中央公園で行われているアートパークという取り組みの展示コーナーとか、千葉大学の園芸学部の方々が移動式の屋台をデザインして展示しています。こちら、スマッシュゲームという謎のゲームのコーナーですね。夜はライトドロ잉というのをやりました。カメラの露出をずっと開けっ放しにしておいてLEDライトを動かすと、光の軌跡が残るといふものです。盆踊りの最後にこういう実験的な遊びといふかプロジェクトもやりました。

そもそも「暮らしの芸術都市」とは何なのかといふことをお話ししたいと思ひます。芸術といふと、美術館の中で見るといふイメージがあると思ひますが、私たちが日常に暮らしていることも中には出てくる。例へば知恵みたいなものも、芸術として捉えられるのではないかと考えていて、例へばおばあちゃんの、こうすると何かが簡単にほどけるよ、みたいな知恵。ぱっと出てこないんですけど、そういう色んな生活の中の工夫みたいなものも、芸術として生かしていけたらいいのではないかといふ事で、「暮らしの芸術」といふテーマを掲げています。具体的には2012年、江戸川の河川敷で屋外結婚式をやりましたが、元々松戸まちづくり会議でも公共空間の利活用といふことにも取り組んでいまして、松戸は、実は結婚式場がないらしいんです。葬儀場は沢山あるらしいのですが、結婚式場が一つもないといふ事で、江戸川の河川敷を一つの仮設の結婚式場にできたらいんじゃないかと、屋外の結婚式をやったりですとか。それからこちらは先ほども出てきましたけれども、中央公園を使ってライトドロ잉をやったりですとか、2013年は、こちら色んなアーティストの方々と色んなプロジェクトをやっていたんですけども、どろぼう学校準備室というチームの方々とやった活動で、あぶり出しですかね。レモンの汁を使って火であぶって絵を出すといふ事ですとか。西口公園という西口にある公園でやったものなんですけれども、スズランテープを使って西口公園に変なものを置いたら空間がどういふ風になるのかといふのをやってみようと、地元の方に高所作業車などを用意していただいて、それを括り付けてみんなで引っ張って上げるみたいな。さっきの大きなクジラもありましたけれども、そんな大きいものを設置すると公園がどういふ風になるのかをみんなで見るですとか、取り組んでいます。

もう一つ、2013年から始まったプロジェクトで、PARADAIDE AIR といふのがありますのでこちらのお話をしたいと思ひます。こちらは、今回高松の芸術士の三名の方々に実は滞在していただいているんですけども、西口の駅前に楽園といふパチンコ屋さんがありまして、その浜友観光さんの協力を得ながら、去年から文化庁の助成金も得つつ、アーティスト・イン・レジデンスといふプロジェクトをスタートしています。一階がパチンコ屋さんなんですけれども、元々上層階がホテルだったんですね。そこを使ったアーティスト・イン・レジデンスといふ事で、アーティストが一定期間町の中に滞在して作品を発表していったり、作品のフィードバックを得たり、アーティストが自分の町に帰った時に松戸がああいう場所ですごくいい場所だったよ、といふ風に松戸を世界に発信していくといふプロジェクトです。元々松戸は宿場町だったんですけども、江戸に入る一歩手前で休んでいくような場所だったらいいですね。当時、外から来たお客さんを丁寧にもてなしたといふ風に言われているらしいんですけども、そこからヒントを得まして、一宿一芸といふのをコンセプトにしています。これは何かといふと、何か町に作品だったり何か還元する芸を残す代わりに、一宿泊まれるよ、といふようなコンセプトになっているのですが、その例で去年、韓国からイ・デイルさんといふアーティストの方がいらっしゃったんですけど

も、これは水中コンサートの様子で、水の中でしか音楽が聞こえないというコンサートで、これはちょっとリハーサルの様子なので5人くらいしか写っていないのですが、本番は、こちらはNASというスポーツクラブでやったんですけれども、スポーツクラブの会員の皆さんにも聞いてもらいながらコンサートをやりました。こちらもまた、イ・デイルさんというアーティストの方の発表の様子なんですけれども、こんな形で松戸で活動しましたよというのを報告するようなトークも行いました。去年二組実はアーティストをロングステイという長期の期間呼んだんですけれども、こちらポーランドから来たアーティストでパヴェル・ツィエイアンさん。子どもたちが写っていますが、スライド式のプロジェクターを使った作品なんですけれども、それを子どもたちと一緒に見ながら、こういう映像を見てどういうことを考えるかみたいな事を言い合う会をやっています。こちらも同じくパヴェル・ツィエイアンさんのワークショップの様子です。このような形で継続的にアーティストが町の中に入って滞在するという仕組みを松戸まちづくり会議で作っているという状況です。私の方からは以上になります。

大成：ちょっとその流れで、私と松戸まちづくり会議と、地域の方と聖徳大学がやった活動を紹介しておきたいと思えます。今回2つご紹介します。

これは去年、「暮らしの芸術都市」のアートプロジェクトでやったつながる洋服プロジェクトということで、私のゼミと地域のKEYAKIDSという保育所と一緒にやったプロジェクトなんですけれども。どういうものかという



と、古着とか布をメイン素材に、聖徳大学の学生と市内の保育所KEYAKIDSの子どもたちと協力して服のどこかが必ず繋がっている「つながる洋服」を学生と子どもと一緒に作るというようなプロジェクトをやっていました。大体一月半くらい、毎週保育所に通って子どもたちと活動を続けました。最初にイメージワードを示してグループ分けをして、古着をみんなで選んで、遊びながら段々とつながる服というものを、学生と子どもたちが一緒に着れるというようなものを作ってく。子どもたちが縫うのは難しいので、洗濯ばさみなどで留めて翌週学生が縫ってくる。段々つながっていく。これは先ほど三澤先生が美術というのは対等になれるというようなお話をしていたと思うんですが、私がなぜこれを見せたかという、学生というのは常に子どもを支援する立場としてずっと教えられているんじゃないかなと思ったので、そうじゃない活動をちょっとやってみようと思った時に、つながる洋服という方法を使うと、子どもと学生は一緒になれる瞬間があるんじゃないかなという風に思ってやってみました。要するに、二人、子どもたちと学生が協力しないとこの服は着られないんですね。動けないんです。そうこうしているうちに、ダイエーの西口店に空きフロアがあるという事で、そこでファッションショーもやっちゃおうという事で、やってみました。ファッションショーってそもそも子どもは知っているのかな、というので見てみて、じゃあファッションショーやるぞー！と言ってで、決めポーズを決めたりとか、ウォーキングの練習をしたりとか、実際会場づくりも学生たちもハンガーと雨合羽を使って作って、松戸まちづくり会議の皆さんの力も借りて、こう言う風なファッションショーが実現したという。こういうプロジェクトも、幼児と学生が組んだらこんなこともできるんじゃないかなとで、

試しにやってみました。大体学生と二人の子どもたちがついて、どこかがつながっているということやってみました。

もう一つなんですけれども、アートパークというのはずっとやっています、聖徳大学と地域と行政が協力して行っているアートプロジェクトで、今日午前に行ったワークショップを行った松戸中央公園で2008年からやっています。最初は80名くらいの子どもたち、親子での参加だったのですが、今年七回目で1200人くらい松戸市から遊びに来てくれるような大きな企画になってきました。そもそもこれはどういう目的でやっているかという、子どものあそびの重要性をワークショップという形をとおして地域の人や学生や近隣のそこにかかわる人みんなで考えてみようというのがこのプロジェクトの大きなテーマになっていると思います。こんな感じです。色々な団体が関わっています。学内の美術部とかもありますし、保育科、短大の方の有志、KEYAKIDS、保育所が一緒になって企画を進めたりですとか、音楽のゼミであったりですとか、地域の人たちのグループであったりとか色々なグループ、子育て団体とか家庭科のゼミなんかも参加しています。そういう感じで、色々な人たちがワークショップを考えながら実際に実践して行っているのがアートパークです。さっきのロボットは盆踊りの時もこんな風に展示しました。この周りでみんなで踊りました。

ちょっとムービーがあるので大きい画面で見させていただきます。

それでは、後半ほとんど芸術士の方にはお話を頂くので。今回芸術士とコメンテーターの方々に。臼井さんね、臼井さんにも感想とか。

臼井：松戸市役所の臼井です。それぞれの発表を聞いていて色々思うことはあるのですが、共通しているところはまちといかに関わる事が非常に重要なことなんだなと思いました。私も4年間地域の人たちと仕事をしているんですけども、やっぱり地域の人からするとなんでアートって必要なんだろう、っていうのは良く聞かれることであるんですね。やっぱりそれというのは三澤先生からもお話あったように、なんで必要かって言った時に答えは無いわけでもあるんですけども、やっぱり経験だったり体験というのを必要な部分があるのかなと。何故かという、まちづくりでアートというのは僕は練習台だと思っているところもあって、まちの資源を使ってどういう風にできるかというところがあって、アートでしかできない部分があって、さっきの江戸川の河川敷の結婚式なんかもそうなんですけども、やっぱりお母さんが江戸川で結婚式挙げたんだよって子どもに伝えられることとか、非常にまちとして重要なんだろうとか、あるいはアートパークにあんなに子どもたちが思いきり遊んだという経験は、多分アートパークでしか出来ないことだと思うんですね。そういう経験をどんどん積み重ねていった上で、やっぱりまちづくりっていうのは本格的に考えられるんだなと今日思いました。

大成：ありがとうございます。かなりまとめな感じになりましたが、一部はこれで一回休憩を入れまして、3時20分から再開したいと思います。次は芸術士さんたちがどういう実践をやっていて、どういう考えでやられているかというのを細かく聞いてみたいと思います。

第二部

6. 公開ワークショップについて

大成：まず最初に、午前中に松戸中央公園で行った子どものアート研究会のワークショップの様子を見ていただきましょう。どういう意図で、これを芸術士さんたちが保育士や学生に向けてやったのかという事もお話を聞きたいと思えますけれども。ちょっと写真をいくつか。

傘の上から絵具を掛けてみたりとか、一人でキノコの絵

を描いている学生もいました。仮装をやっていたりとか、ハンガーをいっぱいつけたりとか、ウェディングドレスを着てみたりですとか、このような活動をまず三本の木をスタートにしていきました。映像があります。大分活動が進んでいくと、ハンガーと傘をつなげて。



阿部：今日午前中に芸術士活動ということでこちらの公園でさせていただきました。このワークショップでは保育士さんですとか学生の方、それから保育士さんになられる方ということでしたので、まず色々な画材を用意してもらいまして。芸術士が、多分このワークショップ形式ではなかなか伝わりにくいと思うんですけども、芸術士が何を大事にしているかというところと一緒に体感してもらえたらなという感じでやっておりました。この活動の意図としましては、例えば私たち保育所に行って活動するんですけども、よく、どちらかという保育士さんはテーマを持って子どもたちに絵を描いてもらうという事が比較的多いように感じました。例えば運動会ですとか、それこそ先ほどのたけのこの絵をみんなで描こうとか、テーマありきの絵ってというのがすごく保育所に行っていて割と多かったの、私たち芸術士が園に行くときはいつも、それとは真逆なんです。例えばこの素材というのは、ただのきっかけなんですけれども、その素材を通して例えばものだったり環境だったり交わりから気づくこと、自分の内側から出てくるものっていうのを、自分自身で発見してそれを表現したい、して欲しい、というところがあります。ねらいと言ったら王道？なんですけれども、そういう気持ちで私たちはいつも取り組んでいるっていうのを、今日午前中に皆さんと一緒に活動を通して一緒にやりました。

大成：伊藤さんはどんなかんで考えてやられてたんですか？結構踊ったりなんていうことで活動を進めていたと思うんですけども。

伊藤：学生さんの反応を見ながら、小さくっていうんですか？表現活動それをしていこうかなと思ひまして、まず私がクラフト紙で変身を始めて、どうかな？という感じで見てたんですけども、段々最初できない感じかなと思ったら、みんな私の様子をふっと遠目で見ながら段々と入ってきてくれて、そして音楽を流したり、あとは表現、パフォーマンスですね。そういう感じで。まあいつもは保育園の小さい子たち相手なので、子どもたちは音楽を流すと乗ってきて、ばんばん村井さんのように踊ったりするようにな



るんで、今回は生徒さん方がやってくれて、表現してくれて、それは全く保育園と同じなんです。この活動は凄く重要で、毎回やっています。

7. 参加者の感想、質疑応答

①きぼうのたから 生沼

大成：はい、ありがとうございます。ではちょっと今日参加された保育士さんとかに聞いてみたいなど。

あと観覧者にも感想とか。まず保育士の方どうでしたか？どなたかいらっしゃいませんか？では、こういう活動が初めてやったという方。結構皆さんやった？初めてという方いらっしゃいます？じゃあさしちやおうかな。生沼さんとかどうでしたか？やってみてどうでしたか？素直な感想を。

生沼：保育園きぼうのたからの保育士をやっております生沼有香です。今日参加してみて、保育士の立場としての考え方と、やってみての感想なんですけど、正直、まずやり始めの時に導入というか、そういうのがなく始まったので、ちょっと戸惑ってしまった部分もあったんですけど、ちょっと聞いてみたいのが、子どもたちに普段やっているときに、導入とかはなしにやっているのかをちょっとおうかがいしたいです。

大成：ありがとうございました。それは質問ですね。導入が今回なかったんじゃないかな、というのが。そのところどうですか？なかったわけでもない？

伊藤：子どもたち対象なので、子どもたちの様子を見ながらやっていきますけど、なんかこうモヤモヤしているのかな、という感じからこう入っていくような感じも必要かなと。何かな？変だな？よくわかんないな？というところから始まっても、別に良いんじゃないかなと。導入も普段あるんですけど、もっと空気感というか子どもたちがなんか今乗るかな？乗らないかな？というのを考えてたら何もできないんですよ。私からば一んとやらなかったら、要するに子どもたちは時間がないというか、1日1日成長しているので時間で大事だと思ったんです。なので私は自分から入っていっちゃう。そういうところがあって、だから、導入っていうもの自体あまり考えないというか。空気、その場の空気。インスピレーションですか？そこが芸術士はちょっと違いますよね。

大成：導入の話で何かありますか？

阿部：芸術士も別に普通に人なので、そんないつもアーティスティックな感じでも全くなく、やっぱり保育士さんと一緒に共同で作ることが多々あるんですね。やっぱり保育士さんに活動の背景だったりですとか、お願いされることもあります。そういう時は導入を入れることもありますけれども、今伊藤さんが言われたように、絵具の準備をしていたら子どもが寄ってきて、「今準備しているんだけどもう始めちゃってるよ、じゃあそこからまあいいや」ということも結構あるので、もう一概に必ず導入をやる、やらないというのは、その場に応じてという感じでやっています。一応保育の中に入るという形で参加させていただいているので。

②桜花学園大学 浅野先生

大成：では観覧された方で意見とか感想などありますか。

浅野：愛知県から来ました。桜花学園大学の浅野と申します。宜しくお願いします。芸術士の方々含めて質問させさせて頂きたいのですが、大成先生含めて発表されていたアートプロジェクトという考え方と、プロジェクトアプローチ、プロジェクトメソッドというか、ずれというか、ちょっと違いがあるのかなと思ったりして。それはなぜかという、一つはアートプロジェクトというふうになった場合には、いわゆる拡大するアート展みたいなの位置づけが少しあるのかなと。パブリックアートと同じような感じの位置づけとしての公教育というか、公共にあるアートという位置づけが非常に強く感じまして。もう一つがプロジェクトメソッドといった場合には、榊先生のお話にあったような、いわゆるデュイとかキルパトリックとか、芸術というよりも教育方法としてのメソッドという位置づけの中、方法としてはアートという位置づけが非常に強いような気がしていて、その2つが違うので先ほどの話ではないですけど、保育における造形活動と、それからプロジェクトアプローチの差が少しあるのかなと感じました。一つお聞きしたかったのが、私のところもいろいろやってまして、私も大好きでこういった活動を見させていただいているのですが、保育者のスキルとか知識というところで言うと、いったいどういうところが実際課題かというのが非常に質問、疑問としてありました。非日常的なアートの活動を週に一回芸術士の方が来てやっているアートの内容と、日常的な保育士の方がやられているような造形の実践で言うと、ちょっと言葉は悪いですけど、非日常のアートの活動というのはいわゆる外注の活動になっている。日常的な保育との違いで言うとそこが大きく違ってくるのかなと、今後そういったプロジェクトアプローチが保育を含め、どんどん広がっていくと良いんじゃないかと思うんですが、広がっていくためにはどんなことが課題としてあるのか、保育士の先生とか教育学、芸術の先生含めましてご意見をお聞きしたいなど。

大成：じゃあそれはちょっと芸術士さんがどういうことをやっているか見てから、また改めて。その中に答えがあるかもしれない。朝のワークショップはいったんここでやめましょう。それぞれの芸術士さんたちに質疑応答も含めていきたいと思います。阿部さんが普段高松でどんなことをやられているかを紹介していきたいと思います。

8. 芸術士の活動について

①阿部

阿部：こちらは高松の西春日保育所というところなんですけども、この映像は今テントを作っているところです。ここは山が後ろにありまして、凄く自然が豊かなところなんです。私は毎週一回ここに行っておりまして、一緒に子どもたちと散歩に行って虫を捕まえたり、それからお山に登ったりして、そんな中からじゃあちょっといろいろ拾ってきて素材に使えるかもね、というので、木やら石やらお花やらいろいろ拾ってきた中の一つがこの大きな木の枝です。ここの保育所の特色としては、木工をやっているんです。私専門が彫刻なんですけれども、子どもたちとのこぎりとかを使いながら、木工の活動も一緒にやっています。これはその木工の活動やら色々素材を使

ってやる活動を別にやりつつの、ふっと湧き上がってきた一つの現象です。この園では毎年夏にキャンプに行くんですけど、そうするとキャンプにまつわることということで子どもたちの中でテントというのが湧き上がってきたらしいんですね。先生とのやり取りで、今子どもたちがこんなことに興味を持っていて、というのを逐一お話をうかがったりして、そっかじゃあテントを作ってみようか？という風に言ったら、よし！という感じで、そしたら何で作ろうかね？というので、私も色々と提案をして、布とか、色んな遊具だったりとか、それから椅子だったりとか、その中の一つがこの木だったんです。せっかく山から拾ってきたし、それじゃあ木で作ってみようというので、まずテントづくりが始まりました。これは大体五月ぐらいから始まり、10月くらいまでずーっとずーっとそのテントが園庭の片隅に置かれて、朝のまだみんなが集まる前にやりたい子どもたちがここに来て集まって、私ももちろんここに一緒にいるんですけども、一緒に活動するというような形でやっておりました。映像がちょっとあります。テントの途中で子どもたちとこんなテントにしたいなというテントの絵も描いたんですけど。ここが裏山です。裏山では色んな沢山のものを見つけます。初めは小っちゃいものしか持ってこなかった子どもたちも、テントをやり始めると俄然張り切って、すごいでっかい木を抱えてくるんですね。テントの始まりはこのようにして、私も子どもたちができるもので留めていって、ひもですることになりました。ちょっと大人の人も加わって、足りないところは補いつつ、でもここにおきたいと言ったら一緒に考えながらやっていました。私は映像を撮りつつやっています。これは本当にテントができた初めの日という感じですよ。このボディはあつという間に、半日もかからずにできてしまいました。これが出来たら、そしたら雨が降ってきたんです。雨が降ってきたら画材庫から布をひっぱり出してきて、屋根を子どもたちが勝手に作り始めました。テントに参加しない子は、傍らで木で遊んだりしています。屋根が出来て、みんな中に入りたがってちょっときゅうきゅうになったりとかしています。このあとなんですけれども、ある子どもが保育室から遊び道具を持ってきて、普段ままごととかで使っている道具ですね。それを持って、なんと家ができた後に暮らしが始まってしまいました。このように自分たちでビニールを画材庫から勝手に持ち出してきて、ちょっと定員オーバーなので喧嘩もあつたりするんですけども、こんな感じで始まりました。すごくすごくゆっくりな活動です。今日やりたくないわーっという活動ももちろんあるんですけども、やりたい子が来てここに参加するという感じで、本当に気が乗らなかつたら部屋の中で遊んでいる子もいました。また夏になると、絵具の活動というのが入ってくるので、あとプールですね。テントで、ちょっと危うい感じなんですけれども、届かないところに一生懸命木を届けさせようとして、ぐらぐらしながら足場にしています。これはもう私が週一回行ったときに、「阿部先生一緒にテントやろうよ！」と子どもたちが引っ張って「よし、じゃあ今日はどうしようかな？」って考えながらやっています。夏になるとプールの活動が入って、ビシャビシャと水も使えるようになるので、絵具も結構ダイナミックに使えるようになってくると、じゃあついでにテントも塗っちゃえ、というのでどんどんカラフルに塗っていきます。テントにも塗りつつ、屋根にも塗りつつ、という感じですね。この後最終形態で、秋バージョンというのが実はあるんですけど、それは10月くらいにこのテントに毛糸をぐるぐる巻きつけて、暖かい冬仕様にした秋バージョンというのがあります。最終的に、芸術士の毎年やっている報告展というのがあるんですけども、ワッセワッセとトラックで運び込んで展示をしました。その展示会場に子どもたちも来て、そこ

でまたテントに色々ぶら下げたり、制作もしたりという感じで活動をしました。これは本当に一部なんですけれども。こういう感じです。

②伊藤

大成：それでは伊藤さんは、まず映像から。

伊藤：これはですね、絵具の白を好きなだけ出して、段ボールの上に絵具を出して、ツルツルツルツル滑っていくという感じですけど。これは私がやったわけではなくて、子どもたちが考えて自分で表現しています。さっきも言いましたけどね、導入という事もあるんですけど、私の場合は導入とかそういうのは無しなんです。どちらかという、私自身がちょっとインパクトがあるので、それで良いんじゃないかなと。インパクトで。これで遠くから見ている人もいれば、やりたい人もいる。別に難しく考えなくていいんだなと思っています。やらなくても、見ているだけでも、子どもたちもそうですけど大人もそうですけど、頭の中でやっている。それも一つの造形表現かなと思っています。別に形とかそういう、作品を制作するとか一切。

そのプロセスとか過程を大事にして。とにかく子どもたち中心です。大人とか、保育園の先生とか全然考えていません。全部子どもたち中心です。そしてこの子どもたちを認めてあげるといふんでしょうか、居場所というんでしょうか、そういうところを私が作ってあげているのかなというかんじです。そういう場所もやはり必要じゃないかなと思ってるんです。

③その他の活動の紹介

大成：それでは太田さんの方からは、保育士の方が芸術士について語っているという映像があるんですけども。

太田：こちら、先ほど二人の活動の紹介にもあったんですけども、午前中のワークショップで、導入の部分がなかったのは何か意図があるとか、あとは芸術士がお祭りみたいに、今日みたいにやってきて活動する、あとは日常的に芸術士のような活動を継続していくにはどういう風にしていけばいいかという質問がありましたけれども、その部分を保育士と芸術士との視点の違いというところをこの先生の映像で見られます。

大成：実際は保育の中で保育士さんがいて、芸術士がいてという事なんですけど、保育士と芸術士は何が違うのかというのが保育士さんの言葉で語られてるという、それをちょっと見ていただきます。

〈映像〉

保育士：今里保育所に来ていただいている芸術士さんは、子どもはもちろん、大人に対して、ものに対して、とても豊かに対話されます。コミュニケーション能力の高い方だとつくづく思っております。子どもとのかかわりから、色々な切り口を私たちに感じさせてくれる他に、専門家や色々な考えを持った人たちとのかかわりを、私たちに提供して下さるのでとても刺激になります。午後からはドキュメンテーション作成の時間となっています。保育士もこのようにドキュメンテーションを作成しますが、別に芸術士さんも独自の目線で作成してくれています。これが一年間の芸術士さんのドキュメンテーションなんですけども、これは保護者からの一番の人気です。どれよりも人気

なんです。この時間は、先ほどあらい先生やなかまつ先生がおっしゃいましたが、私たち大人との対話の時間になっております。この時間がものすごく大事であり、これがなかったら私たちもまたこの4年間のこういう保育を乗り越えることができなかつたんじゃないかなと思うくらい、大切なものだったんじゃないかと思います。それと、お二人は遊びの資料を集めていただいたりしています。今出ていますけれども、今から4枚の写真をお見せします。それぞれ、保育士さんと芸術士さんが同じ場面を撮ったところなんです。どうでしょう？同じ場面ですけども、このように人によって職業によったりしますけれども、環境によって、見方、考え方、感じ方が違うという事を、お互いに認め合って刺激を受けあうところで、私たちは成長して、そして保育も成長していくんじゃないかなと思っています。子どもたちにとって、対話の輪が広がるのは素晴らしいことです。今里保育所にとってこの三年間、芸術士派遣事業を続けて受けさせていただいていることに感謝しています。これからもずっとこの保育が続けていけたらなという希望もありますので、芸術士派遣事業はなくならないでほしいなと常に思っております。ありがとうございました。

太田：先ほどの映像の紹介にもあったように、同じ場面を記録した二枚の画像の比較だったんですけども、見ているところが全く違う。ドキュメンテーションをすり合わせて対話をするのが、先ほどの今里保育園で大切にされている事です。芸術士が始まったのが2009年の11月なんですけども、レジジョ・エミリアを勉強していた当時のアーキペラゴのメンバーが芸術士のいる幼稚園で、実際には保育所で始まったんですけども、企画書を元にアーキペラゴのネットワークを使って地元のアーティストを集めました。レジジョなんて言葉も知らなかったメンバーが、いざ保育所に行きましょうとなると、どういう目的をもって、どういう意識をもって、保育所に乗り込んでいけばいいんだろうというところを考えて、メンバー皆が対話をするところからスタートしました。でも実際に事業が11月からスタートしてしまうのでアーティストは身一つで子どもと女性がほとんどの職場なんですけれども、そこにポンと放り出されるわけですね。最初みんなで決めた取り決めというのが、それぞれ専門を持ったアーティストなんですけども、自分の専門のこと、ワークショップはやらないことにしよう、という風に決めていきました。芸術士のいる時間は朝の9時から夕方4時までなんですけど、朝行ってですね、午前中は子どもと外で遊んだりとか本と一緒に読んだりとかして、昼はご飯を一緒に食べ、それから午後は午睡をしますんで、寝かしつけをしながら先生と対話をして、子どもが起きてきたら一緒におやつを食べて、夕方にさよならをするわけです。アートのプロフェッショナル、アートの表現者ですから、そういう人たちが自分にできることは何だろう？と、そこで考えるわけですね。ワークショップという武器を持たないで、その場所に乗るわけですから。今日皆さんが午前中にワークショップに参加された方はわかると思うんですけども、何々をしましょうという導入がないままスタートして、とてもモヤモヤと感じたと思います。私たちもずっと、いま



でこそ徐々に形式が確立されたりですとか、この芸術士はこういう事が得意だよ、ってというのが徐々に構築されてはいるんですけども、最初は私に何ができるんだろう？ここの保育所とかこの子どもたちのために、この子どもたちが求めている事って何だろう？という風に考えることからスタートしました。なので、あえて今日のワークショップでは、テーマというか、決まった決まりを持たないでスタートしたんですけども、苦しみながらも考える、お互いに耳を傾けて相手が求めていることとか、やろうとしている事、それから何ができるだろう。そんな風に場所に身を任せて考えてみることを実感してもらいたかったのが、私たちが今日午前中やったワークショップの答えになるかなと思います。

大成：実際保育士が撮った場面と芸術士が撮った場面と同じシーンなのにどう違うんですかこれは？

太田：これは大きい風車を回そうとして子どもが走っている映像ですね。これは正面から子どもが一生懸命大きい風車と対比されて写っている画像なんですけれども、芸術士は多分後ろの方から、後方から撮っている。殆んど風車がメインではなくて、子どもが一生懸命前に前進しようとしている姿をアングルのメインにして撮っています。だから、何とかを目当てにして何とかが出来ました、というのではなくて、その過程の、その瞬間を切り取ってこの子どもたちが走っているこの姿が写っている美しさというのを切り取った一枚。この今里保育所に行っているのは村井芸術士、さっきダンスしていた芸術士なんですけれども、彼がつむぎだすドキュメントはとてもポエティックですね、芸術士によって切り取り方も様々です。

大成：つまり、どういうことですか？保育士はもうちょっと記録的なことを意識している？顔が表現になっている方が保育士の方だと思うんですけど、こっちは顔が出てないですよ。そういう事ですか？

太田：その芸術士のドキュメントにしなさい、というのではなくて、保育士のドキュメントと芸術士のドキュメントをすり合わせる行為が重要だと。だから、多様な視点を持って保育に取り組む。一人保育に参加する事が加わるだけで、こんなに広がりを持つこと、それから多様な考えを持つこと、それから子どもを見る多様な視点が生まれる、子どもを認めるチャンスが沢山生まれてくるという事につながるんだなと。

大成：じゃあ村井さんの見てもらいます？儀式のとか。

阿部：これは大きな幼稚園で、芸術士三人で取り組んだ試みになります。とても人数の多い幼稚園だったので、ちょっと村を作ろうかと、この時はテーマを決めまして、後ろでバサバサ振っているのが村井芸術士なんですけれども、村井芸術士が村長という設定にして、ちょっと儀式めいたことをやりました。これは特に言葉には意味は無いんですけども、奥にいる芸術士が村井芸術士が言っていることを子どもたちに通訳している場面です。もう、めっちゃ聞いているんです、子どもたちが。これも特に何々しましょう、これから太鼓叩きましょうと村井芸術士は言っていな

いんですけれども、なぜか自然発生的によくこのようなことが起きます。訳が分からない事を言っている事ほど、子どもたちは真剣に聞かっている、とても面白いです。彼はクラスの中でも本当にやんちゃで、目を離したらどこかに行っちゃおうというような子なんですけれども、木太幼稚園というんですけれども、この木太村の村を作ったんですけれども、その中で絵具を使ったんですけれども、その時にはもう一番最後まで残って本当に楽しそうに絵具でグルグル回っていました。

太田：芸術士が、春に各施設にこの人は一年間行きますというのが決まるんですけれども、どの芸術士が来るのかはまだ子どもたちは知りません。この中に隠れています。

大成：はい、大体こんな感じで、少しだけだけでも見ていただきました。それでは皆さん、コメンテーターの方全員一回上がっていただいて、ちょっと質疑応答の時間を15分くらい。ドキュメントの大事さが見られなかったですね。それを含めて、芸術士というのがどういう役割をしているのかというのか。

太田：ドキュメントという風に、レτζョでもずっと記録をされているように、子どもが感じている姿とか、子どもが発した言葉というのを拾って、芸術士たちはコンデジを一人一台持って、一緒に活動しながら片手間で記録をとっているんですけれども、皆さんお手元にある資料にある毎年の報告書も、それは実際に芸術士が安いカメラですのですぐ壊れちゃうんですけれども、そのカメラで実際に撮った映像を引用して作成しています。その活動報告冊子の中は本当に一年間の活動の一部の抜粋の物です。こちらの映像は、これはその編集前の毎日の記録のドキュメンテーションです。さっき、今里保育所の所長が触れていたように、こちらでは保育士の芸術士の毎日ドキュメントを一枚作るんですけれども、こういう風に生のドキュメントが存在します。レτζョでもドキュメンテーションに力を入れていることと同じように、成果だけを見ない、だから過程とか、子どもが感じている事、それから子どもの言葉を書き留めて、それを撮りためていく事、記録を続けていくことが、やはりレτζョと同じように私たちも続けなければいけない、過程を重視するというのを忘れないために、大切に。これ、結構作るのしんどいんですね。みんなパソコン苦手だし、画像の整理も凄い大変だし、それから個人情報の意味でも画像の取り扱いというのは結構デリケートな部分があるので、ここに出ているのも、すぐには簡単には出版物にはできませんし、なんだけれども、保育所ですので普段お父さんやお母さんには見せられないような、子どもたちは素晴らしい顔をしているよ、素晴らしい表情をしてこんなつぶやきをして、こんなに生き生きと表現しているよ、ということを伝えられる。それから先生とも、あ、こんな風に芸術士さんは子どものことを見てくれたんだね、こういう思いをもって今日の活動を実施してくれたんだね、ということが、この一枚のドキュメントの目でまた交流が深まっていくみたいです。

阿部：このドキュメントは、その日にすごした、私たちは記録者というか、その目撃者。現場の目撃者でもあるので、大事な一つのコミュニケーションツールになっています。それは保育士さんに対してもそうなんですけれども、親御さんに向けてのメッセージでもあります。今日洋服が泥だら

けなただけけれど何したん？みたいな感じで聞かれたときに、今日はこんなんして、こんなに凄い素敵で写っている。こんなに楽しいことをしたんだね、というのを、言葉ではなかなか伝えきれない部分を伝えるという道具になっています。あとこれは凄く大きい、今日みたいにダイナミックな活動をもちろんするんですけども、私たちは一日の間、一年間子どもたちに寄り添って、普段の生活も共にしますので、その中で子どもが発する言葉であったりとか、本当に小さな、大きなことだけではなくて、小さな言葉であったりそういうものも拾ってここに書き留めたりします。それからクスリとする面白いような言葉ですね。例えば「好きなフライパンは何ですか？」自己紹介の時に子どもが芸術士に聞いた言葉なんですけれども、こんなユニークな言葉だったりとか、あと私はこういうのをいつも首から下げていて、子どもたちがその時に発した言葉だったりとか、そういうことが記録できるときは記録しています。ただ、何しろ忙しいのであれもこれもやらなければいけない中で、なかなかハードな感じですが、やってみてやっぱり振り返ると、ドキュメントというのはコミュニケーションのツールとして凄く正しかったんだなと感じられます。

9. 質疑応答

大成：じゃあ会場の中で質問のある方いらっしゃいますか？さっきの浅野先生の質問、もう一回簡単に言っていただけますか？

浅野：質問はですね、アートプロジェクトというのは方法の違い、やり方の違いがある中で、質問のあとスピーチを見させていただいて内容が少しかぶっていたのでそれを含めて保育者と芸術士の方の協働性とか、ドキュメントが大事だとか色々わかったんですけど、その中での保育者のスキルはどこを目指していくべきなのか、課題なのかということ。

太田：芸術士の活動はですね、とにかく色んな取り組み方があって、クラスに芸術士が入って、クラス単位で活動する場合もあれば、自由遊びの中で芸術士がコーナーを設けて、そこに自由に遊びに来るっていうやり方もあります。大事なのは、保育士の先生が乗らないと子どもが乗ってこないというのが私が実践していてよく感じたことです。なので、保育士の先生は一步引いてクラス全体を見ながら保育を展開していくと思うんですけど、そうじゃなくて、すべての活動とか、学びの場っていうことは、子どものために用意されたものでは、子どもは楽しめない。大人も楽しい学びの場とか活動の場とかネタとかプロジェクトでないと、良い活動は生まれにくいんじゃないかなと思います。なので、保育士の先生がもっと楽しく、発表会だったりとか、こんなことをなんでやらないかんの？ってすごい苦しそうに、毎年そんな時期が来ると先生悩むんですよ。今年の運動会のダンス一緒にネタ考えてくれませんか？とか、ちょっと小道具悩んでるんで発表会の背景、いついつまでに作らないといけないんで先生どうかお願いします、って言われるんですけど、それってなんか違うと思うんですよ。だから、芸術士が行って、一番不思議に感じるんですが、なんで毎年苦しい思いをしてやらなきゃいけないんだろう？もっと楽しく普段芸術士がもっと楽しい世界に変えてですね、その楽しい生活が、例えば生活発表会だったりとか運動会に反映されていくべき姿なんだなと思うんですけども。ちょっとどうでしょう？私はそういう風に思

うんですけど。

阿部：保育士さんが目指す方向性みたいな事でしょうか？

私たち芸術士は、保育士さんあってこそその芸術士なんです。やっぱり子どもに対して全く利害関係とかは無いですから、クラスも運営していませんし、保育士さんがクラスでドンと構えて子どもたちを見ていてくれるからこそ芸術士が自分のやりたいことだったり、もちろん保育士さんと擦り合わせてというのがありますけど、活動を自由にできるということがあります。その活動の中で、保育士さんにもっといっぱい遊ぶために遊んで欲しいなあって思います。何々のために何かをやるっているのは、やっぱり苦しいと思うので、遊ぶために遊ぶところから、いろいろ生まれてくるんじゃないかなって思うので、それも、私はどういう風に保育士さんがどういう方向を目指したら良いかっていうのはわからないんですけども、それも、違う目線で芸術士が入るという事で、一緒に対話をするんですね。モヤモヤしながら。保育士さんが戸惑う部分もいっぱいありますし、こっちとしても「え、なんで運動会やるの？」とか、こんな感じなのになってありますけれども、そういうのも含めて一緒にモヤモヤする、一緒に対話するっていう。なので、答えは多分ないと思います。この異質なものが保育の世界の中に入って、一緒にモヤモヤして、一緒に何か作り上げていく、一緒に方向性を見出していく。多分それは高松だからこそその方向性というのもあると思いますし、多分それぞれの地域で、それぞれの園で、それぞれのクラスで、それぞれ自分自身が見つけていくことかなと思っています。

伊藤：私が保育園に行って活動するときはですね、先生という形で入らないんですね。子どもたちは給食のおばさん、用務員のおじさん、そして私、みたいなそういう感覚で入ってくるので、子どもたちは先入観は持たないし、自然と入ってきます。それで、メリハリっていうのが私の活動ではやはりダイナミックな活動もあるし、静かな活動もあるんですけど、その時のメリハリは保育士の先生がいなければ実際できません。なので、その私の活動の時は、子どもたちが自由に開放されている場所、居場所なのかなと。そういう感じですけど。実際親御さんとか保護者とか、保育士の先生ができない部分を私が入って、何か癒しとか居場所とか、ちょっとわかんないですけどね、この難しい世の中に、どうやったら子どもたちが生きる力っていうのか、そういうのを育ていけるのかなって。やっぱりちょっとなんか難しいんですけど、外部から入ってくる人もいても良いんじゃないかなとか、そういう感じで子どもたちを手助けしたいっていう。そういう存在なのかなって。

三澤：最近よく感じるんですけども、子どもは大人に気に入られたいですよ。と思っているんですよ。やっぱり大人に捨てられたら生きていけないなって。だからどうしても大人とか先生に気に入られたいという意識がどこかにある気がします。学校というのはその最たるもので、評価なんかがあるわけで。そのような子どもが常に先生の方を向いていて、常に先生に対して反応を返していくという構造から、芸術士が入ってくるとそれを断ち切ってくれるような気がするんですよ。つまり、一人一人の存在として、元々アートなんかはそうなんだと思うんですけど、いかに生きるかという事が関わってくると思うんですけど、その気に入られたい子どもたちが、無理し

て先生に気に入られようとしている子どもたちが、その関係を断ち切って素直に自分を表現できるようになるところがあるような気がしています。それは旅するムサビをやっているでもそうなんです、日常、先生たちには見せないような表情を出すんですよ。または、普段話さない子が凄く話したり。先生たちも凄くびっくりする。「あの子があんなに話すの!」。それは関係がないからですよ、その先生と赤の他人だからそれができるといふようなところがあって。アートっていうのはそういう一人一人をそういうしがらみから外して、断ち切って、個を自立させるっていうのかな。一人一人を際立たせてくれるのが凄く造形の面白さだと思います。そういった点では、先ほど浅野先生から保育者養成の中で芸術をどのように使うかというのを、ある意味教員というのは教師の面も持ってなければいけないし、同時に一人の人間として対一の関係を作っていくかなければいけないし、そういう一人の子どもというのを出現させるのに、その場で出現させるのに、アートって有効になってくるんじゃないのかな、造形活動って有効になってくるんじゃないかなと。そのようなことを凄く感じました。自分を素直に出せる、表現として素直に出せるような場面を、作っていく手段としてアートを使っていく、という感じですかね。あくまでも先ほどのアートプロジェクトもそうなんです、あくまでも手段としてアートは機能していくと私は思っています。

大成：それでは質問、次の方。

質問者：貴重な活動の報告有り難う御座いました。ぜひとも一つ聞きたかったことがあるんですけども、高松市の芸術士の方々のギャラはどの位なんでしょう？それと、良かったらこういうドキュメンタリーの本であるとか、教材費の予算等はどういう風に捻出されて、どこがどういう風に決定していくのか。そういうイニシアティブっていうのはどの辺がしっかりと取っているのでしょうか？どうするとうまくいくのでしょうか？ちょっとそこを教えてください。お願いします。

太田：芸術士の給与は、高松市の非常勤職員のお給料に合わせています。あと、予算なんですけども、2014年度、高松市35施設で3300万程度です。材料費はですね、各施設一か月、約1万円くらい予算で運営しています。残りはですね、諸々にかかるこういう風なドキュメンテーションを作るパソコンのリース代だったりとか、あとは芸術士は保育所にも行っているんで検便もきちんと、健康診断とかに使ったりですとか、人件費と材料費がメインの活動の予算になります。あとは、皆さんに今日お配りしたような活動報告の記録を作る本を印刷する予算ですとか、市の事業ですので、市民に向けて活動の成果を発表する機会を年に一回やります。殆んど手作りのようなものなんですけども、写真パネルを印刷したりですとか、映像を作って、会場を借りて、その会場のしつらえをして運営する予算というのが大まかな予算になっています。2009年から始まって最初は、芸術士って何なの？ってお互いに分からなくてですね、芸術士の派遣を希望しますか？って対象施設に希望をとったところ手を挙げたのが約30の施設でした。市内の対象施設が当時公立の保育所が約100か所ですので、三分の一が手を挙げてスタートしましたが、実施を重ねていく上でやっぱり現場でとてもいい活動だと保護者からも凄く好評で、徐々に希望が増えてきていま

す。昨年度末にとった希望が、約半数の施設がうちに来てほしいという風に手を挙げられたんですけれども、急に予算というのは中々増やすことができません。でも、市としては今後希望の数にそえるだけ、派遣を増やしていきたいという風に意向を示してくださっています。

質問者：すいません、もう一つよろしいでしょうか？この芸術士の方々の資格というんですか、そういう資格審査とかそういうものはどのような形でございますでしょうか？

太田：資格は、アート活動を有する事が条件です。別に藝大を出ていなくてもOKで、大学を出ていなくてもOKです。でも、その人の活動とかその人の考え方とかその人の人となりを実際に会ってお話を伺って、どういう活動をしているかっていうのを見て、あ、この人だったら何か問題にぶち当たったときに、何か突破口を見出すスキルがあるなど認められる方に保育所に行っていていただきます。

質問者：ありがとうございました。

大成：時間になったのですが、どなたかいらっしゃいます？

宮本：宮本と申します。今年4月から保育園で仕事を始めたばかりの見習いなのですが、20年間よくほかの全く別の大人の業界にいて、これから自発的な人が育たなければ社会はおかしくなるなど問題意識を持ちまして、自分の子どももいたこともあって幼児教育の場に身を投じたものです。今日お話を聞いていて、今実際現場で1歳児を担当しているんですけども、すでに一歳児の時点でふざけたり、自分が思い通りにしたいという表現をすごくします。ですが、保育指針ではやってはいけないこと。なかなか自由が認められない環境が多いかと感じています。もちろんそれが小学校とかだとどんどん増えるんですけども、なので今芸術士のお話を聞いて、まさに心の解放というか、やっぱり大人も含めて非常にストレスフルな世の中なので、多分親御さんもあまり元気がなく、生き生きしてなかったりすると思って。子どもが非常に鬱屈しているとか、何か爆発したいのに出場所がないみたいな、そういうことがあるのかな？と個人的に感じていて。あまりダメだダメだじゃなくて、さっきの絵の具にまみれている伊藤先生の、ああいう活動は本当にやっぱり子どもは求めているんだなど見ながら凄く感じました。すごくいい活動だなと。もしできれば、たった5年間ですけど、例えば子どもが非常に問題を抱えていたり、ちょっと迷惑をかけるような子どもだったけど芸術士派遣の活動をやって非常に社会性を持ったとか、もし非常に明るくなったとか、なにか凄く子どもが変わって実際に良かったというような、成果は求めてはいけないんですけど、成果的なものがあれば凄く聞きたいなど。

伊藤：今東久留米の保育園で3年目をやっているんですけど、卒業して今学童で丁度保育園に来ている小学校2年生の子がですね、将来は芸術士になりたいと言ってくれたんです。という事は、かなりその幼児期にインパクトというか、彼女なりに色んなものを得たのかなと。そういう感じでとても嬉しく思っています。

阿部：私は直接クラスを受け持っているというわけではないので、保育士さんからこの子が変わったというようなお話を聞くような感じなんですけど、これの前の写真で、彼が、保育士さんが言うには少し難しい子で、お母さんとの関係もちよと難しいんだよという話を保育士さんから聞いていて、ここは幼保一体型で、午後は幼稚園の子がお昼寝しないので、この子と、人数も少ない所ですので、ほぼ二三人くらいが幼稚園に残ってお迎えの時間を待つんです。その間に私と一緒に活動をするんですけども、人数が本当に少ないのでほぼ一对一の状態に関わることができたんですね。彼とは、私は特に問題があるとかそういう話は聞いていなかったんですけど、彼はいつも宇宙について凄く興味があるらしくて、いつもいつも宇宙船だったりとか、宇宙の話をしてくれたんです。作るものも、今手で持っているのが、これが宇宙船なんですけれども、ああいうものを毎回毎回作るんですけども、毎回毎回作る度に、一週間に一回しか行ってないので、先週からの続きの話で今週の宇宙の物語が続いていくんです。それを私がずっとずっと聞き続けていて、先生があとで私に教えてくれたのは、どうやらそれが凄く良かったらしい。彼にとっては凄く良かったんです。どのように変わったかっていうのはちょっと喋れなかったんですけども、そういう話はお伺いしました。やっぱり凄く、ものすごくいい子にクラスに関わっていている訳ではないので、その程度で保育士さんから聞くというようなくらいですね。あとあのほかの芸術士の人、沢山高松の方に芸術士おられますので、またそれぞれ多分聞いたら、それぞれの保育所でのこういった保育士さんからの声だったりとか子どもの変化だったりとか聞けると思うんですけど、ちょっと私の方はこのくらいなんですけど。

大成：ではもう一方。

質問者：今日群馬県から来ました。私立の保育園で去年の11月から芸術士的な活動をしたいという事で依頼を受けてしているものです。入ってみて思ったんですけど、保育士の先生って凄く忙しくて、園によって違うのかもしれないですけど、一人の先生が凄く沢山の子を見ていたりとか、ご飯食べるときも仕事という感じで。高松の芸術士の方は先ほど村井先生のことをおっしゃった先生もいたんですけど、先生と村井芸術士と一緒に話をしたりとかそれがなかったら続けられなかったというお話があったんですけど、そういう時間とかはどのようにとっているのかなど。作られたドキュメントの物とかは、どのように保護者の人の目に触れるのかというのを伺ってみました。

阿部：ドキュメントは帰りまでに。午後の時間がお昼寝の時間なので、子どもたちの。帰りまでに作って、玄関のところとかに貼って見られるような状態にしています。できるだけそれを時間にやれるように頑張っているんですけど。あと保育士さんとの会話なんですけれども、そのお昼寝の時間にできるだけ持つようにしています。

大成：本当は最後に松戸市の保育士さんにお話を聞きたいな、感想を聞きたいなと思っていたのですが、ちょっと時間も押してきたので、実はこの後ロビーで意見交換会という感じで芸術士さんと直に

お話し、パネルなどもありますのでその前でお話をする時間というのを作りたいかなと思います。ちょっとこのシンポジウムでは明らかにならなかった部分も沢山あると思うんですけど、是非その場でお話をさせていただければと思います。それから最後にアンケートをお配りしたものがありますので、それも書いていただければと思います。

今日は芸術士の皆さん、どうもありがとうございました。

コメンテーターの方もロビーで。皆さん対話をしながら 17:30 くらいまで。宜しくご参加お願いします。



① 意見交換会が行われたロビーの様子



②伊藤芸術士が活動している東京の保育所での作品



③伊藤芸術士が子どもたちの作品を拾い集め、ドキュメントしたアートブック

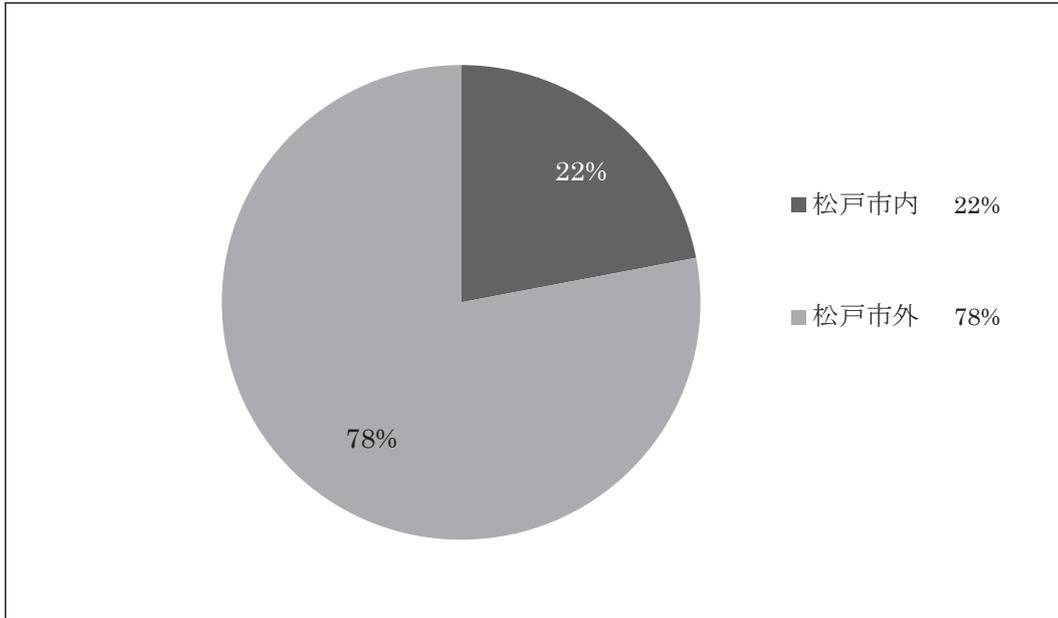


(b)アンケート結果、ご意見ご感想

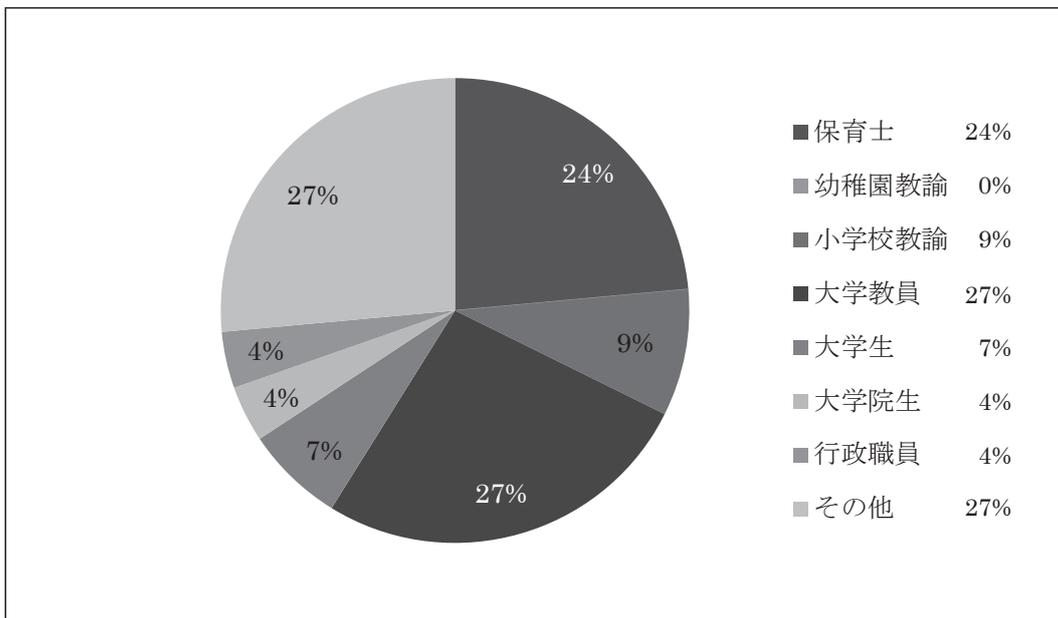
①アンケート結果集計

参加者：受付人数 68名、回答者数 45名

Q1. どこからいらっしゃいましたか？



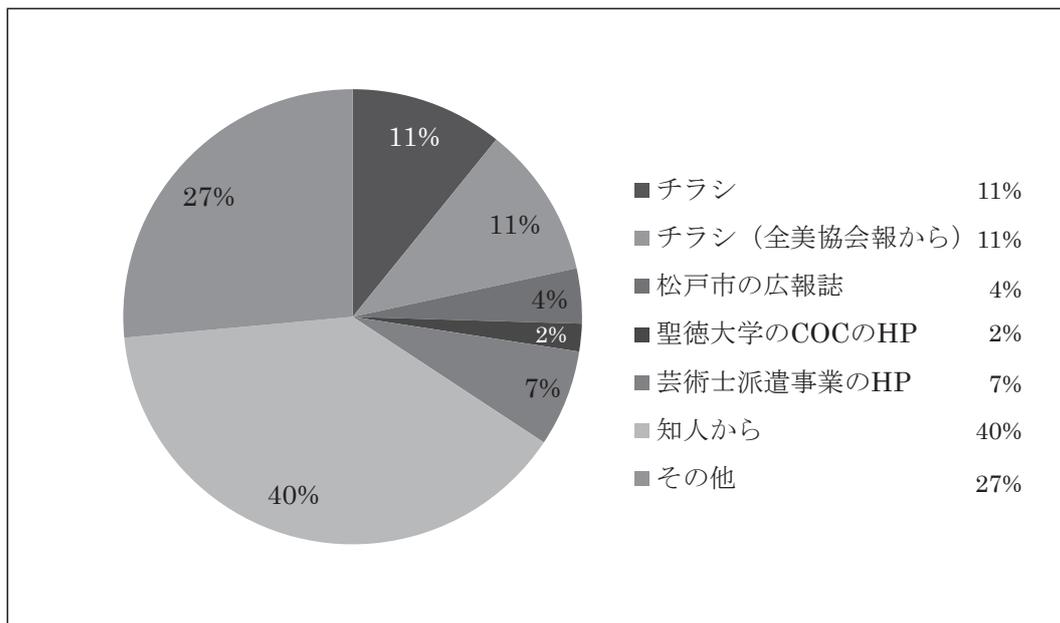
Q2. 所属



※その他（12名）

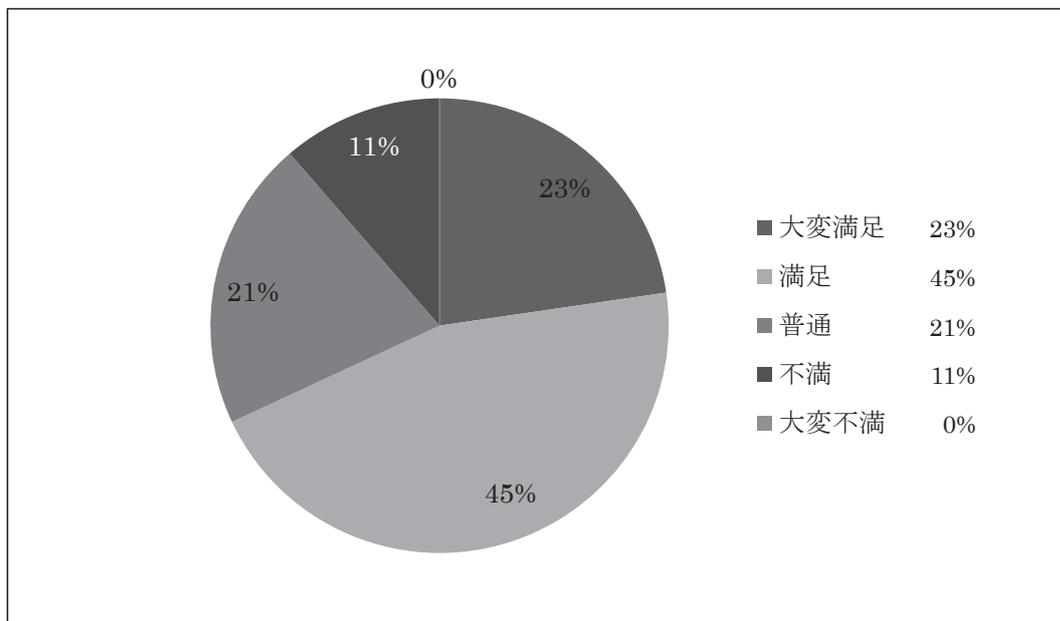
- ・アートワークセラピスト、造形教室、保育
- ・NPO理事
- ・フリー
- ・子ども造形教室（自営）
- ・幼児教育関係講師
- ・中学校教諭
- ・アートセラピスト
- ・大学院職員

Q3. シンポジウムをどのように知りましたか？

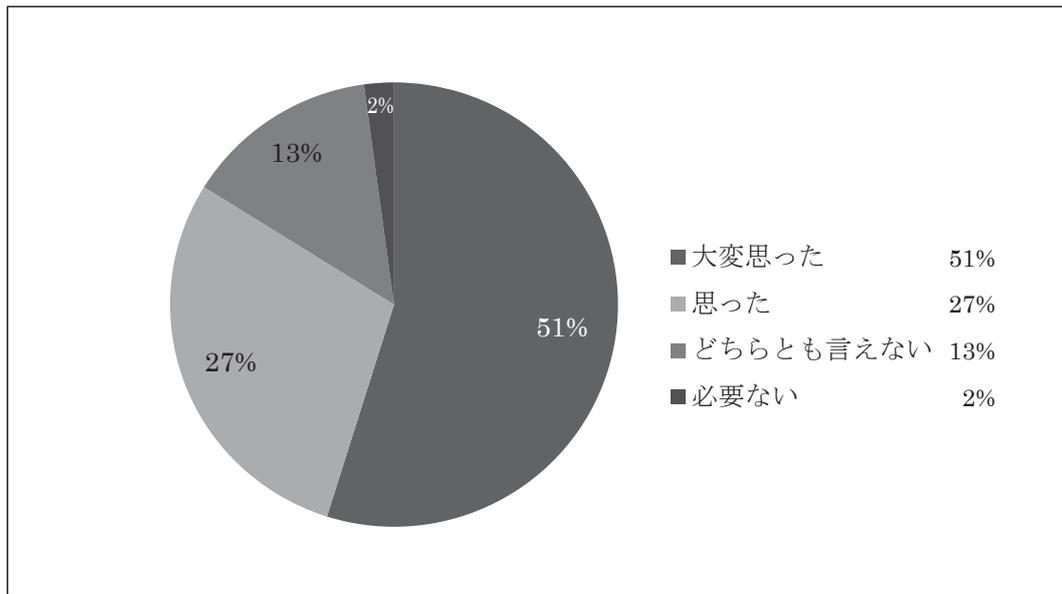


- ※その他 (12名)
- ・北沢先生、大成先生、三澤先生から
 - ・三澤先生の Facebook から
 - ・アーキペラゴの Facebook から
 - ・新潟県立大学 戸潤教授の紹介

Q4. シンポジウムの内容はいかがでしたか？



Q5. 高松市のような芸術士派遣事業があなたの市町村にも必要だと感じましたか？



Q6. Q5の回答の理由をお書きください。

「大変思った」理由

- ・保育士は日常の諸々保育だけでいっぱい。そこに造形をすることでやっつけ仕事となり、保育士はもちろん子どもがかわいそうだし、日本の未来はきびしいから。
- ・私の住まう小さな町の保育所（小学校）での活動を自分の子ども、教室に来る子どもたちを通じて、心を育てる美術、図工、工作が大事にされていない実感がある。ということで自分（教室の講師）が“芸術士”の巧みな表現は違うと思います。形、立場で関われるかと思案しています。大切な学びをありがとうございました。
- ・シンポジウムに参加するまでは、芸術士の視点を保育士も持つ必要があるのでは？と思っていましたが、多様な視点を保育の中に取り入れ、色々な人と色々な関係を築く経験が、子どもの居場所を作り育てていく…ということが理解できました。
- ・現場の為に必要だと思われるから。
- ・小学校の図画工作で思い切った造形活動をやりたい！と思っていても、材料や場所、となりの学校、保護者…などいろいろなことを考えてしまい、どうしても制限が増えてしまう。ですが、「芸術士」という専門家の方が来てくれると、心強い味方になると思いました。また、子どもたちにとっても豊かな感性が磨かれ、いろいろな大人に認められることで自信を持って成長でき、いいと思えました。
- ・保育士の仕事を助けられる。子どもにとって有益なものだと思った。
- ・この様な取り組みは行っていないと思うので、もっと自分を楽しく表現する（できる）場が必要だと思ったから。
- ・子ども自身の内なる欲求を発する機会がもっとあるべきと感じるから。決められた枠内であそぶことだけでなく、自分からあそびをつくったり、身体が自由に動いてしまう、楽しくて仕方ないとい

う体験、エネルギーの発散を必要とする子ども（大人も）が多いと感じるので。大変おもしろく拝聴し、参加しました。ありがとうございました。

- ・芸術活動の保障という点で前向きにとらえたいです。
- ・保育所はどんどん狭くなっています。子ども達の体験機会は減っていつてしまう中、芸術士の方がいれば、子ども達に多様な経験を提供できると思います。
- ・2011年のワタリウムでのレッジョエミリアの展示を見てからアトリエリスタとして子ども達と関わりたいと思って準備をしていますが、関東では「芸術士」ということばすら根付いてないし、どう入り込んで自分が活動するベースの機会を得るのか、今のところ分からずにいます。派遣事業が浸透すれば、情報が広がると思います。こういう活動をしたい美術作家達ももっといるはずですが、また、プレゼンの上手な人と下手な人の差が激しい。関東で「芸術士」を紹介する良い機会だったのにプレゼンがあればちょっとかなりもったいない。もっとちゃんと見せるプレゼンをして「芸術士」の大事さを見せてほしい。
- ・自由に芸術に触れさせたい。
- ・保育士は保育指針や保育計画に沿って保育をしている。その時点でねらいがあるが、芸術士の方の視点で保育を共につくれると子ども達の生きる力につながると思った。
- ・芸術士ならではの視点が、子ども達の活動を豊かにすると思ったからです。私の住んでいる地域では造形教室が幼稚園・保育園で行なわれています。しかし、まだまだ人数が足りない地域もあるので、高松市のような芸術士派遣事業を市が支援して行なえるようになってほしいと思います。今日は大変勉強になる一日でした。芸術士の存在がこれからもっともっと地域の人に知ってほしいなと思います。シンポジウムでは、それぞれの先生方のお話がとても興味深かったです。今日知ったことを持ち帰り、同級生や後輩に広めたいと思います。ありがとうございました。
- ・日々の決まった活動以外に、わくわくとした驚きがあるのは面白いと思います。それが子どもの心の自立につながっていくといいです。
- ・保育士の多忙さと、専門職との協働がこれからは必要だと思います。
- ・保育者の現任研修としての効果が大変良いと思います。学びつづける保育者のプログラムとして必要だと思いました。
- ・全国に必要！現場の保育士は忙しすぎるので、ゆとりがないことと、豊かな造形教育をうけて育てこなかった人が残念ながら多い状況があり、アトリエリスタのような外からのアプローチはとりあえずとても有効だと思います。“とりあえず”というのは、保育士養成が変わっていくのにも時間がかかると思うからです。その間にも子どもは育っていつてしまうので…！
- ・保育士と別人格として芸術士の存在の必要性。立場の違い。芸術士に加えて、レッジョのようにペタゴジスタの存在がとても大切だとこのシンポジウムで確信した。
- ・子どもがのびのびとアートをできるのは本当に機会がなく、そういう経験は何よりも大切なものだと思っているのでこの活動が少しでも広がればいいと思います。あと自分も関わりたいので、そういう場が多い方が関わりやすいから…という理由もありますが…

「思った」理由

- ・園で同じようなことをやろうと思っても、保育士のかかえる仕事が多くできないので、あたらしい視点をもつ芸術士の方に活動してもらえたら、もっと子どもをとりまく環境が良くなるのではないかと思います。
- ・現場の保育士と、芸術士との差異がそれほど大きく感じられなかった。立場による発想の違いくらい程度だと思った。レジヨからの始まりであれば、レジヨは活動それぞれに哲学がある。そこを日本なりの、高松なり（その地域なり）の哲学が少しずつ整えていく必要があると感じた。日本ではアーティストと子どもの距離感を近いものにするにはどうすれば良いと思いますか？武蔵美大の三澤先生の言うとおりの、就学前の柔軟性高い幼児教育に、アート、芸術の機会が少なすぎます。日本の国自体アートの概念の土台があまりない中、アーティストとよばれる方の意識に子どもと関わる機会をもっと多くもてる機会がほしいと感じます。
- ・ストレスによる心の問題、うつ、引きこもり、暴力、きれる等、自分を感じたり自由な表現をする体験や経験の為、アートの力が必要と感じている。
- ・子ども教育施設を持っているがそこでの活動方法に十分合致するものだと感じた。
- ・こどもの発想を手助け、サポートすることは、とても大切なことだと思います。
- ・日常とはちがう角度での体験をすることで得られる、新たな発想や刺激が、子どもの成長には大切。
- ・アーティストが仕事として力を発揮する場所として学校・保育所があってもいいのかなと思います。また子どもとともにあることのアーティストにとっても効果も期待できる。子どもにとってはいろんな大人にふれるよい機会かと思っています。
- ・教育に関わっている立場ではありませんが、人とのつながりや理解し合うことに、とても良いツールなのだと思います。
- ・保育や教育の現場で、もっと多くの人と関われる環境が子ども達には必要だと感じるのです。関わることで、違いや共有を体験していけると思う。
- ・違う人が入る事で子どもの様子が変わるという話を聞いた為。
- ・食えない芸術家の雇用になればいい。しかし、教育免許の無い人が芸術士として勤務するのはキケンだと思う。一人親家庭が増えたりしているこのごろ、デリケートな子どもが多くなっているのです。子どもの発達段階についてわからない人が、その場へ入っていくのはキケンと思う。芸術士を松戸市内に学童保育へ派遣してあげてほしい。公費をそこへ使っても良いのでは？
- ・園単位での取り組み（園の特色）として表現活動に力を入れているところはあるが、自治体としての事業があればより多くの子どもたちに良いものを知り感じる機会が増えるのでは、と考えるため。

「どちらとも言えない」理由

- ・芸術士の活動内容のねらいをはっきりとは理解できなかったのでも…。ねらいを明確にすることで、多くの職員の理解を得られることにつながり、一体となって取り組めると思いました。自分の理解不足なので、またお話をうかがえたら、と思います。
- ・芸術士が思っている目的（例：えのぐにふれ、自由に感触をたのしむ等）を明確にしてから現場へ

入ったほうが良いと思う。“ただやる”っていうように思えた。クラスをもつ身として、それも良いのかもしれないが、援助の仕方がわからない。“芸術士にふれる”が良いのか“やりたいようにさせる”が良いのか、よくわからなかった。

- ・保育士の意識を変えるきっかけになるかもしれないと思ったが、少し抵抗を感じる。
- ・芸術士の働きと質の向上が必要と感じた。シンポジウムの進行が難しいと思った。
- ・今回のシンポジウムでは本質的な核となるコトが伝わってこなかった。もったいないと思います。
- ・芸術士を派遣して子どもと活動するだけでは、子どもの豊かな表現力は育たないかな？と思っています。しかし、芸術士の取り組みのチャレンジは賛成です！！しかし、芸術士の方々のアート活動をむしろ保障、支援していくシステムをつくっていくことが優先かなと思いました。（アーティストを支援すること）←行政ががんばってほしいです！

②「芸術士と語ろう」参加された先生方からのご意見とご感想

*全美協メール等で公表された先生方のご意見、ご感想を、原文のまま掲載させていただきました。

■やはり、芸術士と保育者の二人三脚という点では完全なレジャオアプローチではなく、地域交流参加型の保育活動（高松スタイルのアートプロジェクト）という印象を受けました。

私もレジャオには行ったことがありませんが、子どもの主体的な興味関心から始まるテーマ探求型の自由保育というスタイルとは少し異なると思います。

しかしながら、作家が保育所・幼稚園で実践を行うということでは、大変意義があります。アトリエにこもって自分の世界観にどっぷりと浸かっている作家と違って、子どもの世界観との作家自身の世界とのシンクロが新しいアートの在り方を模索するきっかけになると思いますし、作家の社会貢献活動という位置づけも重要であると思います。

また、保育者にとりましても、園内外研修の必要性があると認めつつも、時間的な制約があって参加が難しいという現状や養成校との連携が十分にできないといった状況があることから、卒後の学び・キャリア発達という点で、作家との関わりは大変意義があります（ですが、午後からのスライドで、保育者と芸術士との視点の違いを示されていましたが、個々の見方感じ方の違いなのか、職務の違いから生じる見方の違いなのかという点は少し疑問が残ります。こういう点がもう少し整理されると良いのかなと）。

この間の様々な制度改革を受けて幾度となく変化を求められてきた保育現場ですが、人手不足という深刻な状況は依然として改善されていません。保育士の量の拡充について、地域交流の成果として、市民の保育参加という部分をNPO法人がコーディネートするという、一つの新しい連携のスタイルを感じることができました。こうした取り組みを地方自治体がもう少し評価し拡大できるように、橋渡しをすることが研究者に求められていると思いました。

桜花学園大学 保育学部保育学科

浅野 卓司

■白梅学園短期大学保育科の花原（はなばら）です。

私は現在、保育者（保育士・幼稚園教諭）養成校の教員で、「保育内容 表現」「図画工作」「実習指導」等の科目を担当し、主に『子ども（乳幼児）の遊びと造形表現』について教育・研究をしています。9月23日（火）の第1回幼児造形フォーラムに参加をさせて頂きました。

数名の先生方からの感想を読ませて頂き、タイミングが遅れてしまいましたが、簡単な感想メモを記したいと思いましたが、申し訳ありませんが、この場をお借りして書かせていただきます。

芸術士の方々が試行錯誤しながら熱心に取り組んでおられる様子が、ある程度は理解ができました。私自身が、高松市の保育現場での芸術士の方々の取り組みを実際に見学してみることが必要だなと思いました。

保育所保育指針・幼稚園教育要領で「環境を通しての保育」が特に重要視されていますが、その視点からすると、子どもの表現をより豊かにしていくためには、「人的環境」においては、保育者、保護者、地域の方、芸術士が連携協力していくことがポイントになってくるのではないかと思います。「物的環境」においては、保育者と芸術士の方々からの新たなモノ（素材）のアイデア提供がポイントになってくるのではないかと思います。

人的環境の視点から考えると、おそらく多くの現場の保育者たちが、「芸術士がいる園はいいですね。私の園では芸術士がいないので、子どもの造形表現が豊かにならないので難しいのです～」と考えてしまいがちなのです。

・しかし、そのような発想ではなく、モノ（素材）の環境設定をする努力、試行錯誤をしていくことで、子どもはモノと関わり、対話をしながら、自分なりの表現をしていくという発想をだいにすればいいかなと思っています。

・当日、会場の参加者から「導入はどうするんですか・・・？」という素朴な質問がありましたが、保育者が子どもに一方的に注入をしていくような保育ではなく、環境を設定しながら応答的に実践していくいわゆる環境設定型の保育（私が勝手に命名）への発想転換をしていくことが、21世紀型の保育ではないのでしょうか。

・しかし、これは単純にモノ（素材）をそろえておけばいいのではなくて、「日常の子どもの興味関心」を常に把握、理解をしながら環境設定をしていくことが必要になってきます。

・そのためにドキュメンテーションが必要になってくるのです。このドキュメンテーションは、単なる記録ではないことは、共通に理解をしておくといいかと思います。

・これらの前提にあるもっとも基本的な考え方としては、レジャージョ・アプローチの基本思想の中に示されていることと重なると思うのですが、子どもを一人の「善き市民」として理解していくことです。

・以上のような保育観をベースに保育を実践している現場（アートを通してだけでなく）が、最近日本には徐々に少しずつではありますが、増えていっている感触が私にはあります。

・それらの園は、あくまでレジャージョアプローチがきっかけとなったり、勇気づけられたり、協同的学びを重視し、たまたまレジャージョアプローチの保育観と似たような実践をしていて、その園独自の保育実践を展開しています。

・それらの園が紹介されている参考文献としては、『子ども主体の協同的な学びが生まれる保育』大豆生田（おおまめうだ）啓文（Gakken）があります。お勧めの本です。以上、雑ばくな感想を述べさせて頂きました。

白梅学園短期大学 保育科
花原幹夫

■まず、午前中の「色を感じる」高松市芸術士による松戸の保育士、学生のための公園ワークショップ。観覧者限定のところ参加させていただき幸運でした。

芸術士の方々はいつもと違う年齢の生徒たちと多くの観覧者に、ご苦労されたことと思います。普段と違う学生たちや大人に接する戸惑いのようなものを感じました。

午後のシンポジウム『芸術士が見たレッジョ・エミリア～松戸で芸術士派遣事業を考える～』は、レッジョの教育に関心をもっていたので、期待して参加しました。

というのは、私は2004年に現在の学科の幼児教育に携わるようになり、2007年にレッジョ・エミリアを訪問しました。以前、ローマの美術学校に在籍したことがあったので、気楽にアポイントなしの訪問でした。一般的などころしか見学出来ませんでした。レッジョチルドレンのセンターとレミダというリサイクルセンターを見学しました。当時、センターは一部しか開いていなくて、子どもの絵の展示とドキュメントの資料室のみでした。事務室で子どもたちの描いた絵や資料のビデオを購入してきました。町が子育て支援に大変力を入れていたのが印象的でした。今回、完成したセンターの様子を見ることが出来て良かったです。

そこで、今回の日本における実践活動ですが、少しレッジョの実践とは違いを感じました。芸術士の個性を生かして実践するのも大切ですが、より普遍的なとか一般的なワークシート等の作成等につながってゆくことが必要なのではないかと思います。また、レッジョは科学的な目をはぐくむ視点、側面があると思います。しかし、高松市の事業は新しい造形教育のスタイルではないかと思います。今後、このような試みが成果を挙げて広がって欲しいと思いますし、関心を持ってゆきたいと思っています。有り難うございました。

東海大学短期大学部
坂本雅子

■昨日の「芸術士と語ろう」に参加させて頂いた、群馬県のSです。

貴重な時間を作って頂き、ありがとうございました。

アートパークのスライドを見ていて気付いたのですが、以前webでみつけて、面白いことをやっているところだな、と「せいとくアートランダム」を時々チェックしていたのでした。同じ大学だったと気付いて我ながら抜けているなと思いましたが、うれしかったです。

昨日はとても楽しく過ごさせて頂きました。

以下は僭越ながら感想なのですが、長文ですのでお時間のあるときにでも、気が向きましたら、お読みいただければと思います。

午前中のワークショップについてです。

真ん中の3本の木を中心にして、素材がたくさんある場所（同時に開始時に最も観覧者がいた場所）は、芸術士の伊藤先生が主にいらっしゃいました。参加者に素材を提案したり、面白いことをして、観覧者に見られることで充実感を味わえる、好奇心旺盛、サービス精神がある参加者があつまり、非日常の舞台空間を作っていました。

あの伊藤先生のパワーはすごかったです。

特に目立っていた学生の高橋さんは、おそらくみんなを楽しませることもかなり念頭においていらして、色んな人を楽しそうに巻き込んだり、全体に活動を広げるように会場を走ったりしていました。自分が楽しいからというスタンスでみせるところが、素敵なお方でしたね。芸術士の方の立ち位置とかなり近い感じがしました。

反対側では阿部先生がハンガーを持った学生さんと静かに対話していらっしゃいました。学生さんは、初めは自信なさそうに（失礼）ハンガーを持っていたのが、阿部先生と対話するうちに自信を持って作っていたのが面白かったです。

近くで聞いてみると（立ち聞きまた失礼ですね）、普通に日常の話をされていて、伊藤先生とは逆の、いつもの日常・自分と地続きのままに静かに過ごすほうが安心して解放される方なのかな、と感じました。普通にしているようで、いつのまにか人に見せたいようなものができあがっているのは、阿部先生の引き出し方のマジックだと思います。

少し高い場所では、植え込みに守られてあまり人目に触れない場所ができていて、そこは少人数で集中したい人の実験室となっていました。両先生とも、そちらには触れず、そこもいい時間が流れていました。

芸術士の活動は、一度のワークショップではなく、日常とともにあるものなので、無理なく芸術士が自分としてあることが一番良い感じを生むのかと思いました。

そういう参加者の心の解放、動きを考えたとき、シンポジウムで心理学の先生からの見方も聞けたら面白いと思いました。

聖徳大学では、心理学の分野も充実しているようでしたので、可能でしたら、ぜひ次の機会で実現していただけたらうれしいです。

シンポジウムでは、コメンテーターの方のお話しを、なまの言葉で聞けて興味深かったです。保育士の方が、導入について質問されていましたが、そのことが心に残り、少し考えてみました。

「制作」や「授業」では導入は大切なものです。しかし、芸術士の活動の面白さというのは、解放のためのイベントではなく、子供を芸術の表現者であるという視点でみるということではないでしょうか。一番面白いのは、今日の芸術は、あり方が多様化しているため、様々な視点から真剣に（手加減なしに）、子供と同じ目線で評価できるということだと思います。細密描写も、抽象も、パフォーマンスも、ハプニングも、インスタレーションも、知識を描いてしめすということも、計画書を見せて行為を想像するというのも、その時間を感じて共有するというのも、刺繍も、泥の道を作ることも、すべて包括しているのですから。そのあたりを先生とも共有できるようになるといいなあと思いました。

（群馬県 造形教室講師）

(c) まとめ

シンポジウムでは、様々な立場からの発言があり、一面的な結論を出すことはできない。まず、第2回「子どものアート研究会」の企画段階から実施に至るまでの報告を行う。次に、シンポジウム参加者に対して実施したアンケート結果の分析や、その後メール等でいただいたご意見、ご感想からワークショップとシンポジウムの振り返りを行いたい。

(i) 「芸術士と語ろう」の企画について

第2回「子どものアート研究会」を企画するに当たり、第1回「子どものアート研究会」実施後の話し合いから、2つの方針が決まっていた。1つは、次回研究会も、参加者が体験的に学べるようなワークショップ形式を取り入れる。2つ目は、テーマは大学教員と参加者双方の提案から選定する。そこで、「高松市の芸術士を講師として招く」という計画が挙げられた。造形美術教育のみならず、全国的にも注目されている事業である。松戸市の保育者も以前より注目していた内容であった。早速、高松市芸術士のマネージャー太田絵美子さんに打診したところ、快く承諾して頂けた。また、芸術士派遣事業はイタリアのレッジョ・エミリアとの関連で考えて行く必要があるが、芸術士たちが、この年の5月にレッジョ・エミリア市を訪問していたことが分かり、多くの人が興味のあるテーマであると考え、芸術士の活動説明と、レッジョ・エミリアの見学をテーマにすることにした。講師として、太田絵美子芸術士マネージャー、東京在住の伊藤修子元芸術士、阿部麻海元芸術士を招き、ワークショップとシンポジウムの実施を決めた。ワークショップは、「色を感じる」をテーマとして、芸術士が日常的に子どもたちに実施しているような内容を行うことにした。シンポジウムは、「芸術士が見たレッジョ・エミリア～松戸市で芸術士派遣事業を考える～」が企画され、コメンテーターとして三澤一実教授（武蔵野美術大学）、榊瑞希子教授（聖徳大学大学院 教職研究科）、庄司渉氏（松戸まちづくり会議「暮らしの芸術都市」）、臼井薫（松戸市 文化観光課）をお願いし、できるだけ幅広い意見が聞けるよう計画した。

また、芸術士3人の宿泊場所として、アート・イン・レジデンスの事業を行っている PARADISE AIR との連携で、実施できることになった。PARADISE AIR は、「一宿一芸」を掲げた芸術家滞在施設で、旧宿場町である松戸駅前が芸術家の行き交う拠点とするような展開を進めている事業である。その関連もあり、シンポジウムの翌日、松戸市の保育所である KEYAKIDS の子どもたちにワークショップ「どうぶつ作り」のワークショップも実施することになった。

シンポジウムに於いては、全国大学造形美術教育教員養成協議会（略して全美協）との共催も実現でき、コメンテーターや、広報、資金面での協力を得ることができた。全美協は全国的な組織であり反響も大きく、多くの先生方からワークショップ観覧やシンポジウムへの参加申し込みがあり、当日も、朝早くからいろいろな地域の先生方にお集まりいただいたことは嬉しいことであり、全美協との共催が要因であったと感謝している。

このように、第2回「子どものアート研究会」は、高松市芸術士、全美協、PARADISE AIR など、多くの団体との協働で実施できたことはCOCの事業としても、有意義な出来事であった。

(ii) シンポジウムアンケート結果の分析と振り返り

ワークショップ「色を感じる」のまとめ、シンポジウムのアンケートや、その後先生方から寄せられた、ご意見ご感想から考えて行く。

シンポジウムは大盛況で、約70名の参加者があり、芸術士派遣事業やレッジョ・エミリアに関する関心の高さがうかがわれた。アンケートでは、参加者は松戸市以外から78%と、多くなっているのは全美協との共催が大きかったと言える。所属も、保育士、小学校教諭で33%、大学教員が27%、大学生、大学院生が11%と、教育関係者が多かった。シンポジウムの内容に関しては66%の方が「大変満足」「満足」と回答している。高松市のような芸術士派遣事業の必要性に関しては、「大変思った」「思った」で78%と高くなっている。もともと、芸術士やレッジョ・エミリアに関心が高かった方たちが参加したことを考慮しても、シンポジウムにおいて芸術士派遣事業に対する一定の評価が得られたのではないだろうか考える。ただ、その理由に関しては、いろいろな意見に分かれている。

- ・保育者が忙しいので、芸術に関する部分を担当してほしい。
- ・多様な視点で、子どもたちを保育することが大切だから。
- ・芸術の専門家に担当してもらい、より質の高い活動を期待するため。
- ・教育現場には、アートの力が必要。
- ・アーティストの活躍の場の広がりとして教育現場がある。
- ・アーティストの雇用対策として

など、様々なご意見が出された。この、どれもが芸術士派遣事業に期待される内容であると考え。また、質疑応答で出されたワークショップでの導入の無いやり方に対する質問。芸術士だけが、子どもに表現を教えることができ、保育者はできないのか？芸術士と保育者の写真の撮り方の違いといった芸術士と保育者の資質に関する疑問等の意見が出された。どれも、日常的に保育をする保育者と芸術士の役割についての疑問であり、保育や芸術教育にかかわる様々な立場からの話し合いの必要性や、共通理解の大切さを改めて感じた。日常の保育の造形活動について見直す良い機会となったと考えている。様々なご意見に対して、ここで早急な結論を出すよりも、むしろ、時間をかけたテーマとして互いに話し合いを深めることが大切であると考え。

また、実施後は、全美協のメーリングリスト等で、今回の企画に対する先生方の専門性を生かした貴重なご教示、ご助言を頂き、感謝申し上げるとともに、このような企画をテーマに、活発な意見交換ができたことは、これからの教員間の連携や交流の在り方を示したと考えている。

また、ここでの課題は、第3回「子どものアート研究会」につながっていくことになった。

(3)「動物づくり」地域保育所におけるワークショップ

芸術士のこれまでの活動は、子どもが想像したお化けに扮したり、米袋で服の様なものを制作したり、という実践を行ってきた。今回は、好きな動物、空想の動物など、こどもの自由な発想で制作し、完成品を身につけて、最後にダンスしたり演じたりして遊ぶ活動を計画した。

日時：9月24日（水）10時45分～12時頃

コーディネーター 北沢昌代（聖徳大学短期大学部専任講師）

講師 太田絵美子（高松市芸術士・NPO法人アーキペラゴ）

阿部麻海 伊藤修子（元高松市芸術士）

観覧者 石川康代 高木優里 大和田友紀美

大成哲雄 斎藤彩

対象 KEYAKIDSの保育園児（15名）

会場 KEYAKIDS（学童保育室）

主催 聖徳大学短期大学部COC事業

松戸まちづくり会議（PARADISE AIR）

(a) ワークショップ活動報告

【準備段階】

子どもたちが来る前に、環境構成を整える。

子どもに活動に対する緊張感を与えないために、空間に紐を張り、新聞紙や前日の活動でできた、色紙等をつるした。



材料コーナーを作った。子どもの動線を考え、場所を設置した。いろいろな素材を整理して、子どもたちが使用する素材や描画材料、道具類を並べた。



【材料類】

クレヨン、ポスカ、色画用紙、シール、スズランテープ、毛糸、モール、セロファン、ボンド、セロファンテープ、ガムテープ、ビニールテープ、紙皿、紙コップ、カラーゴミ袋、綿、クラフト紙、ダンボール箱、新聞紙、コーヒーフィルター、その他（今回の活動では、絵具は使用しないことにした）



初めて会う芸術士に対して、子どもたちが緊張感を持たないようにと、芸術士自身の姿も工夫していた。このようにすると、初めての子どもたちでも、すぐに心を開いて一緒に活動することが可能になるということであった。芸術士も環境構成の一部と言えることが分かる。

【活動】

子どもたちがやってきて、芸術士の自己紹介。



面白い格好をした芸術士たちに、子どもたちは興味津々。「好きな動物になろう」という呼びかけであったが、豊富な素材を前にした子どもたちは「好きなこととして好いですよ！」の言葉の方が、印象に残ったようであった。

話しが終わると、すぐに材料置き場に来て、好きな材料を探し、持って行く。



ポスカを使って綿をピンクにしたい様子。一生懸命、色を付けていたが、同じ位、手もピンクに。本人は、満足そう！



紙皿が気に入った様子。紙皿を使って顔を作っている。毛糸、シールなどの素材を上手に使っている。

伊藤芸術士に刺激され、子どもたちも変身！





紙粘土やシールを顔に張り付けて、満足そう！見学をしていた保育士に見せに来て「かっこいいね！」と認めてもらえると、安心して戻り、続きの活動をしていた。

座ったままでの変身？何をイメージしているのか？
体にガムテープや新聞紙を巻き付けていた。



太田芸術士は、子どもの話を聞き出している。

女の子は、綿などやわらかいもの、ピンクなどの明度の高い暖色系が好きな子どもが多い。





阿部芸術士のもとには、じっくりと活動を楽しみたい子どもが集まっていた。

子どもたちの活動には、全身を使ったものと、小さなものに拘って作るような活動があった。また、1人の子どもの活動であっても、次々に活動が変化していく子どもが多いことが分かった。





活動も終わりに近づくと、音楽をかけ、子どもたちの気持ちを盛り上げていた。「アナと雪の女王」の曲がかかると、お城を作ろうということになり、ダンボールを積み上げ、お城に見立てた立体を作っていた。これまでに作ったものを装飾に使い、この活動のクライマックスになった。



盛り上がったところで時間になり、活動は終了した



(b) 振り返り

テーマは「動物づくり」であったが、豊富な材料から、自分がイメージしたものを作る活動になっていた。芸術士は、子どものやりたいことに合わせ、特にテーマに拘ってはいなかった。子どもたちは自分の作りたいものを試行錯誤しながら表現していた。このワークショップでの子どもたちの活動タイプは、大きく2通りであったことが分かった。1つ目のタイプは、最後までずっと同じ活動を追及する子どもである。始めにイメージしていたことを、じっくりと展開していた。2つ目のタイプは、活動がどんどん変化していく子どもである。始めは紙皿に平面的で細かな表現に没頭していた子どもが、ある時ふと、別の活動に移って行く。多くの子どもが、自分の活動をどんどん変化させていたが、女兒の中には、始めにイメージしたドレスのイメージを、最後までじっくりと表現し、楽しんでいた。



左上の写真の男児は、紙粘土を使って、始めは鼻を作ったり、顔に張り付けて遊んでいたが、最後には、魚になっていた。

右上の写真の女兒たちは、始めからピンクのビニール袋が気に入り、それでドレスを作ることに没頭し活動を続けていた。出来上がった後も、そのドレスを着て楽しんでいた。

また、子どものタイプによって、一緒に活動する芸術士を選択しているように見受けられた。じっくりと活動したい子どもたちは、阿部芸術士のそばで活動していた。阿部芸術士の柔らかな姿勢と、落ち着いた雰囲気子どもに安心感をあたえ、自分の活動を保証されているように感じたのだと考えた。

また、気持ちを盛り上げたり、全身を使って活動したいタイプの子供たちは、伊藤芸術士とともに活動し、顔などにシールを張り付けたりして、変身を楽しんでいた。

太田芸術士は、自分の表現に自信を持っていないような子どものサポートを行っていた。手をつないで一緒に活動したり、子どもの話を聞くことに専念していた。このように、芸術士（多くの美術教育の指導者）には、様々な個性があり、子どもたちも指導者に応じて活動が変化するのだと、改めて感じた。

(c) 意見交換会

ワークショップ終了後、意見交換会を行った。

参加者：太田絵美子（高松市芸術士・NPO法人アーキペラゴ）

阿部麻海 伊藤修子（元高松市芸術士）

石川康代（きぼうのたから園長）

高木優里（KEYAKIDS園長）

大和田友紀美（KEYASKIDS保育士）

大成哲夫(聖徳大学児童学部准教授)
北沢昌代(聖徳大学短期大学部専任講師)
齋藤彩(聖徳大学美術研究室副手)
森 純平(PARADAIS AIR 事務局)

見学をしていた保育者から芸術士の活動における道具類の扱いについて質問があった。通常、保育者が造形活動をさせる場合、保育の一環として道具類の扱いについても指導を行う。たとえば、ポスカの使い方は、使ったらキャップを閉めるよう指導する。芸術士は、そのままにしていた。それは、何故か？といった疑問に対して、以下のような意見が出された。

・ポスカの扱い方を指導するのは、保育者の役割かも知れないが、芸術士は、子どもの表現を優先させたい。ポスカの扱い方より、今の子どもの気持ちを大切にしたい。

また、このようなやり方については、芸術士の個性によるのではないか？芸術士によっては、ポスカのキャップを閉めるよう指導する芸術士もいるのではないか？

・保育園や幼稚園の中で、芸術士がのびのびとした活動が保障されるのは、日常の子どもの保育を担当する保育者がいるからこそである。そのうえで、芸術士が保育の場に、異質な存在として園に行くことは子どもたちの発想や活動を刺激することになる。

4. 第3回子どものアート研究会

公開研究会「つくりたいものつくろう！」

平成26年度地（知）の拠点整備事業地域志向教育研究
「松戸市における保育の表現指導の実践的研究」

この企画は、9月に実施した第2回子どものアート研究会「芸術士と語ろう～子どもたちの創造性を育む文化芸術の役割について～」に続く、第3回子どものアート研究会である。松戸市の地域活動や教育を保育者や学生、市民とともに考え、明日を担う子どもたちの「生きる力」を育むような造形活動を主体とした保育の在り方を公開研究保育として実施し提案する。今回は「つくりたいものつくろう！」をテーマとして、活動の過程が学びとなる保育活動の提案（*6）とドキュメンテーション（*7）を示し、参加保育者、学生、市民とともに、子どもの体験や学びについて考え合うものである。

開催日時：平成27年1月31日（土）10時～12時15分

実施者：石川康代（保育園きぼうのたから園長）

生沼有香（保育園きぼうのたから保育士）

高木優里（KEYAKIDS園長）

大和田友紀美（KEYAKIDS保育士）

参加幼児：23名（保育園きぼうのたから年長クラス園児14名

KEYAKIDS年中、年長児9名）

観覧者：71名（保育者21名、保護者22名、学生14名、教員9名、その他4名（地域住民、行政関係、教育関係）

指導助言：北沢昌代（聖徳大学短期大学部保育科講師）

大成哲雄（聖徳大学児童学部准教授）

会場：聖徳大学7号館 7232教室（控え室：7233教室）

主催：聖徳大学短期大学部保育科

協力：松戸市

プログラム：9:30 受付

10:00 挨拶

10:05 公開研究会

11:00 終了

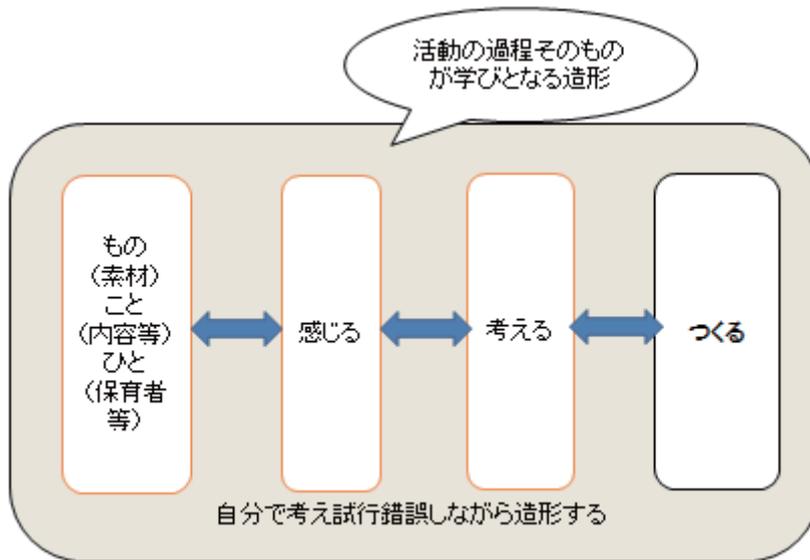
11:15 振り返り（ドキュメントの報告）、口頭発表、質疑応答

12:15 終了

【参考】

*6 活動の過程が学びとなる造形とは

ものやこと、人などとの出会いから感じたことをもとに考え、つくる過程で試行錯誤しながら学び取することを重視した造形活動のこと。



*7 ドキュメンテーションとは

一般的に活動の中で、子どもの表現や学び、言葉を記録し、画像や映像を主としてその状況を視覚的にまとめることである。たとえば、活動の過程にどのような学びがあったかを保護者や社会に説明することは、指導者（保育者）の重要な役割であり、ドキュメンテーションのとり方は、指導者の子ども理解とも深く関連することになる。また、ドキュメンテーションは、保育者自身の振り返りとしても重要な記録となる。自分の指導について振り返ったり、子どもたちの活動について確認するなど研究に生かすこともできる。子どもの学びは、子どもの作品とドキュメンテーションで読み取ることが重要。

【本研究会でのドキュメンテーションの提案について】

今回のドキュメンテーションは、4人の保育者が分担して実施することにした。研究保育実施者の石川と高木が、保育の日常的なドキュメンテーションとして、子どもたちの活動全体を記録し、その中から1つを口頭発表時に参加者に対して示す。また、クラス担任である生沼と大和田は、それぞれクラスの子どもから1名を抽出し（日常の様子から、観察対象としたい子どもを選出しておく）、ドキュメンテーションを撮ることにした。個人のドキュメンテーションについては、時間の関係で今回の発表は行わないが、次回「子どものアート研究会」に於いて研究テーマにする。

【指導案】

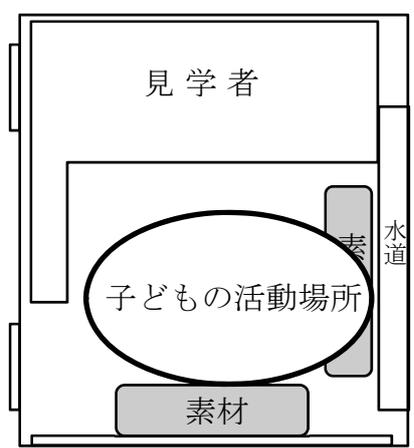
第3回「子どものアート研究会」

公開研究保育「つくりたいものつくろう！」指導案

実施日 27年1月31日(土)	対象児 保育園きぼうのたから 5歳児 14名	場所 聖徳大学
時間 10:00~11:00	KEYAKIDS 5歳児 9名	7232 教室
実施者：石川 康代 サブ：高木優里 ドキュメンテーション：生沼有香、大和田友紀美		
<p>題材について</p> <p>子どもの「つくりたい！」という気持ちは、どこからやってくるのだろうか？</p> <p>イメージが先あって素材を選び、作り始める子。素材からイメージして、作りたい気持ちが湧いてくる子。友達の関わりの中でイメージが生まれる子。どれも子どもたちの心の内面から起こる自己表現の欲求を満たしたいのだろう。幼児期では、心ゆくまで自分の世界に浸り、夢中になって造形する経験等を通して、子どもの心身は育つと考えている。ものを介して何を表現したいかを自分で決めて、自分の手で作り出していくことは、子どもたちの「生きる力」を育てることにつながる。</p> <p>このような自己表現の欲求や創造性に応えるには、保育士が、その活動のねらいにふさわしい素材選びや環境構成を工夫し、配慮することが重要である。保育士の声掛けや、素材、道具の置き方等の環境構成のあり方次第で子どもたちの活動は変化する。</p> <p>そこで、本題材では、廃材(空き箱、芯類、毛糸等)から、つくるものをイメージすることを楽しみ、つくりたいものをつくりあげることが喜びをねらいとして活動する。空き箱などの廃材は大量にあり、様々な形や種類があるため、子どもたちの発想や想像を刺激し、また、幼児にも扱いやすく安全な素材であり、大量にあるため試行錯誤しながら思い切り活動することができる。それらの素材や道具類を「つかうものコーナー」に置き、子どもたちが選択して制作できるような環境構成を工夫する。</p> <p>また、保育士は、子どもたちの主体的な活動から、表現力だけでなく、問題解決や互いに関わり合うことなど様々な力を育むことができるよう、発達に応じて見守り、考えさせる姿勢を大切にす。たとえば、のりを使っての接着がうまくいかない場合、どのようなもので接着出来るかを子ども同士が協力し合って考えられるような声掛けを行ったり、子どもが絵具をこぼしてしまった場合、すぐに保育士に頼るのではなく、自分たちでどのように解決するかを考えるよう促したりする。今回は、いつもとは違った場所での活動となるため、そのような環境の違いも、子どもたちの期待感を増すことができるよう働きかけたり、いつもとは違った仲間との交流を楽しみにできるような指導も行いたい。このような活動から、造形表現を中心としながらも、絶えず他領域と関連しながら子どもたちの総合的な力を育み「生きる力」が養えるような保育を目指したい。</p> <p>以上のような活動そのものを主題とする題材では、ドキュメンテーションの役割が重要となる。ドキュメンテーションとは、子どもの学びを画像や映像等で記録し、視覚的にまとめて保護者や社会に対して伝えることである。作品とともに子どもの発言や学びの過程を読み取る事は、保育士の子ども理解とも深く関連する。本題材では、活動を主題とする題材とドキュメンテーションの提案を行うため、保育後に、保育士が撮ったドキュメンテーションの報告も行う計画である。</p>		
<p>活動のねらい</p> <p>大きさ・形・色・感触が異なる廃材から、つくるものをイメージすることを楽しみ、つくりたいものをつくりあげることが喜びをねらいとして活動する。</p>	<p>評価の観点</p> <p>造形活動を通して、感じたことや考える経験を行い、イメージを持って表現することを楽しめていたか。</p>	

準備 空き箱 はさみ ボンド 両面テープ ガムテープ すずらんテープ 毛糸 シール ポスカ
 絵具 インク版 筆 水入れ ぼろ布 色画用紙 等

時間	予想される子どもの姿	保育士の留意点と環境構成
----	------------	--------------

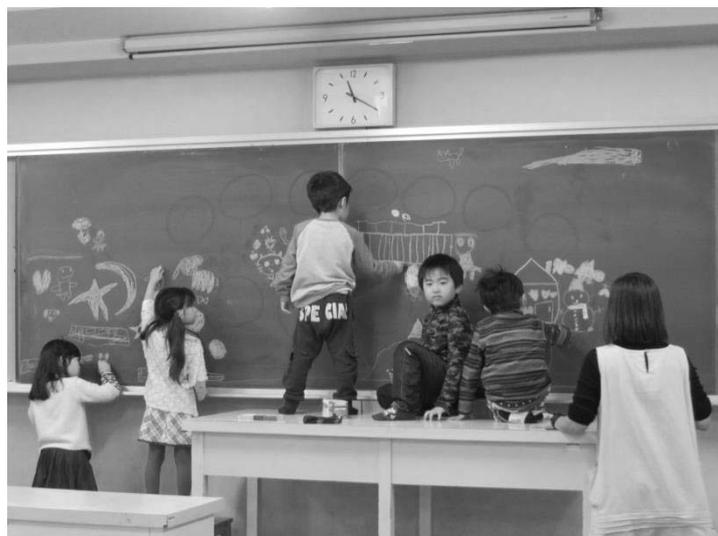
10:00	○集合する ・子どもたちは活動場所に集まる ＊観覧者に向けて挨拶 ＊実施者の自己紹介 ・保育士の話聞く いつもと違う場所(大学)できぼうのたからと KEYAKIDS が合同で活動することを楽しみにし、喜ぶ。	・いつもとは違う場所(大学)できぼうのたからと KEYAKIDS が合同で活動することを伝える 
10:05	・沢山の空き箱や素材、道具に感激し、はしゃぐ。 ○活動を開始する ・素材を選ぶ。 ・素材を2～3個取る子がいる。 ・子ども同士が同じ素材を選び、誰が使うかを自分たちで決める。 ・一人で黙々と始める子、何人かで始める子がいる。 ・道具の使い方を考え、教え合う。 ・意見を出し合い、選んだ素材を認め合いながら自分たちの世界を広げている。 ・時々、保育士に見せて作品について説明をする。 ・目打ちを保育士と一緒に使う。 ・2～3人で始めた子、途中でメンバーが増え一緒に活動している。 ・自分たちでつくり上げたもので遊びながら、つくり続けている。	・石川、高木は、指導とともに保育全体のドキュメンテーションを行う。 ・大和田と生沼は個人のドキュメンテーションを担当するので、透明人間であることを伝え話しかけられないことを知らせる。 ・目打ちを使いたい時や相談がある時は、保育士(石川、高木)に声を掛けるよう伝える。 ・はさみとボンドは、箱に入れ扱うよう伝える。 ・子どもの活動が活発で安全に行えるよう、臨機応変に環境を整える。 ・子どもたち同士の関わりや会話を大切に、主体的な活動が行われるよう配慮する。 ・制作途中の作品や考えたことについて、共感したり励ましたりする。 ・できた作品は、台の上に置く。 ・終わりの時間があることを伝え、作品を見せ合い楽しい時間であったことを共感し合い、終わりにする。
10:50	・不要なものを片付け、つくったもので遊ぶ。	
10:55	○片付ける ○作品を見せ合い、話をする。	
11:00	・作品以外の物を片付け、保育士の話聞く。 ・退室する。	

(a) 活動報告

環境構成

今回の研究保育は、環境構成についても、提案を行っている。いつもと違う大学の教室を、どのような保育環境に整えるか話し合い、教室配置の工夫と、保育室の楽しい雰囲気を作るようにした。

教室の大きな黒板には、子どもたちがチョークで題材名と描きたい絵を書いた。前日の準備日は、大雪であったが、子どもたちは元気にやってきて、大きな黒板に好きなものを思い切り描いて楽しんでいた。



材料についても、あらかじめ集めた中から、今回の活動にあったものを選び、置くことにした。たとえば、芯類はトイレトペーパーやポテトチップスの筒など、子どもが1人ではさみを使って容易に切れるものだけを置くことにし、活動時間や自主的な活動がしやすい素材の配慮を行った。



壁面は子どもたちの作品で装飾した。



教室前には、子どもたちの作品と保育士のドキュメンテーションを展示した。



公開研究保育 導入

当日は、保育士、保護者、学生、大学教員、地域の方々、教育関係者等が参加し、大盛況だった。挨拶のあと、早速、実践者である石川を中心として研究保育が始まった。子どもたちは、いつもと違った特別感にワクワクしている様子。





あらかじめ、テグスを使って、いくつかの素材が宙に浮くような仕掛けを作り、素材に注目させた。この導入に、子どもたちは大盛り上がり。素材の持ついろいろな形や特徴について気づくことができる導入であった。

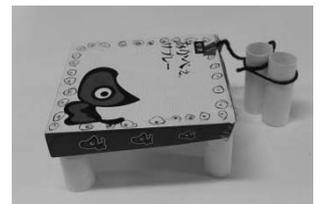


話が終わると早速、宝さがし！みんなで、好きな素材を探した。先程、宙に浮かんだ？ 素材も大人気で保育士に取ってもらっている。

制作



「つかうものコーナー」の側で、机のようなものを作っている。この子どもは、じっくり1つのものを作り上げていた。出来上がったように見えても、少しずつ改良を加え、細かく考えていた。





この2人は、初めから2人で協力して作る
こと、何を作るかも決めていた様子。早速、
材料コーナーに行って、使いたい形の箱を
集めていた。出来上がった作品は、「ぼり
す&れすきゅう」。看板の文字も、書けな
い字は友達同士で教え合っていた。（*8）



この子どもも、すでに作りたいものは決まっていた。ポテ
トチップスの筒と、トイレットペーパーの芯を探しだし、
回転するおもちゃを作っていた。回る仕組みについてよく
理解している様子。

1人で黙々と制作した後は、先生やみんなに見せて満足そう
な表情であった。

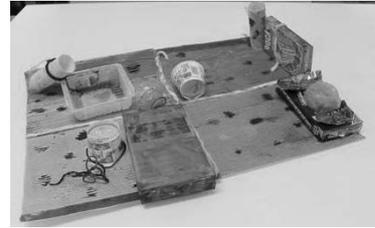


制作をする時は、1人で集中している。
造形を通して、しっかりと自分を表現できているよう
に見える。





仲良しのグループで作品を作っている。カラフルな段ボール素材が気に入った様子。その上に、絵具やポスカでいろいろな模様をつけていた。



沢山の素材がある中、この女兒はモールのみを使ってアクセサリーを作って楽しんでいた。宝石箱に、指輪やブレスレットが入っている。
(* 9)



タワーのように見えるが、実は物入れ。長い筒の部分を下すと、ふたが開く。





絵具を使うことを楽しんでいる。活動の間、ずっと絵具を使っているいろいろな素材に着色していた。



この子どもたちは、グループで役割分担がされていた。

中心になって制作をする子。その手伝いをする子。素材を探してきて報告する子。空き箱を組み合わせて、ガチャの機械を作ろうとしていた。このアイデアは、素材コーナーに、沢山のガチャのケースを見つけ、大喜びしていたことから思いついた。

鑑賞会

活動の終わりに鑑賞会を行った。時間の都合で、発表した子は数名だったが、皆、元気よく作品を見せて、拍手で褒めてもらい嬉しそうだった。





発表を聞いている子どもたちも、発表している子の側に来て、興味深げに作品を見ていた。友達の作ったものには皆、興味がある。

(b) 口頭発表

【ドキュメンテーションの報告】

実践者である石川と高木より、ドキュメンテーションの報告が行われた。

石川が注目したのは、2人の子どもの共同制作「ぼりす&れすきゅう」(*8)。子どもたちの素材の使い方や、協力の仕方についてのドキュメンテーションであった。

高木はモールを使ってアクセサリを作っている女兒(*9)に注目していた。多くの素材のある中、モールを選んで制作しているところが、子どもの個性が良く表れている。また、モールの接着の仕方など、細かいところも良く工夫されていた点を説明した。参観者は、自分の場所からは見る事ができなかつたり、気づかなかつた活動について参加者と共有し合うことができた。

【口頭発表「つくりたいものつくろう！」】

この発表は、公開研究保育「つくりたいものつくろう！」に至るまでの、石川自身の課題を解決する方策として、ドキュメンテーションを活用してPDCAのサイクル(plan do check action)で改善を行った過程を報告した。



石川自身が抱えていた課題は、保育者のみならず、造形指導を担当する指導者であれば、抱える悩みや疑問である。

小さい頃から図工が大好きで、人と同じものを作ることがいやだったと振り返っている。本学保育科を卒業後、幼稚園教諭として勤務した経験をもとに、自分の考える造形指導を行えるような造形教室を開設。その後、保育の要望が高まり、保育所を開設することになった。

開設後、子どもの人数が増えると、少人数で行っていたような造形指導がやり辛くなり、園では、次第に保育者たちが画

疑問？

☆個別指導で行っていたような活動を、保育園では行えないのか？

☆造形を通して育む子どもの力は何だろう？

☆造形活動において保育士の役割と配慮は？

活動1「厚紙でつくろう」を計画

<ねらい>

素材から発想し、工夫して作品をつくることを楽しむ。

<配慮事項>

自由な発想ができるように導入する。

ドキュメンテーション(記録)を取って、保育士や子どもの活動を振り返る。

活動1「厚紙でつくろう！」



活動2「空き箱でつくろう！」



一的な造形指導に傾き、園長として「個別指導で行っていたような、子ども一人一人が作りたいものを自由にする活動は、一斉指導ではできないのか？」といった疑問を持つようになった。

「子どものアート研究会」に参加し、そこでの学びから、自分が考える1人1人が自己表現を行えるような造形指導を一斉指導によって実施してみたいと考えた。

はじめに考えた題材は、「厚紙でつくろう」。保護者から大量に譲り受けた厚紙を使って、同じ材料から、子どもたちが自分の作りたいものを工夫して作ることをねらいとして実施した。その際、活動を振り返るためにドキュメンテーションとしてビデオを撮った。

上手くいくと思って実施したが、結果は、同じような絵画の作品が多くなってしまった。実施後のビデオを見ると、いろいろな課題が見えてきた。環境構成への配慮不足であった。紙のサイズに対して、机が小さく、子ども同士の紙が重なってしまい、画面全体を見ることができなくなっていた。また、絵具に関しても、使いやすいようにと、あらかじめ机ごとに絵皿に出しておいたが、量も少なく、同じ机の仲間との共有をさせ、量や色数などを制限していた。また、絵皿は、机の中央に置かれていた為、子どもは、すぐそばにある絵具を使っていたことが分かった。

ねらいに対して、環境構成がきちんと配慮されていなかったことに気付いた。

改善点を整理し、「空き箱でつくろう」を行った。

【改善点】

- ・材料、道具は、コーナーを設けて置き、子どもに選択させる。
- ・絵具も、ボトルで置いた。
- ・床で制作し、制作スペースを広くできるようにした。

指導方法も、子どもの自主的な活動を見守り、できるだけ子ども自身で気づかせるようにした。

その結果、活発な活動が行われ、1人1人の個性的な作品が出来上がった。また、活動の過程において、自分たちで考えたり助け合う姿を見ることができた。例えば、切り辛い厚紙を、はさみでどのように切るかを相談し合い、素材を持って手伝う子、側で励ます子など、互に協力し合う姿が見られた。また、皆が使用する絵具の蓋を開けてあげる子。絵具を

「空き箱でつくろう」の学びを活かし「つくりたいものつくろう！」を計画

<ねらい>

・大きさ・形・色・感触が異なる廃材から、つくるものをイメージすることを楽しみ、つくりたいものをつくりあげて喜びを喜ぶ。

<配慮事項>

- ・つかうものコーナーを大きさ・形・色・感触で整理して置く。
- ・いつもと違った場所の環境を活かす。
- ・イメージがより広がるように、素材の種類、量を増やす。
- ・子どもたちの意欲が高まるような導入を工夫する。

こぼしてしまっただけでどうするかを子どもなりに考え、片付ける姿等が見られた。

この活動をもとに、公開研究保育「つくりたいものつくろう！」を計画した。改善点についても、コーナーの工夫や、素材の選び方、子どもの意欲が高まるような導入の工夫などを行った。

【質疑応答】

口頭発表後の質疑応答は、以下のような内容であった。

永井先生：活動の過程で使っていた厚紙は、子どもってひとつの素材でも繰り返し使うことによってものすごくイメージが豊かになっていくと私は感じた。口頭発表での活動では厚紙も絵の具も机の上であって、無意識のうちに子どもの活動を方向付けていたような気がした。しかし、あの素材に出会ったことはとても素晴らしいことなので、繰り返し使えるように何か作る時に出したり、今日みたいな活動の時に出しておく、子どもなりに素材を色んな形で使えるようになるのかな、という感想を持った。

藤崎先生：「こういう子どもが大人になったら一体どんな風に社会が変わっていくのかしら」とすごく楽しみになった。まだ保育園なのに子ども達がハサミとかをきちんと使いこなせていたり、多種多様な素材があって、それを子ども達がいろんな考えで使っているのは、そういう指導が今までにあったのか。

石川：ハサミは危ないものだが、ある程度使い方は年少さんの年くらいに一緒に手を持ってやっている。子どもはすぐに使いこなせるようになるので、色んなものを切りながら自分で学んでいるため、特に指導的なことはほとんどしていないのが実状。たくさん素材を用意したつもりだが、子ども達は多分足りないくらい。きっとあればあるだけ子ども達はそれを自分の発想に繋げていく。

北沢：技術指導ってどういう風に教えるのがいいのか。一斉指導でする技術だけを教えて、それで技術は身に付くのか、とまっているところがある。

藤崎先生：今、割と小学校一年生から図工専科が図工を教えるという学校が増えてきている。担任の先生が教えないで図工専科が三十数人、四十人近い子ども達を教える立場になると、今日の子どものようにハサミがちゃんと使える子どもばかりではないので、そういうことがきちんと出来ている子どもがこんなにたくさんいることに私自身すごく力強さを感じた。家庭から学校教育に入っていき一番最初の入口である保育園とか幼稚園で子ども達が作りたいものを作れる、という体験はこれからの人間形成で必要なことだと思う。これからも子ども達が自分で考えて友達や先生方と切磋琢磨しながら色んなことを学んで、人として逞しく成長して欲しい。

学生① : 普段廃材とかを使って工作とかをしていない子ども達は、今日のようにすぐ「どうぞ」といった時に飛びつかないと思うが、普通の保育から自分の作りたいものを作ったりしているんだろう、と子ども達の姿を見てわかった。先生達が廃材を普段では思いつかないような導入として魅力的に取り入れることで、子ども達も廃材を使って自由に表現するという活動にすぐスムーズにいけたのではないかと思った。大人がその廃材を使うとなるとそのような機会があまりないためすごく悩んでしまうと思うが、子ども達は自分の作りたいものを表現することができるということを実感した。それは大人よりも広い視野を持っていて大きなイメージを膨らますことができるからなのだと学ぶことができた。

学生② : 最初の導入段階がとても工夫されていて、それによって子ども達が目を輝かせていてとても素晴らしいと感じた。保育士が最初に「こうやるんだよ」と例を見せることがあるが、今回はそのようなことがなく、それがより一層子ども達の制作意欲を高めていたのではないかと感じた。制作中の保育者は見守る立場でいることで子ども達は自分の考えで思い思いのものを作ることができたのではないかと思った。子ども達は様々な工夫をしていて、私自身も思いつかないようなことばかりで驚き、子ども達の姿から学んだ。終わりの時間が来た時も「まだ作りたい」という子ども達の思いを十分に受け止め、「まだ続きはできるよ」ということを子ども達に伝えることで子ども達の思いを尊重している姿がとても勉強になった。全体を見ていて、ひとりで作る子や友達と役割分担をして作っている子と様々だったが、どの子ども達も「何を作りたいのか」「そのためには何が必要なのか」を自分で考え友達と協力してイメージを共有しながら楽しんでいる姿が見られて、今回のねらいが本当に達成されていたのだと感じた。今までの学びを生かしたことでこのような素晴らしい活動を行うことができたのだと思った。

保育者① : 保育士の経験上、廃材を使って年長児の子ども達に作らせたことがあるが今回の活動を見ていて懐かしかった。造形が不得意な子どもに思わず目が向いてしまい、友達の様子を伺って友達が欲しい材料を取りに行き、いいねと言われることに喜びを感じ、友達が作っている姿を見て刺激を受けて一緒に作り始め、その中で自分の作りたいものを見つけ出し、自分で率先してやる姿が印象的で、友達や素材の影響でできるんだと改めて感じる事ができた。自分からできない子に保育士が声をかけなくても自分で感じて動くことができるんだと感じた。

永井先生 : 環境、友達環境がとても大切。子どもが何かを作りたいと思う一番最初のきっかけは既に作りたいものがある、材料を見て作りたいものが浮かぶ、友達が作っているのを見て作りたいと思う…様々ある。作ることは人との関わりの中で生まれてくるものがたくさんあり、それが保育所や幼稚園、こども園の素晴らしいところ。自分だけではなくみんなから影響されてイメージ豊かになり育っていくのではないか。「経過」のなかでドキュメントを取ることが大切。今回の活動を見ても「作る」ということ以前に「材料」に興味があって、友達と一緒に楽しんでいる姿もものすごく大切なこと。素材ひとつひとつに心を寄せて、「作る」ということの途上で素材との出会い、素材に触れる、素材と関わっているいろいろ発見するとい

う素晴らしいことがたくさんあるのかなと思う。保育者も保護者も完成したものの結果にこだわるが、その途上での人との関わり、子どもの様々な発見などに目が向けられる保育者になれるといい。

保護者①：廃材を使って子ども達のイメージーションを伸ばしていくという教育には非常に賛同するが、保護者として子どもが人格を形成していったり何かを作ったりする過程、気持ちをずっと伸ばしていきたい。だんだん大人になっていくにつれてだんだん心が固まっていくというか、ちゃんとした大人になっていくけど、できればずっと子どものような心でいてほしい。親のわがままなのかもしれないが、面白いものを作りたいというこの気持ちを育てていくポイントとかはあるのか。保育園から先もこういった関わりをずっと続けていきたい。

大成先生：私は作ることをずっと楽しんでる。その理由は自分の母親にある。自分の母は自分が作ったものを否定せず全部取っておいてくれて、それを今自分の教材として使っている。否定したりせず見守り、むしろ褒めてあげるそういう環境を上手く作ってあげるといいんじゃないかと個人の体験から思う。

北沢先生：大人になると、造形に関わるということは、ほとんどの大人はなくなってくる。子どもの頃に造形の経験をするによって自分で考えて試行錯誤しながら自分で決定して新しい発想ができる力がつく。そういった心を持ち続けている大人はいろいろな仕事に就いた時に、色々な困難に立ち向かえるのではないかと思う。

保護者②：子どもと関わるにあたってうちの娘が何かを作り出している時は、何時までという制限もすることなく、良くないかもしれないが完成するまで下手したら夜十時を過ぎちゃうまで、ご飯を食べるのも忘れるくらい夢中で作っている時もある。極力声をかけないようにし、邪魔はしないようにしている。制限をしないで集中して何かを作らせるということを心がけているが、今日作っている過程を見て、大人になると手や周りを汚してしまうことを気にしてしまうが、手で絵の具やボンドを塗っているところを見てそこを制限したらいけないんだと反省。あまり子どもを枠の中で制限させないで自主性、独創性を伸ばせるように関わっていったらと改めて思った。

野上先生：保護者の方の「子どもが創造力を持ったまま大人になってほしい」という話を聞いて、もしかして大人になっていく中で枠にはめ込んでいくことを学校教育はそもそも機能として持っているんだということ、そしてそう思われてしまっているんだということも、自分自身の教育を振り返って感じて耳が痛かった。社会全体が今主体性を持った子どもを認識するようになってきて、必ずしも世の中にとって都合の良い人を育てるのではないのがこれからの学校であると思っている。保護者の方がそうやってお子さんを、その子自身を見守っていくという目がある限り子どもはちゃんと育っていくと思っているので、これから先の子ども達と一緒に見守っていきたくて思った時間だった。

仲瀬先生：小学校で、個人面談を保護者とした時に「私の子どもは絵ばかり描いていて勉強しないんです。どうしたらいいですか。」と聞かれた。一般の保護者は子どもが絵を描いたりものを作

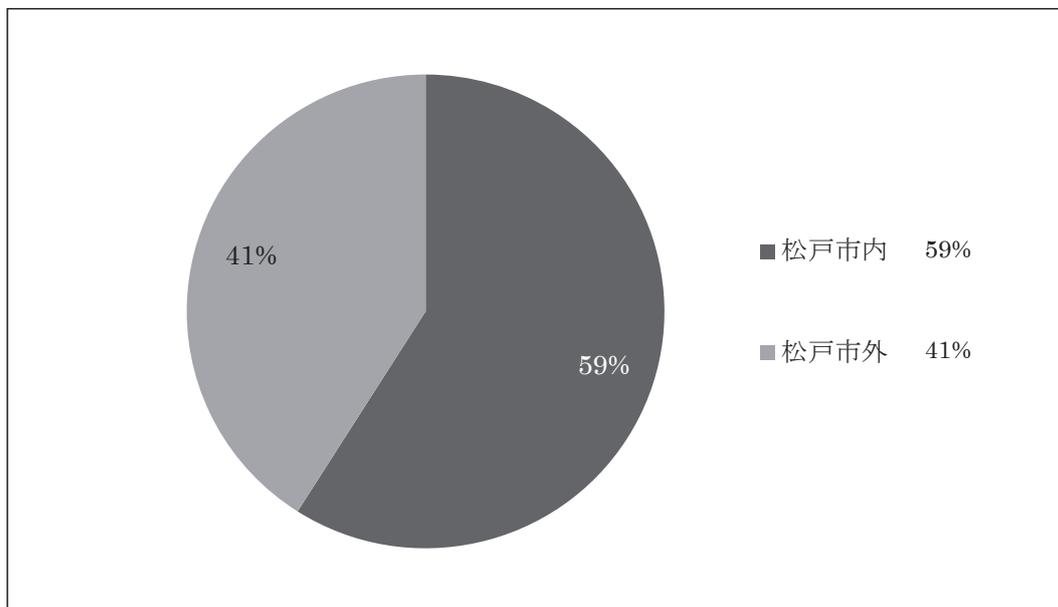
ったりすることを勉強だと思っていないという事実がある。これは国数英理社といったものがカリキュラムの中心になった教育が続いていると親自身が影響されている。ところが今日の活動を見ると、もの作り、すなわち図画工作造形教育のカリキュラムが中心に据えられている保育的な活動。子どものそれまでの経験全てがここで造形活動を通じて生かされている。また、わからないことを先生に聞くのではなく友達同士で教え合い、友達が教師になっている。これは教育の場面で重要なことだと思う。今日の活動の中で自分が得た数的な経験が活用されているし、国語の経験も活用されている。活用されることによって頭に定着される。今日の活動はカリキュラムの周りに置かれている教科（美術、図工、体育など）が中心となって、子ども達が生き生きと活動できていて、その中で日頃経験している材料や道具に対するいろいろな知識がお互いに活用し合っている姿を見て嬉しく思った。

大成先生：今回こういう研究会が大学でできたということはある意味画期的なことだと思う。子ども達が、普段学生が学んでいるこの図工室に来て、卒業生がここへ来て研究保育を行う。そしてそれを今学んでいる学生達が見て学ぶ。それを保育者や保護者が一緒にその状況の中で学んでいくというのは本当に画期的な素晴らしい研究保育ができたということで嬉しく思っている。これを機会にどんどん続けていけるといいと思う。特に今日記録を撮っていた中で動く仕組みにこだわっていた子どもが自分も気になっていた。回る仕組みをずっと追求し、今日の活動の中でもまた違った形で追求していて、ここだけで完結しているのではなく、前やこの次に繋がっていけるようなものなのではないかと思う。その中の一回を切り取り、造形活動はなぜ子ども達に必要なのかをしっかりと検証することでわかると思う。そのためのドキュメントということがまず重要性があり、「可愛く写真が撮れた」ということではなくこの子がこの活動の中で、他の子ども達に影響されて作ってそれをまた他の子ども達にどの様に伝えていくかは、個で作っているが実は集団の中で自分がやっている活動はあるということを、ドキュメントの中で見ていると発言の中で見えてきたりする。継続的にこのような研究会を続けていき、松戸の保育士さん達にたくさん来ていただいて、松戸全体で子どもの造形活動をみんなで考え、みんなが市民の方と一緒に大学も造形のことについて考え継続的に取り組めると良いと思う。

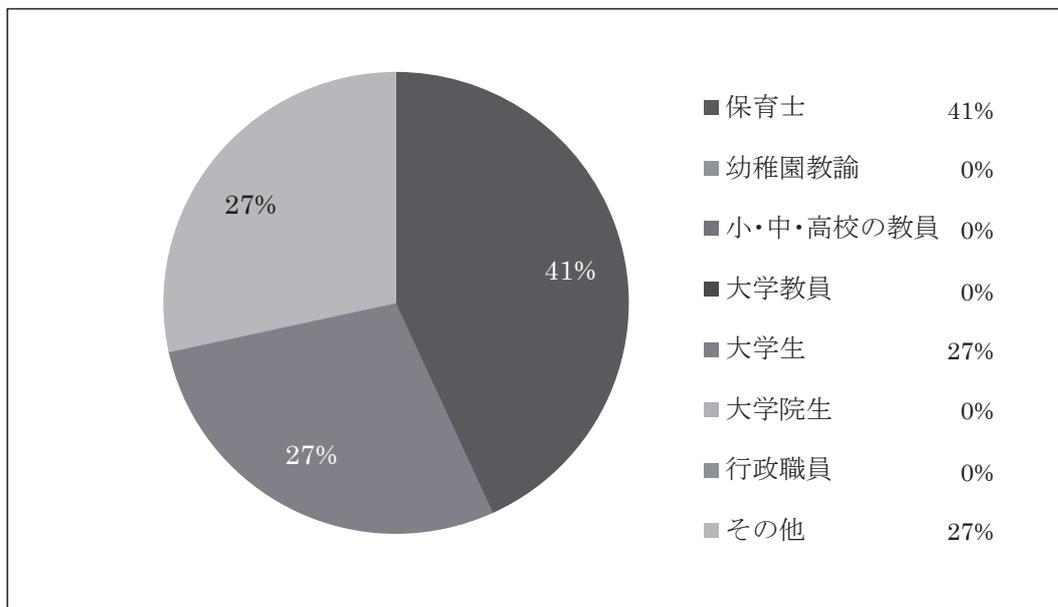
(c) アンケート集計結果

(参加者：受付人数 52名、回答者数 22名)

Q1. どこからいらっしゃいましたか？



Q2. 所属



※その他（6名） ・通信学部生 ・保護者 ・公務員
・アート系市民活動団体臨床美術士、アーティスト

Q3. 公開研究保育について、どのように感じられましたか？

・保育士さんも、素材集めのときから、こだわっているということを感じました。見る人によれば、箱もトイレットペーパーの芯も、いらぬものかもしれないが、宝物なんだというのを改めて実感しました。絵の具やペンなど、汚れてしまうのを気にしてしまう大人がいるけれど、保育現場だけではなく、家庭にも広がっていくのは良いと思いました。

- ・保育士自身も、保育士を目指す学生としても、とても良い学びの場になるのだと感じました。
- ・製作だけという部分的な保育を見ることが出来て新鮮だった。子どもの新しい目が輝いている姿を見てウキウキした。
- ・子どもの姿から学ぶことが多かった。素材を手にしたとき、ただ眺める子もいるし、動かしたり、たたいたり、といった動的なアプローチを行う子もいることが興味深かった。
- ・自分では考えられないようなアイデアや指導方法が見られて学びになりました。
- ・子ども達の様子を見たり、口頭発表をきかせて頂きとても勉強になりました。導入のしかたがとても素敵で、子ども達がふだんと違う環境でもいっしょんで材料にひきつけられる様子を見て本当に良い学びとなりました。
- ・とても貴重なものを見ることができ、ありがとうございました。今回見学してみて、親が子供の活動をきづかせないうちに制限していることが多いと感じ、なるべくさせてあげなければならないなと思いました。
- ・保育や造形を専門にされている方々の視点からみたお話をきけて貴重な体験をさせていただきました。作成過程の子供の様子を見れたのもありがたいものでした。
- ・保育、造形に対しての先生方の姿勢にただただ感動と、自分の造形教育に対して反省しました。
- ・これからも続けて下さい。子供たちが、いっぱいものづくりができるように。ものづくりが好きな子に♡なりますように。←やはり、大人がその環境を提供してあげることが大切。
- ・初めての参加です。自分の子どもの子育て時代に、参観するのは異なる視点で見ることができました。
- ・子どもたちが、新しい素材を発見したり、発想が浮かんだときに嬉しそうにしていたのが、とても印象的でした。
- ・子どもが造形活動の中で、どのように素材と関わり、どの様に作り上げていくのかという一連の過程を見られて良かった。それぞれの子のペースで作品が出来上がっていくのが面白く興味深かった。
- ・子ども達が自分の意志で行動し、考え、楽しんでいる姿が見られました。
- ・一つのテーマについていろんな方に見て、感じてもらう事が出来る良い場だと思った。
- ・「つくりたいものつくろう」の研究保育として、十分に理解することができ、子どもたちの夢中になる姿を見ることができた。公開保育というものが初めてだったので、保育を見るということで客観的な視点で感じることもできたと思う。
- ・子どもの可能性は無限大だと感じました。
- ・普段、同じクラスのスタッフの保育しか見る事ができないので他の保育者の保育を見る事はとても刺激になった。
- ・子どもたちがとても楽しそうにそれぞれ自由に作品を作っていてよかったですと思います。
- ・普段自分が行う保育について見直す機会になった。様々な意見がきけて参考になった。特に保護者の方がどういう思いでいるのか直接聞くことができたことが大きい。

Q4. 研究会趣旨「活動の過程が学びとなる造形」「ドキュメンテーション」について、 どのようにお考えになりましたか？

- ・“つくりたいもの”だから、何をつくっても良い。完成した作品にも決まりもないから、子ども達が活動の中で経験する過程も、個々に異なる実際に経験するからこそ、身になるのだと感じた。
- ・ドキュメントで見ることで後程振り返り、学び、それを次に活かしていくことが重要なのだと思いました。
- ・過程を大切にすることで子どもの成長や、製作することの楽しさに繋がっていくのではないかと考えさせられた。
- ・多くの記録を残しておいて、後に必要な部分を取り出す仕組みを考えたい。
- ・ドキュメンテーションを行うことで振り返り、さらに今後の課題が見えてくるので色々な所で活用できる場面がくれば良いと思いました。
- ・ドキュメンテーションというのにはじめて参加させて頂き、作品づくりの“かてい”の重要性や、子どもの興味関心をとらえるのに重要なものだと感じました。
- ・子供たちの造形活動を通して、つくることだけでなく人との関わりあいが見れたりとても参考になりました。
- ・子供を枠にはめない、という点反省しました。今後の育児に生かします。
- ・石川さんのとことん子どもの自主性を大切にする姿勢がいいなあと感じました。ドキュメンテーションで活動をふり返ることで改めて気づくこともあり、おもしろいと思いました。
- ・ドキュメンテーションというもの自体、今日初めて知り、パワーポイントで活動を客観的に見ることで、振り返りがより深くできることを知れました。私も今後機会があれば行ってみたいです。
- ・最後の子どもの発表をもっとたくさん聞いてみたかった。ドキュメンテーションでは、自分とは違った目線から見た子どもの姿を捉えていて勉強になった。
- ・活動の過程が学びとなるのは造形の他にも遊びや基本的な生活習慣など子ども達のまわりに存在する環境全てなのだと改めて感じた。ドキュメンテーションはとても良い事で、ふり返る事で気付く事ができるので自分の活動でも取り入れていきたい。
- ・日々の保育の中でなかなかその場面を記録し、それを次に活かす事が出来ていないのが現実。自分の保育の中でどう造形を取り入れていくか、ドキュメントをすることで子どもの姿、次人の保育の反省が見えてくると思うので考えていきたい。
- ・保育の中で全体を見ていても、やはり限界があることを常に感じる。ドキュメントで細かい部分を見逃さなかったり、1つ1つのことを深く考えられるということにとってもいい方法だと思えた。
- ・ドキュメンテーションを通して、その子1人1人の考えかた、興味のある物などが分かり良かった。
- ・活動を記録し、振り返る事でその場では分からなかった事が分かったり、子どもがどの様に表現をしていくのかを再度見る事が出来るのが良い事だと感じた。
- ・その場では気づく事が出来なかったことをドキュメントを通し、知ることができ、次活動する時にいかしていけると思いました。
- ・子ども自身が発見して気付きを大切にしていきたいと思った。子どもの目線、気持ちになって見守ることがどれだけできているか考えさせられた。

Q5. その他のご感想があれば、お書きください。

- ・研究保育だったが、私も子ども達と一緒に作りたかった。環境が大切ということと、5領域の繋がりを改めて実感することができた。
- ・保育士の姿、子ども達の姿から大変多くのことを学ばせていただきました。普段ではできない貴重な体験でした。ありがとうございました。
- ・イキイキした子ども達の姿と、先生方も一緒に楽しんでいる様子が、とても印象的でした。本日は貴重なお時間をありがとうございました。
- ・本日はありがとうございました。
- ・子どもたちが楽しく取り組んでいて、幸せそうに見えました。
- ・今日一日研究会にでて良かったです。
- ・外部の方から学べるチャンスがなかなかないのでまたこのような機会があったら参加したいです。
- ・加配の必要な子が増えている今、公開保育の内容をそのまま行う事に不安が残った。その点も新たな課題だと思う。
- ・子ども達の姿を見て、色々な発想を出す子、子ども達同士のやりとりが沢山見られる場であった。環境設定の大切さをとても勉強になった。
- ・はさみや、のり、絵の具等しっかり使えている子が多かったので、正しい使い方を伝えるのは小さいうちから教えていきたいと思った。
- ・導入や環境などとても考えさせられる事が多かったです。今回のことをいかして保育していきたいと思います。とても勉強になりました。ありがとうございました。

(d) まとめ

公開研究保育のアンケート結果は、回収率が低く、数値的にはあまり参考にならないが、保育士、学生については、アンケートの回収率が良く、自由記述などが参考になる。

Q1では、松戸市内が59%と、前回のシンポジウムと比べても地域住民が多く集まったことが分かる。身近な地域の保育の在り方に関心が高かったと言える。また、所属については、保育士、学生、その他が多くなっている。公開保育については、以下のような意見でまとめることができるであろう。

- ・保育者や学生にとって、公開研究保育は、貴重な学びの機会であり、刺激になった。
導入の仕方など、指導法が学べた。
 - ・保護者として、子どもの取り組む姿を見ることができ、子ども理解が深まった。
 - ・保育者、保護者とも、造形の専門的な話が参考になった。
- また、Q4の活動のねらいやドキュメンテーションについては、
- ・活動の過程が主題となる題材について
作ることを通して、コミュニケーションの力など様々な力を育むことが分かった。
テーマの重要性がよく分かった。
 - ・ドキュメンテーションの理解（振り返り、学び、活用等）
活用方法について考えたい。
指導の改善に生かせる。
子どもの姿を改めて確認することができる方法。

Q 5 自由記述では、今回の研究保育に対する満足感を述べている方が多く、良かった。また、導入や環境構成の重要性など保育者、学生にとって、特に学びが大きかったと感じる。

また、研究保育は、保育関係者のみで行われることが通常であるが、今回の研究保育は、保育者、学生、大学教員その他教育関係者、保護者、地域の方々の参加があり、研究保育としては異例の事であった。レッジョ・エミリアでは、保育者と保護者で研究会が開かれていることから、様々な立場の人が集まり、地域の子育てについて、話し合えたことはCOC事業ならではの研究保育であり、有意義な研究会であった。

5. 学生ボランティアの記録

H25年10月～H26年3月までの、「子どものアート研究会」での学生ボランティアの記録
ボランティア先は、アートパークで連携している松戸市の保育所KEYAKIDSである。

(1)「玉入れ合戦」ニューズペーパー in ダンボール

担当教員 北沢

参加学生 聖徳大学短期大学部保育科1年有志

1 F 藤原、鹿又、志藤、福田

1 G 望月、小山、中川

日時 平成25年10月8日(火) 16:00～17:30

対象 4, 5歳児

ねらい 勝敗を競い、ルールを守りながら遊ぶ楽しさを味わう。また、このゲームを通して、学生と保育士、幼児が楽しくかかわりあう。

準備

新聞紙(50枚程度)、ビニールテープ(赤、青各10本) ダンボール(「おかしな家」で使用したもの。

(2個) ビニール袋(大、2枚) 鉢巻(画用紙と輪ゴムで作ったもの。赤、青各20個) ホイッスル

学生：各自ではさみ



(2)「クリスマスのかざりをつくろう」

担当教員 北沢

参加学生 聖徳大学短期大学部保育科1年有志

1 F 藤原、鹿又、志藤、福田、高橋

1 G 望月、小山、

日時 平成25年12月18日(水) 10:00～11:50

対象 4, 5歳児

ねらい

学生と保育士、幼児がクリスマスを楽しみにして飾りを作って遊ぶ。

準備

サンタの帽子、鈴(藤原、高橋、望月)

パネルシアターの小道具、パネル、パネルスタンド

木の枝、毛糸、麻紐、タコ糸、松ぼっくりその他の飾りの材料

はさみ(学生用4～5本、ハサミを入れておく缶)、グルーガン、木工用ボンド

ボンドをのせる皿、新聞紙、延長コード(3個口) 名札(ガムテープ) ゴミ袋



(3)「指でお絵かきしよう」

(アートパークで実施する「まつどAtelier」・「まつどMuseum」のプレ活動として実施)

担当教員：北沢

参加学生 聖徳大学短期大学部保育科有志

1A 加崎 黒田 桑原 竹迫 吹山

1D 石槻 鈴木 田川 千葉 犬飼

日時 平成26年5月23日(金) 9:50~11:30

対象 4, 5歳児

ねらい

幼児：手指で直接絵具の感覚を感じ、楽しみながら好きな絵を描く。

また、作品が完成したら、ダンボールの台紙に貼り、絵の周りを装飾して額縁を作り、自分の作品を飾って互いに鑑賞し合って楽しむ。

学生：幼児の造形活動の様子を観察し、1人1人の個性に応じた援助を行う。

活動や、作品のキャプションを書く事を通して、実践的に子どもの描画理解を深める。

準備

KEYAKIDS：8つ切り画用紙、絵具、絵具皿、手拭き用タオル

ボンド、はさみ、額縁装飾用の素材

大学：ダンボール、額縁用の素材、名札用ガムテープ、マーカー(4セット)、ドライヤー、キャプション用紙

学生の服装：汚れても良い動きやすい服装、または、エプロン



(4)アートパーク7ーみんなゲイジュツ化宣言

「まつどAtelier・まつどMuseum」

担当教員：北沢

参加学生 聖徳大学短期大学部保育科一部有志

1A 加崎 黒田 桑原 竹迫 吹山

1D 石槻 鈴木 田川 千葉 犬飼

当日の服装、持ち物等

白いTシャツ、長ズボン、スニーカー(汚れても良いもの)、水筒、タオル、

三角帽子、ベスト(自作のもの)

準備役割分担

学生 衣装の制作 ダンボール台紙の着色



KEYAKIDS 看板の制作

ワークショップの流れ

1. 受付をする。
画用紙(好きな色を選ぶ。裏に両面テープを貼る)と、おしぼりを受け取る。
2. お絵かきコーナーに行き、指で好きな絵を描く。
3. 絵が完成したら、受付に行き段ボールを選ぶ。
4. 額縁コーナーに行き、段ボールに両面テープで絵を貼る。
5. 好きな素材をボンドで貼り付ける。
6. 絵と額縁が仕上がったら、学生に声を掛ける。
学生に題名、名前、コメントを伝える。
学生は、キャプションを書き、額縁に貼る。自分で書ける子どもには書かせる。
7. 学生と松戸ミュージアムに行き、好きな場所に展示する。
イーゼルに置く。
紐に吊るす場合は、学生が目打ちでダンボール上部左右に穴を開け、紐を通して吊るす。
8. 作品を持ち帰る場合は、近くにいる学生に声を掛けてから、持ち帰る。

学生の主な仕事

受付係の子どもの補助

ワークショップに来た子どもたちの制作から展示までの全体の補助

全体を見て、必要なことを各自が考え行動する！

「木っ、ともだち・まつどMuseum」

担当教員：永井

参加学生 聖徳大学短期大学部保育科二部有志

3A 小池 小林 長根 長峰 松崎 吉原

当日の服装、持ち物等

ユニフォーム、長ズボン、スニーカー(汚れても良いもの)、水筒、タオル、帽子

準備役割分担

北沢 準備(当日使用する物品等の準備) 別紙
学生 ユニフォームの制作 看板制作、
ワークショップの準備

KEYAKIDS まつどMuseumの看板の制作

ワークショップの流れ

1. 受付をする。
2. 学生と子ども 10人でツアーを組み探検に出発する。(聴診器で木の音を聴く、木肌のフロッタージュ、木の洞回りを測定・・・)
3. 「木」の絵を描く。
4. 学生とまつどMuseumに行き、好きな場所に展示する。



(5)「クリスマスのかざりをつくろう」

参加学生 聖徳大学短期大学部保育科1年

1A 加崎 黒田 桑原 竹迫 吹山

1D 石槻 鈴木 田川 千葉 犬飼

日時 平成26年12月15日(月) 14:30~17:50

対象 4, 5歳児

ねらい

学生と保育士、幼児がクリスマスを楽しみにしてクリスマスツリーの飾りを作って遊ぶ。

準備

サンタの帽子(学生用) 毛糸、リボン、ポスカ、ボタン、シール、ラメのり、スパンコール、色画用紙等その他の飾りの材料、両面テープ、名前用タグ、輪飾り用折り紙、はさみ(学生用4~5本、ハサミを入れておく缶)、グルーガン(「魔法のボンド」)、グルースティック、木工用ボンド(ケースに入れて)、新聞紙、延長コード(3個口)、ブルーシート、目打ち、名札用ガムテープ、ゴミ袋

人形劇用幕と棒

KEYAKIDS: 子ども用はさみ、子ども用名札、のり、CD ラジカセ



6. まとめ

H25,26年度の研究成果と今後の課題について振り返りたい。本研究の成果は、最終的に、第3回「子どものアート研究会」の公開研究保育に集約できると考えている。研究表題でもある「松戸市における表現指導の実践的研究」の成果である。松戸市の保育の造形指導の発展や学生の学びの充実を考えた時、地域保育者と学生が共に学びあえるような組織が必要であると考え、新たな研究会として「子どものアート研究会」が組織された。

第1回研究会は「粘土を使った活動を考える」で、小串里子先生を招き実施した。美術室に200kgの粘土を持ち込み、保育者と学生と一緒にワークショップを行った。参加者は、幼児期における造形指導に於いて、全身の感覚を使う重要性に気付くことができた。造形活動を通して視覚、触覚、聴覚など五感すべてを使って感じ取る体験は、特に幼児期に於いて、感覚や感性を育成する上での必須の要素である。また、子どもの表現と大人の表現の違いについてもワークショップと講師の話で理論付けて考えることができた。

この成果をもとに、第2回研究会「芸術士と語ろう～子どもたちの創造性を育む文化芸術の役割について～」が企画された。高松市芸術士は、保育や美術教育関係者ならずとも、全国的に注目される行政機関が実施している芸術を取り入れた教育制度であり、COC事業の研究としてふさわしいテーマでもある。ワークショップ「色を感じる」では、芸術士の活動から、子どもが自分からやりたいことを見つけ楽しむことの大切さとその具体的な指導方法。また、シンポジウムに於いては芸術士派遣事業やレジョ・エミリアの活動から、子どもの表現と社会との結びつきや、大人の責任として子どもの文化芸術を大切にするような社会の仕組みや制度を作っていくこと、そのためには、地域社会全体の合意が重要である事等を参加者と共有することができた。また、この企画の実現には、高松市芸術士の協力はもとより、全国大学造形美術教育教員養成協議会（全美協）やPARADISE AIRとの共催ができたことも成果としてあげられる。全美協との共催により、この企画が全国的に周知され、いろいろな大学や教育機関、行政機関の方々にお集まりいただき、多様な見解から貴重なご意見やご教示をいただけたことは、我々の励みになった。また、PARADISE AIRとの共催では、芸術士の宿泊場所の提供という形で地域との協働が行えたことも成果である。

これら2回の研究会の成果から第3回研究会では、1人1人の保育者の日々の造形指導に対する疑問や迷いを共に考えていくことに取り組んだ。公開研究保育「つくりたいものつくろう！」として、保育者自身の持つ課題から出発し、課題解決の方策を示して一緒に考え、保育者自身の保育力の向上を公開研究保育として示そうと考えた。具体的には、研究会のメンバーである石川自身が「1人1人の子どもの思いを大切にしたい表現を一斉指導でも保証できるような保育」について、ドキュメンテーションの方法を用い、PDCAサイクルで改善を行った。これらのことから、公開研究保育の成果は、以下のような点にまとめられる。

- ・子どもたちの生きる力を育むような、造形表現指導の理念について共有ができた。
- ・保育者と学生の造形表現指導の研究の必要性から「子どものアート研究会」は、今後も継続して実施する事になった。
- ・ドキュメンテーションの活用で、保育の質を向上させる事ができた。
- ・課題解決型PDCAサイクルによる保育課題解決の方法を示した。

これらは、決して新しい理論ではなく、すでに広く行われている考え方や方法である。しかし、造形表現指導では、特に顕著な成果を得る事ができた。今後の学生指導にも生かせると考えている。

また、筆者自身、今回の研究保育の助言指導を行うことにより、多くの貴重な経験をする事ができた。保育士1人1人の考えを尊重すること。気づきを大切に一緒に考えて行くこと。何より、一方的な知識の教示より、自分の問題意識から出発して課題解決を行うことは、保育者自身の主体的な研究意欲が高まる事を実感した。実施した石川等の感想も、「自分たちの疑問が、解決できてスッキリした。」「今は、もっと学びたいと思うようになった。」「日々の造形指導について改めて考える事ができた。」「この研究保育を機会に、クラス1人1人の子どもの表現について、ねらいを持って見る事ができた。」などと、実施後の自分の教育観の変化や満足感を述べていた。

そして、何よりも保育者自身の資質の重要性を感じた。実施者石川、高木、ドキュメンテーション担当生沼、大和田は、保育に対する強い情熱と創造性を持ち、子どもを第1として判断できる力、学ぼうとする意欲、実行力とエネルギーがあり、また4人のチームワークの良さが保育の質を高めていて、皆素晴らしい保育者である。日々の忙しい保育の中、研究保育に向けての準備は大変であったと思うが、充実した研究会を行う事ができたのは、この4人の力である。また、松戸市に、この様な本学の卒業生でもある保育者がいることは心強く、本学の教育力の高さも改めて実感する事ができた。今後も、保育者養成を行う教員として、卒業してからも学び続けられるような学生の資質の育成を行っていきたい。

今後の課題としては、「子どものアート研究会」の運営方法や、メンバー構成であると考えている。25、26年度はCOC事業の助成を得ることができ、研究会のテーマについても、その枠内で考える事ができた。次年度以降も「子どものアート研究会」は継続するが、今後もより多くの保育者と学生が参加できるような方策を工夫して行きたい。また、メンバー構成については、研究会に参加した学生が卒業して保育者となり、研究会に戻って学ぶサイクルが出来つつある。しかし、より多様な立場の地域の保育者を巻き込んでいくことも重要であると考えている。また、保育者自身が自主的に研究会を運営していくことも今後の課題としたい。

本研究を振り返り、ご指導いただいた多くの先生方や、地域の保育者、行政、市民の方々に研究代表者として深く感謝を述べたい。

研究代表者 聖徳大学短期大学部保育科 北沢昌代